筑波大学博士（文学）学位請求論文

ウィトゲンシュタイン「心理学の哲学」の研究

―『哲学探究』第 II 部の主題と構造の解明へ向けた手稿群の系譜的分析 ―

菅﨑　香乃

２０１８年度

凡例

一．引用中の強調はすべて、ウィトゲンシュタインによる。傍点は、出版されたテキストの場合にはイタリックによる、手稿の場合には下線による強調を表す。

二．引用中の〔〕は、引用者による補足を表す。

三．ウィトゲンシュタインの著作については、以下の略号を用い、ページ数、あるいは節番号にて言及する。

未刊行の遺稿については、*Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition* を参照し、手稿は MS、タイプ原稿は TS とし、von Wright による整理番号を付した（cf. von Wright(1993)）。

BB『青色本』『茶色本』: *The Blue and Brown Books – Preliminary Studies for the 'Philosophical Investigations'*

CV『反哲学的断章』: *Culture and Value*

LW1『ラスト・ライティングス１』: *Last Writing on the Philosophy of Psychology: Preliminary Studies for PartII of Philosophical Investigations,* vol.1

LW2『ラスト・ライティングス２』: *Last Writing on the Philosophy of Psychology: The Inner and the Outer*, vol.2

OC『確実性』: *On Certainty*

PI1, PI2『探究』第 I 部、第 II 部：*Philosophical Investigations*

（第 II 部は、Blackwell 第４版で “Philosophy of Psychology – A Fragment”と変更されたが、本稿では慣例に従って、第 I 部および PI1、第 II 部および PI2 で通した。）

RC『色彩について』: *Remarks on Coulor*

RPP1『心理学の哲学１』: *Remarks on the Philosophy of Psychology,* vol.1

RPP2『心理学の哲学２』: *Remarks on the Philosophy of Psychology,* vol. 2

TLP『論考』: *Tractatus Logico-Philosophicus*

WLPP『講義 1946-47』: *Wittgenstein's Lectures on Philosophical Psychology 1946-47*

目次

序論　本研究の目的 1

１部　本論のための予備的考察
１章　心理学の哲学テキスト群の概要 3
　１節　心理学の哲学テキスト群に含まれるテキスト 3
　２節　『探究』第 II 部を構成するテーマ一覧 3
２章　心理学の哲学テキスト群に関する研究の状況 5
　１節　先行研究にみられる争点と本研究の位置づけ 5
　２節　先行研究の問題点と本稿の課題 7
３章　本研究の方法論 9
　１節　テキストの分類 9
　２節　スレッド-シークェンス法の概説 11

２部　準備稿（MSS130 中盤～137 前半）の系譜的分析
４章　ムーヴメントの分割と全体の流れ 14
５章　MI（MS130 中盤）の分析 16
　１節　主題一覧 16
　２節　各主題と関連する問い 17
　　１項　α：音楽の理解とそれに類する事例 17
　　２項　β：多義語、矛盾、自己言及文 19
　　３項　δ：意味感覚、意味盲 19
　　４項　ε：アスペクトを見ること 21
　　５項　γ：概念形成、自然誌 24
　３節　まとめ――準備稿における MI の位置づけと『探究』第 II 部との関係 26
６章　MII（MSS130 後半～131 終盤）の分析 28
　１節　MII-1：どのような哲学的問題が扱われるのか 28
　　１項　MI の論点まとめ 29
　　２項　問いの再構成 31
　　３項　まとめ――MII-1 の流れと MI との対応 35
　２節　MII-2：精神的な過程に関する問いの批判的な検討 36
　　１項　意味体験に関する問い 36
　　２項　問いへの応答 39
　　３項　そのとき何が生じたのかという問いは、なぜ絶望的なのか 50
　３節　MII-3：新しい思考法への転換 52
　　１項　プリミティブな像とは何か 53
　　２項　混乱した像はどこから来るのか 58

３項　新しい思考法とは何か……67
４節　まとめ――MII の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部との関係……69
７章　MIII（MSS131 終盤～135 前半）の分析……72
１節　MIII-1：MII の付論……73
１項　アスペクトを見ること……74
２項　まとめ――MIII-1 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響……75
２節　MIII-2：講義ノート……76
１項　心理学的概念の系譜……77
２項　概念的探究とは何をするのか……77
３項　まとめ――MIII-2 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響……78
３節　MIII-3：MIV に向けた準備……79
１項　アスペクトを見ることに関する二つの誤った立場……79
２項　ウィトゲンシュタインの立場と MIV へ向けた課題……80
３項　まとめ――MIII-3 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響……82
８章　MIV（MSS135 後半～137 前半）の分析……83
１節　MIV-1, 3：心理学的概念の系譜……84
１項　心理学的概念の系図……85
２項　意識状態、傾性、行為……86
２節　二つの「見る」の分析……88
１項　IV-2：「見る２」の新しい配列とはいかなるものか……89
２項　IV-4：残された問題……96
３項　二つの「見る」のちがいに関する成果と課題……103
４項　まとめ――MIV-1~4 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響……105
３節　MIV-5：他人のこころに関する不確実さ……105
１項　他人のこころに関する不確実さはどこから来るのか……106
２項　不確実さを記述するための新しい概念世界……108
３項　まとめ――準備稿における MIV-5 の位置づけと『探究』第 II 部への影響……110
９章　総括――準備稿において何が達成されたのか……111
１節　「概念」の射程……111
２節　像による概念の説明……111
１項　何が問題であったのか……111
２項　像による概念の説明とは何か……112
３節　概念の使用法……113
１項　その表現はどのように使われているのか……113
２項　新しい用法に関する概念的探究……114
４節　まとめ――準備稿において何が達成され、どのような課題が残ったのか……114

３部　準備稿以降の展開
１０章　二次手稿の展開 116
１節　アスペクトを見ることの哲学的問題とその解消 117
１項　アスペクトを見ることの哲学的問題とは何か 117
２項　二つの「見る」、再考 118
３項　まとめ――アスペクトに関する難問をどう乗り越えればよいのか 120
２節　意味体験の表現をどう理解すればよいのか 121
３節　まとめ――二次手稿と準備稿の関係 123
１１章　『探究』第 II 部の構成と目的 125

結論　準備稿の系譜的分析は『探究』第 II 部の解明に資するか 129

参考文献 134

序論　本研究の目的

『探究』第 II 部において、ウィトゲンシュタインが描きだそうとしていることは何か。このテキストは、かれのまぎれもない主著の一つである『探究』第 I 部と併せて、一冊の書籍として出版され、また、そこに含まれた多様なテーマは、とりわけアスペクト知覚と意味体験を中心に、これまでも高い関心が寄せられてきた[1]。にもかかわらず、この基本的な問いは、十分な答えが与えられないまま残されている。つまり、テキストとしての重要性は認識されていながら、われわれはいまだ、かれの目論見を十分には理解していないのである。

その理由はまずもって、ウィトゲンシュタインが自分の考察の目的について、このテキストの内部でも他の箇所でも、明示的に語っていないということがある。加えて、このテキストにはアスペクトや意味体験、「信じる」「夢をみる」「思いだす」、あるいは感覚や情動といったさまざまなこころにまつわる概念、さらに生活形式と概念形成の関係や心理学に関するコメントまで、あまりに雑多なテーマが含まれていること、さらには、かれの書いたものの多くに当てはまる特徴ではあるが、それらに関する考察が断章形式で並べられ、各考察同士がどのような論理的関係にあるのかが判然としないことがあるだろう。それゆえ、テキストを冒頭から順に読むだけでは、その主題を推測することさえ困難なのである。

『探究』第 II 部のこのような性格に鑑み、本稿では、このテキストが作成されるまでにかれが作成したテキスト、とりわけ手稿群に注目したい。ウィトゲンシュタインが、日々の思考をノートに書き溜め、それらを選別、推敲し、節や章に構成することで、さらなるテキストを作成していたことはよく知られている。『探究』第 II 部も例外ではなく、第 I 部最終版の完成以降のおよそ三年間（1946 年春～49 年初夏）、いわゆる「心理学の哲学」と呼ばれる時期の手稿およびタイプ原稿（以下、「心理学の哲学テキスト群」と呼ぶ）を基に、作成された。つまり、これらのテキスト群には、編集がほどこされる以前の思考を、その生成過程のままにみることができるのである。そこで本稿では、第 II 部の起源である手稿群に遡って、第 II 部に収められた個別的な主題が、どのように形成され、展開されたのか、その系譜的な分析を試みる。

つまり、本稿の課題は、以下の二つである。また、その課題を達成するためには、それぞれ二つの問いに答える必要がある。

課題１：『探究』第 II 部の全体像の解明
　　問１－１：第 II 部の目的とは何か
　　問１－２：第 II 部は、どのように構成されているのか
課題２：心理学の哲学テキスト群における個別的主題の系譜的分析
　　問２－１：それぞれの主題がどのように形成、展開されたのか
　　問２－２：各主題はどのように連関しているのか

---

[1] アスペクトに影響を受けて「理論負荷性」を論じたハンソンを筆頭に（cf. Hanson(1958), (1969)）、ウィトゲンシュタイン解釈者たちもさまざまな研究を提示している。意味体験に関しては Bouveresse(2007), Diamond(1991), 古田(2018)や ter Hark(2011)、アスペクトについては野矢(1986)(1988), Verdi(2010), 山田(2015)などが主要なものとして挙げられる。ほかにも、Day and Krebs (ed.) (2010)は、アスペクトのみを主題とした論文集である。

以下では、個別的な主題の系譜的分析（課題２）を通じて、『探究』第 II 部の全体像の解明（課題１）を目指す。まず、課題２に取りくむために、二つの問いを立てたい。すなわち、個別的な主題がどのように形成、展開されたのか（問２－１）、またそれらがどのように連関しあっているのか（問２－２）である。なお、課題２においてとりわけ重視すべき主題は、心理学の哲学テキスト群においてもっとも紙幅が割かれている、アスペクトを見ることと意味体験である。この二つの主題に関する系譜的分析が、本稿の中心をなすことになる。そして、その成果を踏まえ、『探究』第 II 部の全体像を解明したい。それはつまり、手稿群の系譜的分析によって明らかになった各主題の連関が、『探究』第 II 部の構成においてどのように再現されているのか（問１－２）を理解することである。この問いに答えることができれば、『探究』第 II 部の目的とは何か（問１－１）にも、自ずと答えが導かれることになるだろう。なお本稿は、第 II 部の全体像をつかむことを目的としているため、各節の詳細な解釈には踏みこまず、全体の構造と目的を指摘するにとどめる。

本稿１部では研究の準備として、まず心理学の哲学テキスト群の概要を確認した後（１章）、先行研究を概説し、本研究の位置づけと課題をより明確にする（２章）。そのうえで、本稿が採用する方法論を概説し、そのスキームに基づいてそれぞれのテキストの性格を確定する（３章）。以上を土台に、２部において、心理学の哲学テキスト群、とりわけその準備段階において、各主題がいかなる経過をたどって形成されていったのかを時系列に沿って読解する（４章～９章）。そしてつづく３部において、２部で検討した準備段階のテキスト以降の展開を踏まえたうえで（１０章）、各主題が『探究』第 II 部においてどのように構成されたのか、その構造と目的を解明する（１１章）。

１部　本論のための予備的考察

１章　心理学の哲学テキスト群の概要

テキストの系譜的な分析に入る前に、本研究が依って立つ基本的な考え方を確認することからはじめたい。本章では、心理学の哲学テキスト群の全体像を確認する。心理学の哲学にどのようなテキストが含まれるのかを簡単に述べたうえで（１節)、『探究』第 II 部を構成するテーマを一覧で提示する（２節)。

１節　心理学の哲学テキスト群に含まれるテキスト

『探究』第 I 部最終版の完成から第 II 部作成までの三年間のあいだに、ウィトゲンシュタインは、計十一冊の手書き原稿（MSS130 中盤～138, 169, 144）と、三組のタイプ原稿（TSS229, 232, 234）を作成している。本稿では、これらのテキストを「心理学の哲学テキスト群」として扱う。

その形成過程を簡単に述べておく。『探究』第 I 部完成直後から書き溜められた手稿八冊（MSS130 中盤～137 前半）から抜粋された考察が、二冊のタイプ原稿（TSS229, 232）にまとめられた。これが、現在『心理学の哲学１、２』として知られるテキストである。その後に書かれたのが、MSS137 前半～138 であり、これは『ラスト・ライティングス１』として出版された。また、同時期に書かれたと推測されている MS169 も、『ラスト・ライティングス２』に所収されている。また、この間に書かれた芸術や宗教に関するコメントの一部は、von Wright によって抜粋され、『反哲学的断章』に収められた。その後、TSS229, 232 と MSS137 前半～138, 169 から抜粋された考察は、テーマに即して並べ替えられ、その成果がルーズリーフに清書された（MS144)。そして、この清書稿に若干の編集を加えてタイプされたのが、現在『探究』第 II 部として知られる TS234（所在不明）である。出版は、いずれも死後である。

以上の作成過程を踏まえれば、心理学の哲学テキスト群の総括として作成されたのが、『探究』第 II 部であることは疑いない。そこで次節では、第 II 部に含まれるテーマを示すことで、心理学の哲学テキスト群でどのような主題が扱われているのかを、概観しておきたい。

２節　『探究』第 II 部を構成するテーマ一覧

心理学の哲学テキスト群で登場する諸テーマを概観するには、『探究』第 II 部をみるのが早道である。第 II 部以前のテキストにおいてのみ語られるテーマもあるが、ほとんどのテーマは第 II 部にまとめられた。

『探究』第 II 部は、計 372 の節が 14 章 (i～xiv) に振りわけられるかたちに構成されている。おおむね一つの主題に一章が当てられるかたちで、章立てがされているようであるが、vii 章と xi 章は例外的である。以下に一覧を示すが、主題の切り替えに応じて vii 章は二つに（vii-1, 2 と表記)、xi 章は三つ（xi-1~3）に分けている。

さまざまな話題が取りあげられていることがわかるが、やはり注目すべきは、全体の２割弱を占める意味体験（ii, vi, xi-2 の三つの章で、計 67 節）と、全体の約４割にあたるアスペクトを見ること（計 150 節）という二つの主題である。この二つの主題がいかなる哲学的問題にかかわっているのかを理解することが、心理学の哲学テキスト群を読解するうえで、もっとも重要になる。

表 1-1『探究』第 II 部の主題一覧

章（節）番号	主題	章（節）番号	主題
i (1-6)	生活形式、生活の型	ix (67-85)	内観
ii (7-16)	意味体験（多義語の意味）	x (86-110)	信じる、思う（glauben）
iii (17, 18)	表象像	xi (111-364)	アスペクト、意味体験など
iv (19-26)	他人のこころ	|xi-1 (111-261)	アスペクトを見ること
v (27-34)	心理学	|xi-2 (261-300)	意味体験
vi (35-51)	意味体験（語感）	|xi-3 (301-364)	他人のこころ
vii (52-55)	夢と像	xii (365-367)	概念形成
|vii-1 (52, 53)	夢	xiii (368-370)	思いだす
|vii-2 (54, 55)	像	xiv (371, 372)	心理学
viii (56-66)	運動感覚		

２章　心理学の哲学テキスト群に関する研究の状況

本稿の課題を明確にするために、心理学の哲学テキスト群に関する先行研究を概観しておきたい。なお、テキストの系譜的な分析という手法を採る本稿の趣旨に照らして、各論的なテーマの解明や展開ではなく、テキスト全体の読解を何らかのかたちで目的としていると解釈できる研究に注目することとする。

１節　先行研究にみられる争点と本研究の位置づけ

先行研究の争点の一つは、心理学の哲学テキスト群の目的は何かという問題である[2]。これについては、三つの立場が示されている。

一．心理学的概念の分析、心理学的概念に関する見通しのよい記述を与えること
（Budd(1989), Chauvier(2007), Hacker(2010), Moyal-Sharock(2004), Schlte(2000), ter Hark(1990), von Wright(1982) ）

二．哲学的混乱の治療、哲学的混乱からの解放
（cf. *New Wittgenstein*, Fischer(2011)）

三．哲学的混乱からの解放、および、新しいやり方の提示
（cf. Hutto(2003, 2009), Kuusela(2008, 2013)）

---

[2]　もう一つ、『探究』第 I 部と第 II 部はいかなる関係にあるのかという争点があり、三つの見解が示されている。

一．第 II 部は第 I 部を改訂するために作成された
（Anscomb and Rhees(2001), Monk(1991), Venturinha(2010)）

二．第 II 部は第 I 部とは異なる新しい方向に展開している
（Hacker(2010), Kerr(2008), Moyal-Sharrock(2004), Schulte(2000), von Wright(1982)）

三．『論考』から『確実性』まで、ウィトゲンシュタイン哲学全体の一貫性を重視する
（ter Hark(1990), cf. *New Wittgenstein*, Venturinha(2010) ）

まず、『探究』第三版までの Anscomb、Rhees の序文、すなわち「ウィトゲンシュタインが自身の手でかれの仕事を出版していたとすれば、第 I 部の最後の三十頁ほど〔およそ 525 節以降〕の多くの部分を削除して、第 II 部の内容にさらなる素材をつけ加えて、その場所に置き換えただろう」（Anscomb and Rhees(2001)）という見解を支持する立場がある（一）。これがもっとも古典的な解釈と言えよう。

この見解に反対するかたちで登場したのが、二つ目の立場である。これは、von Wright の見解、「『探究』第 I 部は完成した著作であり、1946 年以降にウィトゲンシュタインが書いたものは、新しい方向性への発展を何らかの仕方で示している」（vonWright(1982) p.136）という見解を支持する立場である（二）。第 II 部と呼ばれていたテキストを第 I 部と切り離して『心理学の哲学――フラグメント』とした『探究』第四版や、『探究』第 I 部以降の展開をそれまでとは区別して、「第三のウィトゲンシュタイン」とする立場はこの見解に基づいている。

最後に、『探究』第 I 部、第 II 部のみならず、ウィトゲンシュタイン哲学全体に一貫性があると主張する立場が可能である（三）。「ウィトゲンシュタインの思考には重要な連続性がある」（Crary(2000) p.1）と主張する *New Wittgenstein* を、この立場に数えいれることができよう。

ただし、この問題は、本稿の守備範囲を超えており、本稿では扱わない。

三つ立場の詳細は、以下のようなものである[3]。解釈（一）によれば、心理学の哲学の目的とは心理学的諸概念（psychologische Begriffe）の分析、かれらの言葉で言えば、「心理学的概念の論理学」（Schlute(2000) p.7）「心理学的概念の地理学」（Hacker(2010) p.300）の解明であり、文献学的なスタンスで研究しているほとんどの解釈者がこちらの立場をとっている[4]。

そして、ウィトゲンシュタインにとって哲学の目的とは、哲学的混乱の指摘と解消、要するに「治療」であり、またそれに尽きると考える *New Wittgenstein* の立場をとれば、Chauvier も言うように（cf. Chauvier(2007) p.28）、心理学の哲学の目的もまた治療ということになるだろう[5]。また、「後期ウィトゲンシュタインは、治療としての哲学を支持し、かつ実践した」（Fischer(2011) p.254）と主張する Fischer もこの立場に数えいれることができよう[6]。ただし、これらは心理学の哲学テキスト群に関する文献学的な解釈を提示しているわけではない。この立場を解釈（二）とする。

これに対して解釈（三）は、哲学的混乱からの解放の後、われわれの日常的な言語実践を描く新しいやり方が提示されるという解釈である。治療の先にもまだ、哲学的思考が可能であると考えられているという点を重視し、本稿ではこの立場を（二）とは異なる立場として扱う。この立場には、Hutto(2003, 2009), Kuusela(2008, 2013)を挙げることができる[7]。

ここで本研究の立場を先に述べておけば、この第三の立場にもっとも近い。ただしこの立場と解釈される論者たちは、心理学の哲学テキスト群に関する文献学的な論述はしていないため、ウィトゲンシュタインが実際にどのような論理展開で両者を結び付けているのかは判然としない。それに対して、テキストの系譜的な分析に基づいて主張する点に、本研究の特長がある。

---

[3] 加えて、心理学の哲学テキスト群から『確実性』への移行期に当たる『ラスト・ライティングス２』（本稿で心理学の哲学テキスト群に含めている MS169 が、ここには含まれる）については、「主観性の新しい捉え方」の提示という別の解釈も提出されている（Laugier(2007)）。Laugier は「ウィトゲンシュタインが追求したのは、主観性を消去することや『外面化』することによってではなく、再定義することによって、主観性の非-心理学化（depsychologize）をすることである」と指摘している（Laugier(2007) p.151）。

[4] （一）とつぎに述べる（二）の立場は必ずしも両立不可能ではない。実際、心的概念の分析を主要な目的とする解釈（一）のなかには、治療的な側面に触れる解釈もある（cf. Hacker(2010), Moyal-Sharrock(2004) etc.）。しかしながら、この二つの目的がどのような仕方で共存しているのかについて、これらの解釈ははっきりとしたことを述べていない。

[5] *New Wittgenstein* は「哲学におけるウィトゲンシュタインの第一の目的は〔中略〕、治療的なものである」ということと「ウィトゲンシュタインの思考には重要な連続性がある」ということを標榜していることから（Crary(2000) p.1）、「心理学の哲学」テキスト群の目的も治療的なものだということが導かれる。

[6] Fischer の研究はウィトゲンシュタイン解釈というよりも、哲学的な方法論の一つとして、ウィトゲンシュタイン哲学を重視するものである。

[7] Hutto の定式化によれば、「〔ウィトゲンシュタインの方法における〕最初のステップは、われわれ自身を哲学的な神話から自由にすることであり、だから〔ある考えが神話でなくなったから〕と言って、新しい神話はつくらないというのが、つぎのステップである。その代わりに、もしわれわれにできることが残されているとすれば、心理に関するわれわれの日常的な実践を改訂することによってではなく、それに注意深く耳を傾けることによって、それは達成される」（Hutto(2003), p.142）。また、Kuusela は、ウィトゲンシュタインの「概念的探究の方法」として、「そのような〔現実の表現、描写の仕方につきものの概念的〕問題を解くためにわれわれに必要なのは、適切な表現、描写の仕方についてよく考え、明確にすることである。〔そして、〕表現や描写の新しいやり方を、誤解を招くやり方の代わりに考案する必要がある」（Kuusela(2013) pp.51-52）と述べている。
ただし、両者の立場がどのくらい重なるのかという点には、さらなる検討が必要である。

２節　先行研究の問題点と本稿の課題

では、解釈（一）、（二）の問題は何か。それはまずもって、どちらか一方を強調する解釈では、扱いきれない主題や問いが、心理学の哲学テキスト群に含まれることにある。それぞれの解釈の問題点を挙げておきたい。

心理学的概念の分析（解釈一）の問題点

・アスペクトを見ることや意味体験に紙幅が割かれる理由が説明できない

・『探究』第 II 部の作成過程と作成目的の齟齬

ウィトゲンシュタインが言及する心理学的概念全体を見わたせば、そこには当然ながら、感覚や情動、知覚や想像などが含まれる（cf. RPP1 183, RPP2 63, 148）。にもかかわらず、先にも確認したように、『探究』第 II 部は意味体験やアスペクトを見るという、それらに比べれば特殊な事例に、かなりの紙幅が割かれている。その事情は、準備稿においても変わらない。これらの事例に、ウィトゲンシュタインがこだわる理由はどこにあるのか。心理学的概念の分析という目的だけでは、この疑問に答えを出すことはできない。

また、「心理学の哲学」とは、「問題含みの心理学的概念に関して見通しのよい叙述をするために、文法的な素材を収集しようという試み」（Hacker(2010) p.305）だと、Hacker は言う。たしかに、さまざまな心理学的概念の分析が考察の目的であるとすれば、その論述は個別的な諸概念を一つずつ分析していくものになるだろう。そうだとすれば、心理学の哲学テキスト群のすべてが断片的な素材集だというのは、当然の帰結である。『探究』第四版で、それまで第 II 部とされていた部分を『心理学の哲学――フラグメント』と変更したことに、この見解は現れている。しかしもしそうだとすれば、『探究』第 II 部が、次章で詳しくみるように、何段階かの編集という手数をかけてまとめられたことの説明がつかなくなる。

治療的解釈（解釈二）の問題点

・心理学的概念の分析をどう扱うのか

心理学の哲学テキスト群のなかには、Hacker も指摘するように（cf. Hacker(2010) p.277）、ウィトゲンシュタインが治療すべき対話者が想定されていない考察が存在する。その最たる部分が、心理学的概念の分析である。そこにおいては、「体験」や「意識状態」「傾性」といったカテゴリーの明確化や、「考える」「見る」といった諸概念がどのカテゴリーに属するのかといった考察が展開される。哲学的な治療という目的の中に、こうした考察をどう位置づけるのかが、この種の解釈では問題になるだろう。それらの概念分析が、治療にとってどのような役割を果たすのかが説明できなければ、心理学の哲学に関する治療的解釈は、やはりテキストの実情を反映していないことになる。

以上の先行研究の問題点を踏まえれば、心理学の哲学テキスト群の系譜的分析と『探究』第 II

部の全体像の解明を目指す本稿にとって、とりわけ重要なのは、心理学的概念の分析と治療的な側面がどのように連関しているのか、また『探究』第 II 部を編集するに値する目的とは何かを明らかにすることだと言える。そしてその解釈においては、以下の二つの疑問への解答が示されねばならない。すなわち、アスペクト体験や意味体験に紙幅が割かれる理由がどこにあるのか、そして、心理学的概念の分析の役割とは何か、である。

３章　本研究の方法論

本稿の課題の一つは、心理学の哲学テキスト群における個別的主題の系譜的分析である。この課題を達成するため、本稿は、鬼界の提唱するテキスト読解の方法論（cf. 鬼界(2003), (近刊予定)[8]etc.）を用いる。

鬼界は、ウィトゲンシュタインのテキストが「本質的に独立した警句集ではなく、固有の内部的繋がりと秩序を持ち、それを通じて系統だった思考の流れを表現している」（鬼界(2003) p.12）ということを、「スレッド-シークェンス法」という読解法を用いることによって証明した。心理学の哲学テキスト群、とりわけ手稿群に残されたかれの思考の流れを可能な限り損なわずに再提示するために、本稿は、テキスト読解の方法論としてこれを採用した。

本章では、まず、鬼界の示すテキストの分類を、心理学の哲学テキスト群に当てはめて、各テキストの性格、およびそのどれが本稿の主要な研究対象となるのかを明らかにする（１節）。そのうえで、スレッド-シークェンス法について、概説したい（２節）

１節　テキストの分類

ウィトゲンシュタインがつねにノートを携行し、日々の思考を日記のように書きつけていたことは、よく知られている。鬼界は、それらの記録に、「前後を空行で区切られた」「最小単位」（鬼界(2003) p.14）が存在することを指摘し、ウィトゲンシュタイン自身の言葉を用いて、それを「考察（ベメルクング）」と呼んでいる。そうした考察をノートに書きつけることからはじまり、重要な考察を選別、分類し、並べ替えて、二次的なテキストをつくるという過程が踏まれることによって、ウィトゲンシュタインのテキストが作成されているのだと、鬼界は分析している（cf. 鬼界(2003) p.15）。そして、その過程が「〈一次手稿〉―〈最終手稿〉―〈一次タイプ原稿〉―〈最終タイプ原稿〉という四段階からなり、それに対応してかれのテキストにも四つのタイプが存在する」（鬼界(2003) p.19）と、指摘している。各々のテキストの特徴を、以下にまとめる（cf. 鬼界(2003) pp.19-22）。

・一次手稿　ノートに書き連ねられた一連の考察群。思考の生成の現場。
・最終手稿　ある主題に関してもっとも重要な一連の考察を、複数の一次手稿から選びだして書きおろされたテキスト
・一次タイプ原稿　同時期の一次手稿から、主題別に選りあつめられた「考察」をタイプさせたもの。将来へ向けた自分のための資料集
・最終タイプ原稿　ある主題に関する一連の思考の結果として、ウィトゲンシュタインが最終的で決定的とみなしたタイプ原稿

１章でも確認したように、心理学の哲学テキスト群には、計十一冊の手書き原稿（MSS130 中盤～138, 169, 144）と、三冊のタイプ原稿(TSS229, 232, 234）が含まれる。これらのテキストの作

[8] ページ数は未定であるため、引用の際には、元になった論文のページ数を併記した。

成過程は、おおむね鬼界の分類にしたがって理解することができる。ただし、心理学の哲学テキスト群においては、一次タイプ原稿と最終タイプ原稿のあいだにも、手稿（MSS137 前半～138, 169）が作成されており、これらを分類するために、本稿においては、「二次手稿」というカテゴリーを加えた。

表 3-1 心理学の哲学テキスト群の作成過程とテキストの分類

作成時期	テキスト番号	テキスト分類	
1945~46 春	TS227（PI1 最終版）	PI1 最終タイプ原稿	
1946 春~47 秋	MSS130 中盤～135 前半	一次手稿 1	準備稿
1947 秋	TS229（RPP1）	一次タイプ原稿 1	準備稿
1947 冬~48 夏	MSS135 後半～137 前半	一次手稿 2	準備稿
1948 秋	TS232（RPP2）	一次タイプ原稿 2	準備稿
1948 秋~49 初夏	MSS137 後半～138（LW1）	二次手稿 1	
	MS169（LW2 所収）	二次手稿 2	
	MS144（TS234 の下書き）	最終手稿	
1949 初夏	TS234（PI2）	最終タイプ原稿	

心理学の哲学テキスト群において、まず特徴的なのは、一次手稿が作成された後、そこから選別した考察からタイプ原稿を作成するという過程が二度にわたってくり返されていることである。1946 年春から 47 年 11 月までの考察（MSS130 中盤～135 前半）が、タイプ原稿 TS229（『心理学の哲学１』、計 1,137 節）にまとめられ、1947 年 11 月から 48 年 8 月までの考察（MSS135 後半～137 前半）が、タイプ原稿 TS232（『心理学の哲学２』、計 737 節）にまとめられた。これらの手稿（計 1,679 頁）は、そのほとんどに日付が入れられており、これらの元になるような手稿も存在しないことから、心理学の哲学の思考が生成した最初の現場、「一次手稿」に分類できよう。そして、それらを元に作成された二冊のタイプ原稿は「一次タイプ原稿」ということになる。ただし、これらのタイプ原稿では、考察はほぼ時系列のまま並べられ、主題ごとの編集はなされていない。このことから、最終タイプ原稿を見据えた資料集という性格が、より色濃いと言える。本稿では、これらの一次手稿と一次タイプ原稿を併せて「準備稿」と捉え、読解の主な対象としている。

また、一次タイプ原稿を作成した後で、もう一度手稿への記載が再開されることも（MSS137 前半～138, 169）、心理学の哲学テキスト群の特徴である。ただしこの手稿は、一次手稿とは性格が異なる。というのは、これらの手稿では、準備稿で展開しきれなかったテーマのさらなる追求に加え、最終タイプ原稿の章立ての構成にとりかかっている様子がみてとられるからである。このことを踏まえれば、準備稿よりも思考のフェーズが先に進んだと捉える方が適切であろう。そこで本稿では、準備稿の後に作成された三冊の手稿ノートを捉えるために、「二次手稿」という段階を加えることとした。

そして、一次タイプ原稿と二次手稿から選別された考察が、下書きの手稿（MS144）にまとめられる。そこからさらに、いくつかの考察の削除と順番の変更を経てまとめられたのが TS234

（『探究』第 II 部）である。『探究』第 II 部が心理学の哲学の最終的なテキストかどうかについて、研究者のあいだでコンセンサスはまだ成立していない[9]。しかしながら、少なくとも事実上は、第 II 部の元になった TS234 以降、かれはタイプ原稿を作成していないことを踏まえ、本稿ではこれを「最終タイプ原稿」として扱い、その下書きとなった MS144 を「最終手稿」として扱う。

２節　スレッド-シークェンス法の概説[10]

スレッド-シークェンス法を理解するために、まずは、鬼界が見いだしたウィトゲンシュタインの思考の特徴を引くことからはじめたい。

> ウィトゲンシュタインの思考は相互に緩やかに関連した一群の主題を巡って同時並行的に、かつサイクリックに進められる。こうした過程の紙上の痕跡としてのテキストは、幾つかの主題を巡る思考が交替に登場するという外観を呈する事になる。〔中略〕こうして互いに独立に展開された思考がある深さに達し、それまでは見えなかった主題間の関係が感知される時、それらを前提として初めて可能となるような新しい主題（問い）が登場し、思考の進路は大きく変化するのである。（鬼界(近刊予定), (2001)p.64）

ポイントは、関連する複数の主題が並列され、それらの相互関係によって思考が進展していくということ、そしてその特徴がそのままテキスト上にも反映されているということである。このような特徴をもつテキストが、主要な主題ひとつを中心に据えて、問いから結論まで連綿と著述がなされるテキストとは異なる読み方を要求するのは、当然であろう。

鬼界は、このような特徴をもつウィトゲンシュタインのテキスト読解のために、スレッド-シークェンス法を確立した。本稿では、なかでもとりわけ重要な四つの概念（ムーヴメント、スレッド、シークェンス、メタ哲学的コメント）について、必要となる範囲で概説しておきたい。

一．ムーヴメント

鬼界はウィトゲンシュタインの思考を「運動」として、「固有の始まりと目的を持ち、その目的が実現したとき必然的に終結するという明瞭な時間的形態を持つ思考の継時的動きとしての思考のキーネーシス」（鬼界(近刊予定), 鬼界(1998c) p.26）と捉えている。この洞察からまず得られるのは「思考の運動の最小単位」（鬼界(近刊予定), (1998c) p.28）であり、それが「ムーヴメント」、すなわち考察が始まる契機となる問いとその終結（典型的には、その問いに何らかの結論が与えられる）までのひと続きの考察ということになる。

本稿では、準備稿を四つ「ムーヴメント（以下、適宜Mと略記）I～IV」に分ける（四つのムーヴメントの分割に関する詳細は、４章にて述べる）。

9　註２参照。
10　本節は、菅崎（近刊予定）を一部用いている。

二．スレッド

そして、このムーヴメントを生みだす思考の活動体を、鬼界は「スレッド」と名づけている。「スレッドとはその活動が主題的統一を持つ継続した思考を生成するような思考活動体」だというのが、その簡潔な定義であり、「主題」「思考の要素」「思考領域」とも呼ばれる（cf. 鬼界(近刊予定), (1998c) p.31）。本稿でもこの用語法に倣い、「主題」という語を使う場合には「スレッド」を意味している。また、スレッドにはギリシア文字を当てる。

スレッドは、その核（具体的には、問い、テーゼ、概念の３つの可能性を鬼界は挙げている）の提示によってはじまり、その時点で、思考活動は「内包」され、「潜在的な形で既に存在」している（鬼界(近刊予定), (1998c) p.31）。換言すれば、テキスト上にある特定のスレッドが登場している場合にも、そこには、すでに登場した別のスレッドが潜在的に存在しているということだ。そして、スレッド同士が相互に関係しあうことで、ウィトゲンシュタインのテキストには、独特のダイナミズムが生まれることになる。また、思考活動が終わるのは、このスレッドに潜在する活動が現実化し尽くしたときだというのが鬼界の説明である。「一つの思考の運動はそこに存在するすべてのスレッドの核の内に潜在的に内包されている活動が現実に完全に実現されたとき完結し、運動としての潜在的存在を失い停止する。それが『問題の解明』と言われるものに他ならない」（鬼界(近刊予定), (1998c) p.31）。

スレッドは潜水艦に例えることができよう。ウィトゲンシュタインの思考においては、つねに複数の潜水艦（スレッド）が航行している。それらのうち、海面に現れる（テキスト上に現実化する）のは、限られた数艇にすぎない。しかしそうしたときにも、各艇は相互に連絡を取りあうことで航路は影響を受け、あるいはときに合体したり、分裂したりすることもあり、複雑な航路を描く。そして、動力が尽きたとき、潜水艦は停止する。この比喩においては、複数の潜水艦が海面上に残した航路が、テキストということになる。

三．シークェンス

「シークェンスとは一つあるいは複数の思考活動体〔スレッド〕が活動し現実化される場であり思考活動の同時的現在であり、同時にその現実化された活動が生み出した産物」（鬼界(近刊予定), (1998c) p.30）、雑駁に言えば、スレッドが現実化された当のテキストである。これは、「連続した思考時間」（鬼界(近刊予定), (1998b) p.56）として、ひと続きの小節の連なりとして確認されることになる。

ただし、本稿の研究対象である準備稿は分量が多く[11]、あまりに煩瑣になるため、シークェンスの詳細な分析を扱ってはない。

四．メタ哲学的コメント

最後につけ加えておくべきは、「スレッド」「シークェンス」に必ずしも組みこまれないような仕方で挿入される考察が存在するということである。その最たるものは「メタ哲学的コメント」

[11] 講義と同時期（詳細は後述）に書かれたメモを除いても、優に 150 以上のシークェンスが認められる。

すなわち、「現在進行中の哲学的思考そのものに対する反省的コメント」（鬼界(近刊予定), (1998c) p.39）である。これは、そのとき進行中の主題に関する考察ではなく、「自らが行なっている思考行為について為すコメント」（鬼界(近刊予定), (2001) p.170）である。本稿でも、この種の挿入をいくつか参照しており、以下適宜指摘する。

以上で、スレッド-シークェンス法の基本概念について、確認することができた。つぎの部では、この方法論に依りながら、ムーヴメントIから時系列に沿って、読解していきたい。

２部　準備稿（MSS130 中盤～137 前半）の系譜的分析

４章　ムーヴメントの分割と全体の流れ

議論の内容に入る前に、準備稿（MSS130 中盤～137 前半）をどのように分割するのかを述べておきたい。

表 4-1　ムーヴメント表

	期間	MS ページ番号	RPP（節番号）への載録
MI	1946 春	MS130 pp.56~147	RPP1 34-49, 6-33, 50-90
MII	1946.5.26~9.7	MS130 p.147~MS131 p.207	RPP1 91-381
MIII	1946.9.7~1947 秋	MS132 p.192~MS135 p.146	RPP1 382-1137
MIV	1947 冬～1948 夏	MS135 p.146~MS137 p.76a	RPP2 1-305, 355-414, 306-737

『心理学の哲学１』(TS229) に載録されるまでの考察を三つ（MI~III）に分割し、『心理学の哲学２』(TS232) に載録される考察を MIV に一つにまとめている。MI~III を上記のように区切る理由を説明するには、内容を検討する必要があるため、詳細は各ムーヴメントを扱う各章にて述べることとし、ここではウィトゲンシュタインの思考の大きな流れを概説するにとどめたい。

各ムーヴメントの考察を概観すれば、以下のようになる。

表 4-2　各ムーヴメントの主要テーマ

MI	予備的考察（以降扱う主題（意味体験、アスペクトなど）の列挙）
MII	意味体験に関する考察
MIII	移行期　　MII の補足的考察（運動感覚、他人のこころ、信じる、内観） MIV へ向けた予備的考察（アスペクト）
MIV	心理学的概念の系譜作成とアスペクトの表現「として見る」の分析 補足的な考察（他人のこころ）

大きな流れを述べるとすれば、つぎのようになるだろう。すなわち、心理学の哲学テキスト群で扱う主題の明確化に着手することから、考察は開始される（MI)。そのうえで、ウィトゲンシュタインが最初に取りかかるのは、意味体験という主題である（MII)。そしてこの考察が一段落した後、かれの思考は一旦ペースダウンし、移行期と呼べるような段階へと入る（MIII)。それは、後でも述べるように（７章)、この時期がケンブリッジでの大学生活と重なるためである。そして、大学を去って以降（MIV)、かれはふたたび旺盛な思考を展開する。そのテーマは、心理学的概念の系譜と、それに基づいたアスペクトの分析である。その後ふたたび、補足的な考察を認めることができる。

したがって、準備稿には、意味体験に関する考察（MII）と、心理学的概念およびアスペクトに関する考察（MIV）という二つのピークがあり、その前後に、予備的考察と補足的な考察が展

開されるという構造がみえてくる。そうだとすれば、われわれが明らかにすべきは、まずもって、MII と MIV で焦点化されている哲学的な問題とは何か、またそれに対してどのような解答が提示されているのかである。

ここで確認した全体の流れを踏まえ、時系列に沿って、ウィトゲンシュタインの思考を読解していきたい。

５章　MI（MS130 中盤）の分析

手稿の読解を開始するうえで、最初にはっきりさせるべきは、そのはじまりをどの時点に定めるかであろう。テキスト上にこの区切りをみいだすのはそれほど困難ではなく、MS130 の 56 頁とするのが妥当である[12]。そこから、手稿において最初に日付が確認されるのが、1946 年 5 月 26 日（MS130 p.147）である。この間の日付のない範囲を、本稿ではムーヴメント I と定めることとする。

ムーヴメント I は、以降の本格的な考察のための助走期間であろうと推測される。実際そこでは、何らかの確定した問題を掘りさげていくというよりも、多様な事例が次つぎに挙げられていく様子がみられる。では、そうした事例の列挙には、何らかの目的があったのか、それともそのときどきの関心を書き連ねたにすぎないのか。この疑問を解明する手がかりは、以下のメタ哲学的なコメントにある。

> 哲学の問いが冷たく、居心地悪く感じられるなら、思いだせ。適切な問いはまだ立てられていないのだ。（MS130 p.108）

ここでかれは、自分の考察がいまだ満足のいくものにはなっていないことを吐露し、いますべきことを確認しているようにみえる。つまり、この頃のかれの課題とは「適切な問い」を立てることであったということだ。そうだとすれば、事例が次つぎに挙げられていることも、説明ができるだろう。なぜなら、われわれ自身が現実に行なっている言語活動の解明をめざすウィトゲンシュタインにとってみれば、適切な問いを立てるという課題とは、問題をより真に迫った仕方で、いわば温かく、居心地よく感じられるような仕方で、表現できる言語使用の実例を思いだすことでもあるからだ。

以上を踏まえ、本章では、MS130 中盤においてどのようなスレッドが現れるのかを概観したうえで（１節）、それぞれの事例を詳しくみていきたい（２節）。その際とくに注目するのは、どのような問いが立てられたのかであり、ここでは、以降の考察の流れを定める三つの問いを取りだすことになる（３節）。

１節　主題一覧

まず、MI で現われた主題は、以下の計七つに分類することができる。

α：音楽の理解とそれに類する事例

---

[12] MS130 の前半、23 頁までは文章のかたちをした考察が書きこまれており、これらのなかには『探究』第 I 部への載録がみられる（PI 589, 606 etc. 計 10 節）。その後、ほとんどが文章になっていない事項を並べたメモ書きとなるが、これらは、第 I 部の諸節の一部をなす文章や、それらを箇条書きにしたと思しき内容である。たとえば、「想像は像ではない。しかし、像は想像に対応することがある。」という文は第 I 部 301 節にみられるし、「意味：言葉の眼目」（p.43）は 567 節を思わせる。こういった第 I 部の諸節を思わせる短い文章や箇条書きが散見される。56 頁のなかほどまで、そうしたメモ書きがつづいた後、ふたたび文章形式での考察が再開される。

β：多義語、矛盾、自己言及文
γ：生活形式、概念形成、自然誌
δ：意味感覚、意味盲
ε：アスペクトを見ること
ζ：内観
η：信じる、思う（glauben）

これらのうち、「内観」（ζ）、および「信じる」（η）という主題は、後でも触れるように、アスペクトを見ること（ε）に関するある説明図式から派生したものであり、固有の論点はない。それゆえ、MI において主流となるのはそれ以外の五つの主題のくり返しと言ってよい。このうち概念形成、自然誌に関する主題（γ）はウィトゲンシュタインの哲学的方法論と結びついたやや総論的な議論となるため、最後に触れることとし、以下ではまず残りの四つのスレッドについて、それぞれがどのような問いを扱っているのかに注目しながら、詳細を確認していきたい。

２節　各主題と関連する問い[13]

１項　α：音楽の理解とそれに類する事例

心理学の哲学テキスト群を通じて、音楽に関する言及はしばしばみられる。音楽に造詣が深かったと言われるウィトゲンシュタインだけに、これらの考察にはかれの実生活における関心が投影されている印象を受けるが、議論はやや洗練に欠け、論点にもあいまいさが残ることは否めない。そのためか、『探究』第 II 部ではこの主題に独立の章はもうけられなかった[14]。とは言え、これらはたんなる雑感の記録や、他の重要な議論の派生事例というわけではない。むしろ、心理学の哲学において言及される主題の元になった実体験と解釈することができる。そこでまずは、この主題を特徴づける基本的な洞察を確認することからはじめたい。

> この変奏は、計り知れないほど多くのことを語っている。それが何を語っているのかを述べようとすれば、わたしはある特定のしぐさ、たとえばここである教訓が現れているということを表現するしぐさをする。音楽のそのフレーズに合致する言葉として認められるような言葉があるにちがいないと、わたしは思う（*glauben*）。〔しかしながら、〕わたしがそれについて実際に言うこと、あるいはわたしのしぐさは、あきらかにまったく不十分である。それらが音楽に伴われているときには、合致するようにおもわれることもあるのだが、その音楽をよくわかっていないひとはその音楽の性格について予想を立てられない。(MS130 pp.56-57)

音楽の理解はどのようにして示されるのかというのが、かれの関心である。ある音楽が「何を語っているのか」、その「音楽の性格」を理解したいと、われわれは思うことがある。そのためにわれ

13　本節は、菅崎(2017b)を一部用いている。
14　意味体験を理解するための比較事例としての言及（cf. PI2vi44-49）、およびアスペクトを見ることの一種として、短い言及がされる（cf. PI2xi226, 229, 233）にとどまっている。

われは、それを言い当てる言語表現を探す。それが見つかるときもあれば、言葉は出てこずにあるしぐさしかできないときもあるだろう[15]。さらには、音楽にあわせてダンスをしてみたり、問題のフレーズの前にある言い回しを差し挟んだりする（cf. MS130 pp.145-146, RPP1 90）といったことも、ウィトゲンシュタインは挙げている。

こういった場面は、かれにとってはおそらく実体験に根ざしたものであろうし、われわれにとってもそう縁遠いものではなかろう。そして、これらの考察には重要な洞察が、二点含まれている。

まず、音楽を自分がどう理解しているのかを示そうとするとき、われわれには「この音楽的表現に並列するものが、〔音楽とは〕別の領域にあるにちがいないという気がしている」（MS130 pp.63-64, RPP1 35）ということである。上の一つ目の引用にもみられるように、そもそもわれわれはここで、音楽が「何か」を語っていると思っている。そして、その「何か」を音楽自体とは別の仕方で、たとえば何らかの身体的なしぐさや言葉によって、表現できるはずだと思い、その表現を探そうと試みる。

つぎに、音楽における数小節が何かを語るということは、その数小節をとり囲む状況に依っているということである。ウィトゲンシュタインは交響曲第六番[16]の数小節（主要主題の最後の変奏部分）を挙げ、「それはとてつもなく表情豊かだ」と述べている。そして、その数小節を「締めくくりのうなずきのよう」「言ってみれば、忘れがたい言葉のよう」などと表現している。しかしながら、それほど長くはない数小節を、どうしてそのように表現することができるのか。その理由は、その数小節がある楽曲の流れのなかに位置しているからである。

> それでもやはり、〔その数小節が表情豊かなのは、〕当然ながら、そのつながりにおいてのみなのだ。この変奏の全体というつながり、そして、文全体のつながりにおいて。そしてやはり、われわれの音楽言語を理解するひとにとってのみ、そうなのだ。（MS130 p.60）

その数小節が「締めくくりのうなずきのよう」だと言えるのは、同じ主題がすでにくり返し変奏されているということ、そしてそれが最後の変奏だからである。さらに、それがある主題の変奏であるためには、音楽の主題という考え方がそもそも存在しなければならない。要するに、「音楽の一フレーズが表情豊かだということも、それが属する音楽言語の全体におけるその周囲の状況（Umgebung）にのみ依っている」（MS130 p.60）ということである。それは裏を返せば、「そのフレーズの周囲の状況について多くを語ることで、そのような理解に到達するように思われる」（MS130 p.63, RPP1 34）ということでもある。まただからこそ、その音楽の周囲の状況をよく知っているひとしか、問題のフレーズとその表現とがぴったりあっているのかどうかを判断することはできない。「その音楽をよくわかっていないひとはその音楽の性格について予想を立てられない」（MS130 pp.56-57）のである。

音楽の理解という主題の眼目は、以上の二点である。すなわちまず、ある音楽が語っているこ

15　この点については、菅崎(2017b)で詳しく論じた。

16　ウィトゲンシュタインは、この作曲者を明言していないが、ベートーヴェンだと推測されるということを、古田徹也氏に教示いただいた。

とを示そうとするとき、その音楽に並列するものが別の領域にあるようにわれわれには思われるということ（以降、この論点を「並列するものの存在」と呼ぶ）。そして、音楽が何がしかを語る、あるいは表情をもつということは、その音楽の周囲の状況に依っているということである（これを「周囲の状況への依存」と呼ぶ）。前者の指摘は、他の諸事例にも共有されている特徴であり[17]、後者の指摘は、生活形式や概念形成という主題（γ）（５項参照）に関連することになる。それは追々述べることとして、つぎに、多義語を中心とする主題を確認しておきたい。

２項　β：多義語、矛盾、自己言及文

多義語を中心にそこから派生するテーマ（矛盾と自己言及文に関する議論がここに含まれる[18]）を扱う一群の考察が、MS130 中盤にはみられる。ただし、それらの考察の動機は、他の主題とは異なったところにあり、『論理哲学論考』やラッセルの論理学の狭小さを指摘することであったと考えられる（cf. MS130 p.65, RPP1 38）。以降でこの種の目的をもった考察は減っていくことになるが、多義語の意味に関する問いの一つが、以降にも引きつがれることになる[19]。

それは、同じ語で異なることを意味しようとするとき、話者のこころのなかで異なることが生じるのかという問いである。たとえば「高崎さんは高崎のひとではない」という文を言うとき、二つの「高崎」を発する際に、われわれのこころにそれぞれ何かしら別のことが生じるのか（cf. MS130 p.67, RPP1 40, PI2ii15）。要するに、意味のちがいをこころのなかに生じることによって説明しようとする考えである。この問いは、意味体験に関する議論の一角をなし、以降重要性を増していく。

以下、矛盾と自己言及文に関する議論には β1 と表記し、多義語の意味に関する議論は β2 とする。

３項　δ：意味感覚、意味盲

心理学の哲学テキスト群において中心的な話題の一つとなる意味体験であるが、意味と感覚を結びつける記載は、MS130 中盤においては一箇所にすぎない。

17　以下でみる例のほかにも、「表情豊かなしぐさ」（MS130 p.63, RPP1 34）、「表情豊かな言い方」（MS130 pp.57-58）からはじまり、花壇の色構成の「固有の（eigentümulich）性格」、花壇の「顔」、野生の花と庭の花の性格のちがい、壁の「まったく特定の（bestimmt）性格」（cf. MS130 pp.78-81）なども、並列のものの存在を前提したくなる事例に分類することができる。

18　それぞれの典型的な問いは、以下である。「『これは美しい、そして、これは美しくない』と（異なる対象を指して）言うとしたら、それは矛盾なのか」（MS130 p.64, RPP1 37）。「『f(f)』という文がわたしに与えられたとき、その二つ〔の f〕が同じ意味をもつということをわたしはどうやって知るのか」（MS130 p.84）。ともに、「これ」「f」という一つの語の二つの使われ方が問題になっている。

19 本文で挙げた問いのほかに、ある語が「同じ」であるとはどういうことなのかという問いがある。たとえば「『gehen（行く）』と『ging（行った）』は同じ意味か」（MS130 p.121, RPP1 55）　。両者の文字、音は異なっているが、われわれはこの二つを一つの語（gehen）の変化形として通常扱う。では、これらが一つの語であり、同じ意味をもつとはどういうことなのか。これは、多義性の成立要件に関する問いである。というのも、多義性とは一つの同じ語に複数の意味を帰属させられるときに成立するからだ。では、ある語が「同じ一つの」ものであると言うために、何を担保とすればよいのかというのが、この疑問である。またこの疑問は、多義図形を扱うアスペクトにおいても、問題になる（cf. MS130 p.114, RPP1 31）。この問いには以降数回触れられるものの、十分な検討がなされないまま、準備稿は終わる。考察は『ラスト・ライティングス１』へと引き継がれることになる。

われわれの言葉のなじみの顔、それらの言葉は恣意的な記号ではなく、いわばその意味の像だという感覚、それらの言葉はその意味をいわば自分のなかに取りいれているという感覚——そういったことすべてと無縁な言語は存在しうる。そして、われわれの場合に、このような「感覚」はどのように表現されるのか。われわれがどのように言葉を選び、評価するのかということにおいて〔表現される〕。
そういったことすべてと無縁な言語をわれわれが考えることができるだろうということは、重要である。そのような言語とは、語を操作する〔ためだけの言語である〕。そこにおいては、言葉には「こころ（Seele）」がない。（MS130 pp.88-90, 第一段落のみ RPP1 6, cf. PI2 xi 294）

母語やよく知っている言葉を見たときには、それが単なる線ではなく、特定の意味をその内側に担っているように、われわれに感じられることがある。「ねこ」という言葉にはいかにも「ねこ」らしさがあるように思われ、もしこれを「N20」という記号に変えると取り決められたとしたら、そこから「ねこ」という意味の感じが失われてしまうように感じる。「言葉のこころ」は、そうした文字と意味との関係を、文字を身体に意味をこころに託して、表現しているのである[20]。

物理的な音や線の次元とは別の領域に、意味という並列するものがあるような感じがするという点において、この議論もまた、音楽の理解という主題（α）に連なっているということができる。この種の議論を、後に使われる言葉であるが、「意味感覚（Bedeutungsgefühl）」（MS131 pp.164-168, RPP1 346-350）と呼ぶこととしたい。

加えて、この引用で注目すべきは、そういったことと無縁の言語という想定が、すでに現れていることである。これが、そういった体験をしない人びと[21]、「意味盲（Bedeutungsblind）」のアイディアになると考えてよかろう。そして、この流れを踏まえれば、意味盲とはまずもって、意味感覚をもたないひととして考えられていたことが伺える。

ここで付言しておくべきは、言葉にこころがあるという意味感覚（δ）と、多義語の意味（β2）との関係であろう。というのも、これらは後々どちらも、いわゆる「意味体験」という名で総称される議論に組みこまれていくことになるからである。しかしながら、両者は元々異なる文脈にあった議論だと言える。すでに述べたように、多義語という主題（β）は、論理学への批判という動機の元に展開された議論であった。それに対して、意味感覚の事例は、むしろ、印象的なものが与える独特の感じという主題（α）の延長線上にある。このような源流のちがいから推察されるように、共に意味と体験とを結びつける議論ではあっても、その質は異なるものだと言える。実際、『探究』第 II 部では、多義語に関する意味体験（β2）は ii 章に、意味感覚に関する意味体験（δ）は iv 章にまとめられ、異なる章が与えられることになる。以下では、源流の異なるこの二つの議論が、どのように関連するのかにも留意しながら読解を進めたい。

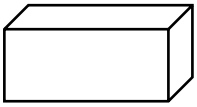
20　似たような論点は、『探究』第 I 部にもすでにみることができる。cf. PI1 530

21　『探究〕第 II 部では、「そういったことすべてと無縁な言語」は、「そういったことすべてと無縁な人びと」に変更された。

４項　ε：アスペクトを見ること

４項１　アスペクトの特徴

アスペクトを見ることは心理学の哲学テキスト群の主要なスレッドの一つであり、MS130 中盤でも多くの紙幅が割かれている。その目的は、以降の哲学的な議論に耐えうるように、その特徴を明確にすることにあったと推測される。最初に提示された事例で確認していきたい。



一冊の本、たとえば物理学の教科書の異なるページに、右の挿し絵をわれわれは見るとする。それにつけられたテキストでは、ある場合にはガラスの立方体、ある場合には針金の枠、またある場合には逆さになった空箱、ある場合には立体の角をつくる三枚の板が話題になっている。そのテキストが、それぞれの場合に、その挿し絵を解釈している。

しかしながら、その挿し絵をある場合にはそのようなあるものとして、またある場合には別のこのようなものとして見ているとも、われわれは言うことができよう。――そうすると、直接的に知覚されたものを記述するためにも解釈の言葉を使うことができるというのは、なんて奇妙なんだ！（MS130 pp.91-92, RPP1 9）

これが、もっとも基本的な状況設定である。いくつかの解釈（A, B, C……）ができる多義図形について、その解釈の表現を用いて、われわれは「その図形を A として見ている」と言うことができる。ここで問題は、直接的な知覚を報告する「見ている」という動詞の対象として、解釈の言葉を用いることにあると言われている。しかし、それはどのような点で「奇妙」なのか。ウィトゲンシュタインは詳細な説明をしてはいないが、ここで一つの解説を示しておきたい。

まず「解釈する」という語の文法から確認すれば、それは「わたしは X を A と解釈する」という文型で使われる。だから、たとえば「わたしはこのドイツ語の文（X）を解釈している」と言うひとには、さらに「それをどのように解釈しているのか」と問うことができ、日本語の訳文（A）を示すことが、答えになりうる。それに対して、「見る」という語の典型的な用法は、「わたしは X を見る」という文型になろう。たとえば「わたしは、ねこ（X）を見ている」と言ったとき、さらに「それをどのように見ているのか」「どのようなものとして見ているのか」と問われても、われわれは何を問われているのかわからない。というのも、解釈 A に当たるものが、「見る」の場合にはそもそもないからである。雑駁に言えば、「解釈する」がもちうる項は二つであるのに対して、「見る」は一つなのである。

それに対して、「X を A として見る」という文には、「見る」という動詞が用いられるにもかかわらず、二つの項がある。では、「その図をガラスの立方体として見ている」とき、われわれは立方体の図とガラスの立方体という二つのものを見ているのか。しかしながら、見ているものを示せと言われれば、やはりその図形（X）を示す以外にないであろう。

この特徴は、１項でみた並列するものの存在という論点を引きついでいると言える[22]。という

---

[22]　この指摘は、『茶色本』にもすでにみられる。

〔点と線で描かれた顔のスケッチについて〕「もちろん、わたしは単なる線を見ているわけではない。わたしはある特別な表情をした顔を見ているのだ」と言いたいようにきみは感じるだろう。

のは、視覚の対象である図とは別の何がしかとして、ガラスの立方体という解釈が成立するかのように、われわれには思われるからである。しかしながら、それを切り離して提示することはけっしてできない。その点において、アスペクトを見るという主題は、音楽の理解よりもわれわれを混乱させる。

しかしそうだとすれば、その図をガラスの立方体（A）として見ているときと、針金の枠（B）として見ているときのちがいはどこに現れるのか。「として見る」が奇妙なのは、この点である。「その図 X をわたしはいま A として見ている」と言うとき、X とその解釈 A という二つのものがあるはずだと思われる。それなのに、「見る」の対象としてわれわれに提示できるのは、図 X のみである。しかしそれでは、複数の解釈のちがいを示すことができない。X と A、二つのものを示そうとしてもうまくいかず、だからと言って、X 一つを示すだけでは A と B のちがいが説明できないというジレンマに、われわれは陥る。

この構造を、ウィトゲンシュタインは印象的な比喩を用いて描きだしている。

> ここでは、図の視覚像に何かしら変化があるようにおもわれる、そしてそれでも、何も変化していないのだ。「新しい解釈がつぎつぎわたしに思い浮かぶ」とは、わたしは言うことができない。たしかにそうではあるのだが、解釈はいわば見られたものにおいてかたちになっている（vorkörpern）のである。その図形――それをわたしは同一のままのものとして見ている――の新しいアスペクトが、つぎつぎにわたしには思い浮かぶ。それはあたかも、その図形に次つぎに新しい服が着せられるのだが、それにもかかわらずどの服も別の服と同じであるかのようなのだ。
> また、こう言うこともできるかもしれない。「わたしはその図を解釈するだけではなく、それに解釈を着せるのである。」（MS130 pp.115-116, RPP1 33）

立方体の図をガラスの立方体として見ているときと針金の枠として見ているとき、あるいは、ウサギにもアヒルにも見える図形をウサギとして見ているときとアヒルとして見ているときでは、視覚像に変化があると言いたくなる。そうでなければ、別のものを「見ている」とは言えないからだ。他方で、見ているものは、同じままでありつづけていることも、十分にわかっている。そ

〔中略〕「言葉では正確に記述できない」と言うこともある。そしてにもかかわらず、その顔の表情と呼ばれるものはその顔のスケッチから切り離せる何かだと、感じるのである。あたかも「この顔にはある特別な表情がある。つまり、これだ」と（何かを指しながら）言うことができるかのようなのだ。しかし、ここでわたしが何か指さねばならないとすれば、それは自分が見ているスケッチにならざるをえない。（いわば何らかの種類の反射によって、そこには一つのものしかないのに、二つのものを見ていると思い込まされる、ある光学的な錯覚の元にわれわれはいるかのようなのだ。）（BB p.162）

そのスケッチは単なる線ではなく「独特な」表情をしている、自分が見ているのはまさにほかならぬ「この」表情なのだと言いたくなるとき、われわれはその表情を、スケッチとは別のものとして存在しているはずだと思う。しかし、その表情をスケッチから切り離して「これだ」と取りだすことはできない。引用でも言われているように、ここで何かを提示せねばならないとしたら、それは目の前のスケッチにならざるをえない。つまり、スケッチと並列して存在する顔の表情という二つのものを、別々に提示できるように思われても、実際には、当のスケッチ一つを示すことしかできないということである。

れはあたかも、新しい服（解釈 A, B, C……）を次つぎに着せているにもかかわらず、どの服も別の服と同じもの（図 X）であるかのようだと、ウィトゲンシュタインは表現しているのである。

４項２　アスペクトに関する混乱した説明

しかしながら、ここにある奇妙さを消し去ってしまう説明は可能である。それは、直接的に見ているものと解釈という二つのものの存在を強弁する立場であり、しかも、これと同種の説明は、並列するものの存在という論点を共有する多くの事例にまで、適用されるものである。

> ここで、われわれは最初つぎのように答えたくなる。直接経験の解釈によるあのような記述とは、間接的な記述にすぎない。真の事態とは、こうだ。その図に対し、ある場合には解釈 A をある場合には解釈 B を、ある場合には解釈 C を、われわれは与えることができる。そしてそのときには三つの直接経験――図の見え（Sehen）――A', B', C'も存在し、A'は解釈 A に、B'は解釈 B に、C'は解釈 C にうまく合う。それゆえ、解釈 A をそれにうまく合う見え方の記述として、われわれは使うのである。（MS130 pp.92-93, RPP1 9）

直接経験は実際にはいつも同じなわけではなく、毎度異なっている（A', B', C'）というのが、この主張のポイントである。そして、直接経験 A'がある場合には、それと照らして解釈 A がうまく合うとわかるので、われわれは「X を A として見る」と言うのだと説明する。こうすれば、A'を「見る」の対象として維持しつつ、「解釈する」同様に二つの項を保持できる。こう説明すれば、アスペクトを見ることに、奇妙なところはなくなる。

しかし、この種の説明をウィトゲンシュタインは斥ける。というのも、「どれが経験 A'なのか。いったいどうやって経験 A'を同定するのか」（MS130 p.93, RPP1 10）、「そもそもわたしがこの経験について知っているということにどうしてなるのか」（MS130 p.95, RPP1 12）という疑問に答えられないからである。直接経験という媒介項を説明に加えたところで、より多くの問題を抱えることにしかならないということだ。かれは、あくまで「解釈は間接的な記述なのではなく、経験の第一の（primäre）表現なのだ」（MS130 pp.101-102, RPP1 20）と言う。

しかしそうなると、当然ながら、「見る」とは異なる「として見る」が、どのような概念なのかが、問題になる。それを考えるために、かれはつぎの問いを立てている。

> だれかに「わたしはその図をいまは針金の枠として見ている」という表現をどうやって教えるのか。 多くのひとは、「見る」という語は学んでいるが、それをこのような仕方で使ったことは一度もないのだ。（MS130 pp.95-96, RPP1 12）

われわれがこれまで学んできた「見る」と「として見る」のちがいはどこにあるのか。これが、アスペクトについて立てられた問いである。

４項３　派生するスレッド

つぎの主題に移る前に、ここで直接経験を持ちだす説明をもう少し詳しくみておきたい。この

説明の問題点としてウィトゲンシュタインが指摘したのは、要するに、私的な直示の不可能性である。『探究』第 I 部の私的言語論を思いだせば、特段新しい指摘には感じられないが、並列するものの存在を前提する諸事例を説明するのに、われわれはまだこれと同種のイメージを援用しがちなのである。

たとえばある数小節を「最後のうなずきのよう」と表現するという場面を、以下のように説明することはそれほど不自然ではない。すなわち、その数小節は、わたしにある特定の印象、「独特の感じ」（MS130 p.145, RPP1 90）（E'）を与える。そこでわたしは、自分のなかに生じたその感じを眺めてみて、それを言い当てる表現を探す。いくつかしぐさや言葉が思い浮かび、最終的には「最後のうなずきのよう」という言葉（E）を思いつき、音楽を聴いたときの独特の感じ（E'）とその言葉（E）を比べてみると、両者がぴったりと合致することに気づく。このような説明において、独特の感じは、「最後のうなずきのよう」という言語表現とは独立に存立し、両者は合致したりしなかったりできるものとして理解されている。しかし、その直接経験 E'がどのようなものなのかを、われわれは自分のなかに集中するだけで知ることができるのか。音楽を聴いたときに生じた感覚と、それにぴったりの表現を探すために思いだした感覚とが、「同じ」感覚であることは、どうしたらわかるのか。E'を、私的に同定することは不可能であろう。

この種の説明は、対象とそれとは別の領域に何かしら並列するものの存在という論点を共有するさまざまな事例において可能であり、以降、この説明図式を批判的に検討することは、課題の一つになる。

そして、このような説明を下支えしているのが、自分の内側を眺めること、つまりは内観（ζ）である。「自分がなにを感じているのかを言うことができるに先立って、わたしは自分がなにを感じているのかを知らなければならない」（MS130 p.121）からである。直接経験 E'と「E」とが合致するかどうかを判断するためには、まず、自分のなかにどのような経験が生じたのかをまず知らねばならない。そのための方法が、内観なのである。

さらに、内観という説明図式は「ひとは、自分自身と他人とを観察して、信じるという現象を見いだしたのか」といった仕方で、そのまま「信じる」（η）にも適用された（cf. MS130 pp.125-126, RPP1 62-64, PI2x86）。

5 項　γ：概念形成、自然誌

最後に、概念形成と自然誌、自然の事実に関するこの時期の考察を確認しておきたい。このスレッドは、これまでにみた各論的な話題とは位相を異にし、ウィトゲンシュタイン自身の哲学的な方法論に結びついた議論である。そこで、各論のなかにかれの方法論をうかがうことのできる記載を確認することからはじめたい。

> 「それは何なのか。このフレーズはいったい何を言っているのか。それはいったい何を表現しているのか」とわたしは自問する。——それについてわたしが理解しているよりもずっと明確な理解が、まだあるにちがいないという気がわたしはするのだ。そして、そのフレーズの周囲の状況について多くを語ることで、そのような理解に到達するように思われる。それはあたかも、ある儀式のなかの表情豊かなしぐさを理解しようとしているかのようなのであ

る。そして、その解明のためには、わたしはその儀式を、いわば分析しなければならない。たとえば、その儀式を変更すると、あのしぐさの役割にそれがどう影響するのかを示さねばならない。（MS130 p.63, RPP1 34）

引用の冒頭では、ある音楽のフレーズが何を言っているのか尋ねる問いが三つ、列挙されている。なかでも「それは何なのか」という問いのかたちには、これを問う人物が、並列するものの存在を前提していることが、透けてみえる。これらの問いは括弧に入れられ、問題含みの問いの立て方であることがほのめかされているが、同時に「わたしは自問する」とつづくことから、ウィトゲンシュタイン自身のコミットもうかがわせる。そして、そのフレーズが何を表現しているのかについて、より明確な理解を得るためには、周囲の状況について語る必要があるように思われるとつづく。音楽の表情といったものが、周囲の状況へ依存しているという論点を理解すれば、これは当然の帰結である。以上は、１項で確認した内容をなぞっている。

注目すべきはここからである。このような、あるフレーズとその周囲の状況との関係を、表情豊かなしぐさとそれが埋めこまれている儀式に比し、そのしぐさを理解するためには、その周囲の状況であるところの儀式を分析しなければならないとつづいている。たしかに、一つのフレーズが何を言っているのかを理解するために、そのフレーズの前後や楽曲の全体に当たる必要があるということは、すでに確認した。そして同じように、ある儀式のしぐさ、たとえば三三九度についてより明確に理解しようとすれば、われわれはその儀式、神道の結婚式について色々と知る必要があろう。

さらにウィトゲンシュタインは、その儀式を変更すると、しぐさの役割にどう影響が生じるのかを考えるよう促している。あるしぐさを理解することだけが目的であるのなら、こうした思考実験はやや過分にも思われるが、ここにかれの哲学的な方法論が投影されていると解釈すれば、このような提案の意図も納得できる。すでにみたように、意味感覚（δ）を考えるために、かれはそれとは無縁の言語、人びとを想定している。以降の考察を先取りすれば、アスペクト盲や「こころのない部族」（MS130 pp.155-157, PRR1 96 etc.）といった反事実的な想定を、かれはしばしば考察の補助線として用いる。では、そのような手法の眼目は、どこにあるのか。

しかし、わたしが言っているのは、自然の事実がいまとはちがっていたとしたら、われわれには別の概念があっただろうということではない。それは一つの仮説だ。そういった仮説は、わたしには使いようがないので、関心はない。
わたしが言っているのは、こういうことだ。われわれの概念が、正しい概念で、知性的な人間にふさわしい概念だと、〔そして〕別の概念をもつ人びとというのは、われわれにわかっていることがわかっていないのだと、きみが信じているのなら、ある種の一般的な自然の事実がいまとはちがっていると想像してみよ。そうすれば、われわれとは別の概念形成が、きみにも自然なものにおもえるだろう。（MS130 pp.77-78, RPP1 48, cf. PI2xii366）

ここには、概念というものに関するウィトゲンシュタインのもっとも基本的なスタンスが現れている。それは、あるフレーズの表情がその周囲の状況に依存するように、われわれの概念も周囲

の状況、われわれの自然の事実に依存しているということである。そして、いまのわれわれとは別の言語、別の自然の事実を想定するのは、その結びつきを理解するためだということである。

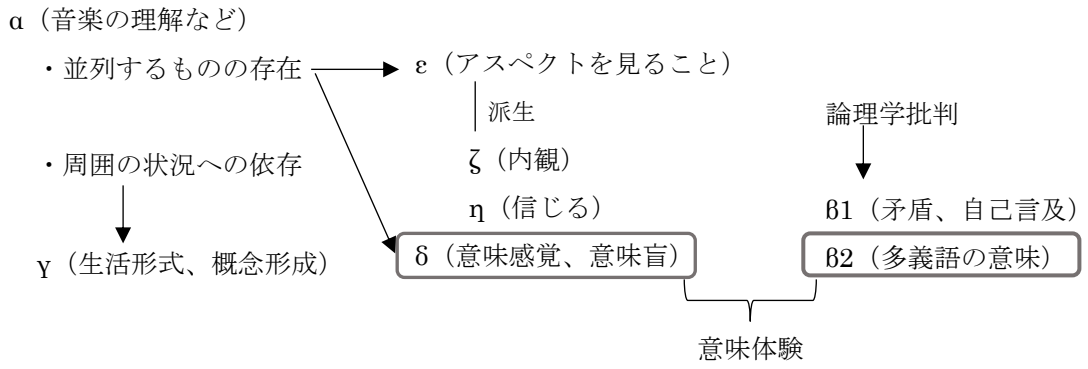
加えてここでもう一つ牽制されているのは、自然の事実と概念との結びつきが重要だと主張するからといって、かれの考察の目的が、仮説を立てること、要するに科学的な原因の追究になるわけではないということである（cf. MS130 pp.71-72, PRR1 45, PI2xii365）。

ここで示されたかれのスタンスは、すでに完成されたものだと言える。ここで示された考察が、ほとんどそのまま、『探究』第 II 部の xii 章を構成することになる。

３節　まとめ――準備稿における MI の位置づけと『探究』第 II 部との関係

以上、MS130 中盤における主要な五つのスレッドと二つの派生するスレッドを確認した。その関係は以下のように図示することができる。

図 5-1 MI における各スレッドの関係



音楽の理解を典型とする諸事例（α）には二つの特徴があった。すなわち、対象に並列するものが存在するはずだと思えるということと、対象の性格はその周囲の状況に依るということである。

このうち、前者の特徴を継ぐのが、意味感覚（δ）とアスペクトを見る（ε）という二つのスレッドである。この二つの主題は、言葉と並列するその意味や言葉のこころ、目の前の図（X）と並列するその解釈（A）という二つのものがあるはずだと思えるという特徴があり、加えて、にもかかわらず、図の解釈を対象から切り離しては提示できないということも指摘された。また、並列するものを私的に同定するための内観（ζ）、および、内観という主題をそのまま「信じる」（η）という概念に援用した議論がここから派生した。

そして、α の後者の特徴を継ぐのが、生活形式、自然誌や概念形成という主題（γ）であった。音楽の一つのフレーズがその曲全体やわれわれの音楽にまつわる諸活動に依っているように、概念はその周囲の状況、要するにある特定の生活の仕方や自然誌の事実に依って成立している。そして、概念形成と生活形式、自然誌の事実とのあいだのこうした密接な関係を理解するために、別の生活形式を想定して、そこにおいて概念がどのように変質するのかを示すという、ウィトゲンシュタインの方法論が述べられた。

さらに、α の系列とは異なり、論理学の批判という動機の下で言及された、矛盾や自己言及文、

そして多義語に関する考察が、ムーヴメントIには存在する。このうち、矛盾や自己言及文（β1）に関する考察は徐々に消えていくことになるが、多義語の理解（β2）という主題は、異なることを意味するときに、こころのなかで異なることが生じるのかという問いとして、生き残っていくことになる。そして、多義語の理解（β2）と意味感覚や意味盲（δ）という二つの主題が、これから「意味体験」として扱われることになる。

以上の考察の目的は、これから本格的に考察する諸主題の特徴を明確にすることであったと考えられる。MIから『探究』第II部へ載録された諸節にも、この位置づけは反映されている[23]。ただし、２節５項でも触れたように、概念形成と自然誌との結びつき（γ）を扱うxii章は、ここでおおむね完成している（xii365-366）。

MIにおいて整理された五つの主要スレッドのうち、音楽の理解（α）は意味感覚（δ）とアスペクトを見ること（ε）、および概念形成に関する主題（γ）へと吸収された。そして、概念形成と自然誌との結びつき（γ）がかれの方法論にとってもつ重要性については、この時点ですでに考察は完成している[24]。つまり当面残ったのは、以下の三つの主題と、それぞれに立てられた三つの問いということになる。

一．多義語の意味（β2）に関する問い
　　同じ語で異なることを意味するとき、こころのなかで異なることが生じるのか
二．意味感覚（δ）に関する問い
　　意味感覚はどのように表現されるのか
三．アスペクトを見ること（ε）に関する問い
　　「として見る（sehen als）」とはどのような概念なのか 。
　　とりわけ、「見る」とのちがいはどこにあるのか。

この三つの問いが、以降の考察の支点となる。しかし、これはまだかれが求める「適切な問い」にはなりきれておらず、それが明確に提示されるのは、つぎのムーヴメントIIの冒頭となる。

[23] 多義語の意味（β2）を特徴づける事例（ii15-16）と、信じる（η）を内観（ζ）と結びつける記載（x86）が、載録されるにとどまっている。

[24] ただし、概念形成と自然誌との関係は、「他人のこころ」という課題に対応するために、MIVにおいて、再度言及されることになる。

６章　MII（MSS130 後半〜131 終盤）の分析

MS130 ではじめて日付が入れられた 147 頁（1946 年 5 月 26 日）の後、二ヶ月ほど日付の記入はない。その後、二回目の日付記入が 7 月 22 日（p.186）、そのつぎが 28 日（p.212）であり、これ以降ほぼ連日、日付入りの思考がつづくようになる。このあたりから、思考のモードが変化したことが伺える。かれの私生活に鑑みても、大学が夏の休暇に入り[25]、自身の思考に集中できたであろうことが、想像される。この時期かれが注力する主題は、意味体験であるが、それが一段落するのが、MS131 の終盤に当たる 207 ページ（1946 年 9 月 7 日）である。以上を踏まえ、本稿では、このおよそ三ヵ月半の考察を、ムーヴメント II とする。

４章でも述べたように、このムーヴメント II は準備稿における一つ目のピークであり、ここで明らかにすべきは、意味体験という主題を通じて論じられている哲学的な問題とは何かであり、また、それに対してどのような解答が示されているのかということである。この課題に照らせば、MII をさらに三つに分けることができる。

MII-1（MS130 pp.147-211, 1946.5.26-7.28）：どのような哲学的問題が扱われるのか
MII-2（MS130 p.212-MS131 p.68, 1946.7.22-8.19）：問題のある解答の検討
MII-3（MS131 pp.68-207, 1946.8.19-9.7）：新たな解決法

まず、MI の成果を踏まえながら、扱うべき問題がさらに明確に述べられる（MII-1, 1 節）。そして、その問題を解決するためにしばしばわれわれがとりがちな方途を検討し、それがわれわれを困難な状況へと追いたてることが明らかにされる（MII-2, 2 節）。最後にそうした状況から抜けだすための新たな思考法の確立が試みられる（MII-3, 3 節）。以上の思考を追ったうえで、本章では最後に、準備稿における MII の位置づけと『探究』第 II 部との関係を確認する（４節）。

１節　MII-1：どのような哲学的問題が扱われるのか

ムーヴメント II 冒頭の区切りは、最初の日付が入れられたことを踏まえてのものであるが、そうなると最初の問題は、日付の記入には理由が、とりわけ考察の内容に係わる理由があるのかということである。そこで、注目したいのは、つぎの記載である。

> ああ！自分の運命に満足するということを、神がお与えくださいますように！人生において、哲学においてのように。問題が絶望的であるときには、問いの立て方が間違っている。あるいはまた、きみが自分に一つの問いを絶望的にくり返そうとするときには、与えられたものを甘受するということを、きみは手に入れる。〔中略〕
> 甘受するということも、ひとが学ぶことのできる思考の運動の一つなのだ。（MS130 pp.154-155, 1946.5.26-7.22, 最後の一段落のみ RPP1 95）

[25] この休暇をかれは、ウェールズのスウォンジーで過ごしている。cf. Monk(1991) p.487.

運命への祈りという私的な色合いの強い記載ではあるが、注目すべきは二文目である。「人生において、哲学においてのように」という記載が示唆するのは、かれが人生において求めている運命の満足というものが、哲学においては与えられたということであろう。実際、これにつづくのは、問いの立て方に関する考察である。前章においてわれわれは、MS130 中盤における考察の課題とは、「適切な問い」を立てることであったと確認した。そのことと、ここでの問いに関するコメントは相関していると考えるのが自然ではなかろうか。

つづいて述べられていることは、まず、問題が絶望的であるときには、問いの立て方が間違っているということ。そして、一つの問いを自分にくり返しそうになるときには、与えられたものを甘受することができるようになるのだと言われている。

まず、なぜ一つの問いをくり返してしまうのかということから考えてみると、それは、どうやっても満足のいく答えが得られないからであろう。いつまでも解消できない問題とは、たしかに「絶望的」である。しかしかれは、そうした状況に至ることによって、すでに与えられているものをそのまま受けいれることができるようになると言うのである。一種の諦観にもみえるが、最後の一文で、「甘受すること」を「学ぶことのできる思考の運動」と呼んでいることからも、ウィトゲンシュタインが、これをある種の徳目として捉えていることがわかる。つまり、いま自分が立てている問いがいつまでも解決されないと自覚したということは、同時に、学ぶべき考えを得るための入り口に立てたということを意味するのだと解釈できるのである。その意味において、絶望的な状況に至ったということは、かれの哲学にとっては、一つの進展なのである。そのメルクマールとして、ここに日付を記録したという推測は可能ではなかろうか。

では、絶望的と言われているのは、どのような問いなのか。問いを立てるに先立って、かれはここまでの論点を整理することからはじめている。そこで、まずはそれらの記載を確認し（１項）、そのうえで、絶望的にくり返される問いとは何かを明らかにしていきたい（２項）。

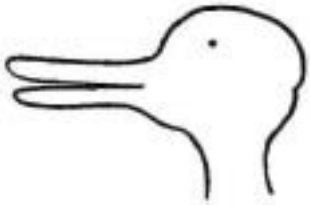
１項　MI の論点まとめ

日付を入れた最初の考察は「経験、体験の『内容』」について（MS130 pp.147-148, RPP1 91, 1946.5.26-7.22）であり、一つ別の考察を挟んで[26]、ある部族のふるまいを、かれらを奴隷にするために記述するという仮想的な事例について（MS130 pp.149-150, RPP1 93, 1946.5.26-7.22）かれは語っている。一見するとまとまりのない記載に思われるが、MI の考察を踏まえれば、その要点を整理したうえで、今後の見通しを示していることがわかる。順にみていきたい。

> 経験、体験の「内容」。歯痛とはどのようなものか、わたしは知っている（wissen）。わたしは歯痛とはどのようなものか、わかっている（kennen）。（MS130 p.147, 1946.5.26-7.22, RPP1 91）

---

[26] 二つ目の話題は、「同じ語」についてである（MS130 pp.148-149, RPP1 92）。「『Bank』（複数形『Banken』〔「銀行」の意味〕）と、『Bank』（複数形『Bänken』〔「ベンチ」の意味〕）は同じ語なのか」「『Ich habe ein Haus（わたしは家をもっている）』と言うとき、『Ich habe ein Haus gebaut（わたしは家を建てた）』と言うときの二回で、その「habe」という語〔前者は動詞、後者は助動詞〕は同じ語なのか」（MS130 pp.148-149, RPP1 92）が問われている。これは、前章で確認した、多義語（ß）に関する問いの再提示になっている。前章註 19 参照。



歯痛からはじまって、色を見ること、悲しみや希望といった情動を感じること、さらには、希望する、思いだす、意図するまで、「それがどのようなものか知っている」[27]と表現される。さらには、「あるスケッチ〔手稿に図はないが、右の図であろうと推察される。以下、右の図を「ウサギ-アヒルの反転図形」と呼ぶ〕を、ウサギのあたまとして、アヒルのあたまとして、代わる代わる見ること」、すなわちアスペクトを見ること（ε）、「ある語をある意味ではなく、別の意味でとること」、多義語の意味（β2）についても、それがどのようなものか知っているとつづく[28]。つまり、多義語の意味（β2）、アスペクトを見ること（ε）が、経験、体験としてまとめられたのである（なお、経験、体験を表す心理学的概念一般を対象とする考察の主題には、以降 ι の表記を与える）。

では、ここでくり返される、経験の内容を「知っている」ということは、何を意味するのか。それは、問題の「経験を目の前に引きだす」（MS130 p.148, 1946.5.26-7.22, RPP1 91）、つまりは内観を通じて（ζ）、その内容を見てとるということである。

以上を踏まえ、ここでなされたのは、以降の考察の対象を明示することだと解釈できる。すなわち、ウィトゲンシュタインにとって当面の考察対象は、意味体験とアスペクトを含む「経験、体験」であり、そして、それらは「内観」によって知られるという捉え方であることを示したのだと考えられる。

つぎにウィトゲンシュタインは、奴隷にしようとする部族のふるまいを記述するという場面を想像するよう促す。ここには、われわれとはまったく異なる部族の生活と対照して、われわれ自身の言語活動に光をあてようというウィトゲンシュタインの哲学的なスタンスが、表れていると言えよう。前章を振りかえれば、われわれの生活の仕方と概念形成との結びつき（γ）を重視する立場である（５章２節５項）。この基本的な立場に立脚して、ここでかれが示唆しているのは、自分が目指す思考法である（cf. MII-3, 本章３節）。先取りして言えば、それは、経験や体験を内観によって明らかにしようとする立場（cf. MII-2, 本章２節）に代えて、われわれの「心理学的な〔ものを表す〕表現のかたち」（MS130 p.149, 1946.5.26-7.22, RPP1 93）を記述するという方法である。意味感覚やアスペクトを見ることをわれわれは、実際の生活においてどのように表現するのか、その「ふるまいのさまざまアスペクト」[29]（MS130 p.149, 1946.5.26-7.22, RPP1 93）を記述するという方法である。

つまり、MII-1（MS130 pp.147-211, 1946.5.26-7.28）において成されたのは、まず MI に登

27　歯痛から、以下に挙げる多義語の意味まで、英語で書かれている。

28　そして最後に加えられるのが、「a という音が灰色に見える、ü という音が紫色に見えるとはどのようなことか知っている」という例である。母音に色を見るという事例は『茶色本』（BB pp.136, 148）ですでに言及されているが、そのポイントは、テーマ α と同様、並列するものの存在である。母音に、それとはまったく別の領域にあるはずの色の経験が並列するように思われるということが、この事例のポイントである。

29　ここであえて「アスペクト」という語でかれがほのめかしているのは、ひとのふるまいも「として見る」ものの一種だということであろう。たとえば、泣いているということを悲しみの表現「として見る」ということだ。つまり、アスペクトを見るということは、それ自体がまず「経験、体験」の一種であり、かつ、経験、体験の表現としてのふるまいを見てとるということもまた、アスペクトを見ることの一つになるという階層的な構造があるということになる。

場した主要なテーマを統合することである。

一．多義語の意味（β2）、アスペクトを見ること（ε）を位置づける「経験、体験」という枠組み（ι）の提示
二．経験、体験を内観する（ζ）という考えの提示
三．心理学的なものの表現として「ふるまいのアスペクト」を記述するという宣言（γ）

そして、以上の三つのポイントを確認したうえで、今後の考察の方針が示された。それは雑駁に言えば、経験や体験について（一）、内観によって答えようとする立場（二）から、それらがどのように表現されるのか、ふるまいの記述によって答えようとする立場（三）への移行である。しかし、以上はまだ、MI の論点を整理したにすぎない。ウィトゲンシュタインは、ここから問いの再構成にとりかかっている。

２項　問いの再構成

２項１　絶望的にくり返される問い

MI の主題を整理した後、多義語の意味（β2）というスレッドが、テキスト上に浮上する。

「『Bank』と聞いたとき、わたしには銀行の意味が思い浮かんだ」。それはあたかも、意味の萌芽を体験し、それから解釈をするかのようだ。さて、それは体験なのか。（MS130 p.151, RPP1 94, 1946.5.26-7.22）

まず、ある語を特定の意味で聞くという体験の「内容」とは何かと言えば、前項で確認された内観との関係を踏まえれば、「銀行」の意味を目の前に引きだすこと、要はその意味を思い浮かべることだと言いたくなる。そしてウィトゲンシュタインは、これを「意味の萌芽を体験する」かのようだと、評している。要するに、萌芽を観察することで、それが将来どのような樹に育つのかを推測できるように、「Bank」という語を聞いた時点の体験をよく眺めてみれば、そこには意味を予感させる何がしかがあるということ、そして、それを「銀行」と解釈することによって、「Bank」という語の意味を確定するかのようだということである。ここには、前章で確認したアスペクトの直接経験 A'と解釈 A の関係と似た図式があると言えよう。

これに対して、それは本当に体験なのかと、かれは疑問を差し挟んでいる。そして、それを判断するために、つぎにかれは、あることが体験であるための条件の一つを示している。

その Bank という語をあたまのなかで（*in Gedanken* 思考のなかで）自分に言ってみせる。
――そしてそれを、ベンチの意味ではなく、銀行の意味で意味する（*meinen*）。
「でも、このこと〔あたまのなかで意味したということ〕を後で言うことがなくとも、かれはやはりそれを意味することができる」。
それが言っているのはこういうことになる。すなわち、かれがしかじかのことを意味したと言うことは、これがけっして言われることがなかったとしても、だれかにとって意味がある

ということだ。（MS130 p.152, 1946.5.26-7.22）

典型的な体験の概念と言ってよいであろう「痛み」ならば、「あのときわたしは痛みを感じていた」とたとえだれにも言わなかったとしても、そのときに痛みを感じていなかったことにはならない。つまり、痛みの存在はそれに言及するか否かとは独立に考えることができる。それに対して、意味が思い浮ぶことはどうか。これを考えるために、声には出さずにあたまのなかだけで自分に対して「Bank」と言い、さらにそれを銀行として意味するという状況が設定されている。この想定によって、まず現在形の「意味する」を、いかなる外的な活動にも依存せずに存立する「精神的な（geistig）過程に関する何がしか」（MS130 p.154, 1946.5.26-7.22）に純化したということである。

では、後から「あのときわたしは、あたまのなかでその語を……と意味した」と言うことがなくとも、この「意味した」という過程は存立するのか。これを肯定すれば、「意味する」とは、「痛みを感じる」に類する概念ということになる。しかしながら、ウィトゲンシュタインは、これに疑問を呈す。というのは、「意味した」というのは、過去の経験について述べているのではなく、むしろ「あのとき意味した」と言及したことによって、遡行的に過去の精神的な過程を措定しているにすぎないと考えることができるからだ。

「意味した」とは、精神的な過程なのか、それとも、そうした過程があったように錯覚しているにすぎないのか。しかし、そう問うことこそが絶望的な状況なのである。

> 「わたしがその語をあたまのなかで発したとき、わたしが意味していたのは……」。それはどうやって生じるのか。何が生じるのか。――「何も〔生じ〕なかった」とひとは答えたくなる。――そして、それでもまさにこれが〔生じた、とも答えたくなる〕。（MS130 p.154, 1946.5.26-7.22）

「意味する」とき、何が生じるのか。これが、絶望的にくり返される問いである。というのは、こう問いを立てると、「何も生じなかった」、すなわち、それは遡行的にでっち上げられただけだという答えと、「まさにこれが生じた」という二つの矛盾する答えのあいだで、終わらない論争になるだけだからである。以下、この「何が生じるのか」という問いを「精神的な過程に関する問い甲」あるいは単に「問い甲」と呼び、「何も生じない」という答えを「a」、まさにこれが生じるという答えを「b」とする。

そしてこの問いを、MI において追求された「適切な問い」であると解釈したい。というのも、「意味する」あるいは「意味した」が本当に精神的な過程なのかを解明しようとすれば、そのとき何が自分のなかに生じているのかを明らかにしようとするのは、ごく自然な思考の流れであろう。その意味でこの問いは、われわれにとって温かく、居心地がよい。しかし他方で、この問いは絶望的にくり返されることになる。しかしまた、そうした絶望的な状況に立たされることによって、われわれは与えられたものを甘受することができるようになるということでもある。その点においても、この問いは「適切」なのである。

以上を踏まえれば、ウィトゲンシュタインが取りくもうとしている哲学的な課題とは、こうし

た絶望的な状況を解消することだと言えそうである。では、そのためにわれわれは何をするべきなのか。MII-1 の段階においても、その方向性はすでに示唆されている。

２項２　絶望的な問いから新たな問いへ

MS130 で、二つ目の日付が記入されたその日（1946 年 7 月 22 日）、かれはふたたび、精神的な過程に関する問い甲の問答をくり返している。このことからもこの問いの重要性が伺えるが、注目すべきは、絶望的なこの問いに拘泥する代わりに、われわれが何をすべきかが、そこにはすでに示唆されていることである。

> 「でも、わたしが報告をしたり、問いを立てたりするとき、わたしの精神のなかで何も生じていないのか」――ここで、ひとはこう言いたくなる。「でも！」もしくは、「可能性のあるあらゆることが」「何かしら非常に複雑なことが」「何かしら捉えがたいことが」等。
> 「でも、恐れをけっして外面にださなくとも、かれが恐れていることはありうるのではないか。」――この「ありうる」というのは、何を意味するのか。「あるひとは恐れているが、それを言わないということが起こる」ということか。――いいや。むしろ、「たとえば、このような問いを立てることに意味はあるのか」ということ――あるいは、あるひとは、恐れていることをけっして外面にださなかったけれど、かれは恐れていたと小説家が書くとして、それには意味があるかということだ。そうだ。それには意味がある。でも、どんな？わたしが思っているのは――そのような文はどこで、またどのように使われるのかということである。
> 「どんな意味があるのか」とわたしが問うときには、一つの像（Bild）、あるいは一連の像で答えてもらうことは、わたしが望むところではない――そうではなく、状況の記述によって答えてもらいたいのだ。（MS130 pp.187-188, 1946. 7.22-28, 二段落目は RPP1 132 に載録）

「わたしの精神のなかで何も生じていないのか」「でも！」等々というやりとりは、問い甲に対する二つの答えの再現と言えよう。そしてここには、この問答から脱却するための新たな問いが示されている。

その新たな問いを理解するためにまず注目すべきは、ここで、報告をすること、問いを立てること、恐れといったように、考察の対象が広げられていることである。さらに別の箇所では、「思いだす」（λ[30]）（MS130 p.174, 1946. 7.22-28, RPP1 119）、「意図する」（v）（MS130 p.286, 1946. 7.22-28, RPP1 215）など、多義語の意味にとどまらず、さまざまな概念に対して、同種の問いが立てられることになる。そのとき何が生じるのかという問い甲が、これほど敷衍されるのはなぜなのか。

それは、精神的な過程に関する問い甲の背後には、こころにまつわる過程全般に当てはまる、ある像が働いているからである。すなわち、精神的な過程とは、「内部に生じる」「水面下で起こる」（MS130 p.158, 1946. 7.22-28, RPP1 97）という「像」（κ）である。けっして外面には表さなくとも、内面ではある精神的な過程が生じているはずだ。そして、そのときに自分の内側を覗

[30] 「思いだす」と「夢」という概念を、「λ」として統合する。というのも、「夢」とは起床した時点で「思いだされる」という仕方で語られるからである。

き見る、すなわち「内観」(ζ) すれば、「何が生じているのか」という問い甲にも答えが与えられるにちがいない。引用中にある「恐れ」といった情動や感覚はもちろん、いまの主題である「意味する」や「思いだす」「意図する」まで、いわばこころにまつわる多くの概念について、われわれはこの種の説明をしたくなる。しかしそれは、われわれに与えられている事実の記述ではなく、像なのだ。

心理学の哲学のみならず、ウィトゲンシュタインの哲学を通じて、「像」というのは重要な概念の一つである。「像」については本章３節で詳細に検討することとし、ここでは、問い甲がこころにまつわるある種の像に下支えされていることを確認することにとどめる。

では、こころのなかに何が生じるのかという絶望的な問いの代わりに、われわれは何をするべきだったのか。それも上の引用には示されている。すなわち、「そのような文はどこで、またどのように使われるのか」と問い（以下、この問いを「表現に関する問い乙」とする）、これに像によってではなく、「状況の記述」によって答えることである。つぎに、この新たな問いに関する思考の流れを、追っていきたい。まず確認すべきは、「そのような文」の具体例であろう。

２項３　新たな問い

表現に関する問い乙は、どのような文に対して立てられているのか。それを理解するためには、本項の冒頭で引いた、意味の萌芽体験に戻る必要がある。

> 「『Bank』と聞いたとき、わたしには銀行の意味が思い浮かんだ」。それはあたかも、意味の萌芽を体験し、それから解釈をするかのようだ。さて、それは体験なのか。
> 「この使用法に〔後々〕なっていく、その萌芽をわたしは体験した」と単刀直入に言うこともできよう。これがわれわれにとって自然な表現方法だということもあろう。（MS130 pp.151-152, 1946.5.26-7.22, RPP1 94）

意味の萌芽体験とは本当に体験なのかという疑義を呈しながら、その直後には「この使用法になっていく、その萌芽をわたしは体験した」と言うことは自然でありうると、ウィトゲンシュタインは言う。かれは矛盾したことを言っているのか、それともいまだ態度を決めかねているのか。けっしてそうではなく、われわれが現に行なっている言語実践の複雑さが、ここには現れていると解すべきであろう。つまり、「意味の萌芽を体験する」と呼ばれていることが、本当にその字義通りに体験なのかどうか、よくよく反省してみれば判然としないのだが、にもかかわらず、われわれはそこで「体験した」と表現したくなることが実際にあるということだ。たしかに一貫しているとは言いがたいのだが、それがわれわれの行なっている言語実践なのである。

表現に関する問い乙において念頭に置かれている「そのような文」を、「意味の萌芽を体験する」を典型として、あいまいではあるが、つぎのように理解しておきたい。すなわち、精神的な過程について述べる文のようではあるが、よく反省してみれば、その文字通りのことが言われているのかについて疑問が浮かぶ文である。この特徴に当てはまるのは、他には、「そのような文」で直接指されている「でも、恐れをけっして外面にださなくとも、かれが恐れていることはありうる」であり、また、「あたまのなかで……と意味した」という文も、当てはまるであろう。

そして、われわれが問うべきは、この種の表現は、どんなときに、またどのように使われるのか、表現に関する新たな問い（乙）である。

> 自問せよ。「……という語をわたしがあたまのなかで発したとき、わたしがそれによって意味していたのは……だ」という発言に、どんな目的があるのか。
> ある部族の会話をわれわれが観察すると考えてみよう。かれらの表出には、「わたしが……という語をあたまのなかで発したとき、云々」というかたちがある。そういった表出は、かれらにとって何の役に立つのか。　（MS130 pp.153-154, 1946.5.26-7.22）

注目すべきなのは、われわれとは異なる「部族」の会話という場面設定がされていることである。ここには、概念形成と生活形式との結びつき（γ）において、その表現を理解しようという、かれの考察の基本方針が現れていると言える。そして、そうした生活上の実践において、それらの表現には「どんな目的があるのか」「何の役に立つのか」、要するに、それらの文はどのように使われるのかを考えよということである。その文を使う人びとの生活、その状況を記述することが、絶望的な問いに答える代わりに、われわれが取りくむべき課題なのである。

３項　まとめ――MII-1 の流れと MI との対応

以上が、1946 年 5 月末から 7 月末まで（MS130 pp.147-211, 1946.5.26-7.28）、およそ二ヶ月間の考察の内容である。前章の成果も踏まえながら、その流れをまとめておきたい。

本節でまず確認されたのは、「……という語をあたまのなかで発したとき、それによってわたしが意味していたのは……だ」、「……という語を聞いたとき、それはわたしにとっては……を意味していた」などと言うとき、こころのなかで何が生じるのかという、精神的な過程に関する問い甲は、絶望的にくり返されるということである。そしてこうした状況の解消が、ウィトゲンシュタインが取りくもうとしている哲学的な課題だというのが、本稿の解釈である。この課題を達成するためには、精神的な過程に関する問い甲から、それらの文はどのように使われるのかという、表現に関する問い乙へ転換する必要があるということが、示唆されていた。

そしてこの転換は、ムーヴメントＩの考察と、つぎのような対応関係にある。すなわち、同じ語で異なることを意味しようとするとき、こころのなかで異なることが生じるのか（β2）という問い、そしてこの問いは、内観（ζ）によって明らかにされるという立場（二）が、精神的な過程に関する問い甲に引きつがれた。そして、心理学的なものの表現として「ふるまいのアスペクト」を記述する（γ）という方法（三）が、表現に関する問い乙に対応する。また問い乙を考察するためには、まず、それがどのように表現されるのか（δ）を自覚する必要があるということになる[31]。

MII-1 は、MI までの論点をまとめると同時に、今後の課題を示していると言えよう。それはすなわち、精神的な過程に関する問い甲から、表現に関する問い乙への転換である。ここから、ウィトゲンシュタインはまず、問い甲の批判的な検討へと進むことになる。

---

[31]　問い甲、乙に対応するのは、MI でまとめた三つの問いのうち、二つである。残る問い、「として見る」とはどのような用法なのか、「見る」とのちがいはどこにあるのかという問いが主題化されるのは、さらに先となる（７章１節）。

２節　MII-2：精神的な過程に関する問いの批判的な検討

1946 年の 7 月末から、ほぼ連日日付が記入されるようになることは、すでに述べた。ここに思考モードの変化があろうことが伺えるが、実際このころ、主題の整理や問いの明確化から、意味体験に関するより具体的な考察へと、ウィトゲンシュタインの思考は移行していく。MI で求めた「適切な問い」が表現されたことによって、この問いの検討へと思考が進んだことが推察される。

かれがこれからとりかかるのは、こころのなかで何が生じるのかという、精神的な過程に関する問いが絶望的であることを、より具体的に示すことである。ただし、この課題は正面切って主張されるわけではない。意味体験に関する別の問いが立てられ、それを解決するために、われわれは精神的な過程に関する問い甲を立て、それによって、ずるずると絶望的な状況に立たされることになる。その過程を論じるのが、MII-2 である。まず、意味体験に関する問いを確認することからはじめ（１項)、その問いへどのような応答がなされているのか（２項)、またその応答では絶望的な状況に至るのはなぜなのか（３項）を、かれの思考の時系列に沿って、確認していきたい。

１項　意味体験に関する問い

１項１　問いの提示

1946 年の 7 月末からおよそ一ヶ月にわたって、以下の問いが考察されることになる。

> さて、ある語をしかじかの意味で聞く、あるいは考えるということは本物の経験だろうか。——それはどのようにして判断されねばならないのか。——それに対する反論とは何か。つまり、この経験の内容を見いだすことができないのである。あたかも、経験の表出はしているのに、その経験がそもそも何であったのかを思いだすことはできないかのようなのである。たしかに、われわれが求めているのと同時にあった経験ならば思いだすこともできようが、われわれにつかむことができるのは服のようなもので、服が着せられているはずのものの代わりにわれわれが見るのは、空の空間なのである。（MS130 pp.164-165, 1946.5.26-7.21, RPP1 105）

ある語をしかじかの意味で聞く、考えるとは「本物の経験」なのか。精神的な過程に関する問い甲自体は、多義語の意味にとどまらず、より広い射程をもつことが示されたが、ここで考察の対象は、多義語の意味（β2）にふたたび絞られている。なぜかと言えば、多義語の意味をわれわれはどのように理解しているのかという問題を考えるとき、つぎのジレンマに直面するからである。すなわち、経験の表出はしているにもかかわらず、その経験の内容を見いだすことはできない。ここには哲学的な謎があり、われわれはそれに挑まねばならないような気にさせられるのだ。

まず、ジレンマの構造を明確にしよう。たとえば痛みならば、「頭が痛い」と言うひとには、「どんな痛みか」と問うことができ、「ズキズキする」といった答えが与えられれば、われわれは

納得する。つまりは、経験の内容について語ることができるように思われる。それに対して、「その『したがって』という言葉を、わたしは命令の意味で聞いた」と言うひとに、「それはどんなふうに聞こえたのか」と問うたとしても、「強い口調に感じた」「語尾が上がっているように聞こえた」といった答えは出てくるかもしれないが、そういった体験が「意味」と呼ばれるべき内容と言えるかどうかは、判然としない。このような事態を指して、われわれにつかむことができるのは「服」のようなものにすぎず、その服が着せられているはずの本体、つまり意味の体験については、何の内容も見いだせないように思われると言われているのである。

「……と聞いた」という表出があるという点では、「聞く」という経験の一種だと認められるが、その内容が判然としないという点では経験とは言えないようにも思われる。だからこそ、ある語をしかじかの意味で聞くことは「本物の経験」なのかと問いたくなるのである。

以降、この問いへの解答法を検討していくことになるが、その前に、この問いを構成している「経験の表出」と「経験の内容」ということで何が考えられているのかを、明確にしておきたい。

１項２　経験の表出と経験の内容

まず、経験の内容については、前節でも確認したように、内観によって知られるはずのものとして、提示されていた（cf. MS130, p.194, RPP1 109）。そこではすでに、痛みや色を見ることを典型例に、多義語の理解も挙げられている。

つぎに、経験の表出ということで、ウィトゲンシュタインは具体的にどのようなことを考えているのか。こちらも、手掛りは前節にすでに現れている（２項１）。ポイントは、もしそれが経験であるならば、「しかじかの経験をした」と誰かに報告することがけっしてなかったとしても、その経験をしなかったことにはならないということである。先に指摘したように、「あのときわたしには痛みがあった」とたとえだれにも言わなかったとしても、その痛みはなかったことにはならない。それゆえ問題は、「かれがしかじかのことを意味したと言うことは、これがけっして言われることがなかったとしても、だれかにとって意味がある」（MS130 p.152, 1946.5.26-7.22）と言うことができるかにかかっているということである。

そして、この問題を考えるためにかれが検討するのが、過去形を用いた「あのときその語をしかじかの意味で聞いた」といった表現である。なぜなら、「あるひとにある感覚があったと言うことが、そのことを誰にも伝えなかったとしても、意味があるということは、『わたしはそのときそれを感じた。わたしはそれを覚えている』と言うことに意味があるということと関係している」（MS130 pp.214-215, 1946.7.28, RPP1 161）からである。換言すれば、「過去の（あるいは少なくとも一つの）時点への言及」が「体験の表出において本質的」（cf. MS130 p.248, 1946.8.1）であるということだ。

したがって、経験の表出をしているにもかかわらず、経験の内容は見いだせないという、意味体験のジレンマは、以下のように言い換えることができる。

> 「わたしがその語を聞いたとき、それはわたしにとっては……を意味していた」と言うひとは、それによって一つの時点と、その語の一つの使用法を指している。――そのときに奇妙

なのは、当然ながら、その時点との関係である[32]。（RPP1 175, PI2ii7, cf. MS130 p.240, 1946.8.1）

「わたしがその語を聞いたとき、それはわたしにとっては……を意味していた」という発言は、特定の時点へ言及しており、その点において、体験の表出の特徴を備えている。しかし他方で、「その語は……を意味する」という文は、言葉の意味に関する説明であり、その点において「その語の一つの使用法を指している」と言われているものと解釈できる。ここには、「言葉の意味とは、言語におけるその使用法である」（PI1 43）という、言葉の意味に関するウィトゲンシュタインの基本的なスタンスが現れていると言えよう。そしてこの立場をとれば、言葉の意味が、ある特定の時点においてこころのなかに生じた体験だとは考えられない。また、言葉の意味を説明するのに、われわれは通常、ある時点に言及して自分の体験について語ったりしないのも事実である。そうだとすれば、この文には、やはり奇妙なところがあると言えるだろう。この言い回しには、経験に関する報告と、言葉の意味に関する説明という、相容れない特徴が同居しているからである。

１項３　意味盲の捉えなおし

ある語をしかじかの意味で聞くということは本物の経験なのか、換言すれば、「わたしがその語を聞いたとき、それはわたしにとっては……を意味していた」といった文は経験に関する報告なのか、言葉の意味に関する説明なのかという問題は、意味盲（δ）に関する議論にも関係してくる。そのアイディアをもう一度確認しておけば、ウィトゲンシュタインが想定している意味盲とは、言葉に顔やこころを感じるといった意味感覚はもたないものの、語を操作することについては何の支障もないひとであった（cf. MS130 pp.88-90, RPP1 6）[33]。意味感覚がなくとも、言葉を使うことができるという想定は、意味を言葉の使用法とする考えと相関する。意味とは、そのとき自分が何を感じているのか、その経験の内容とは、無関係のはずだからである。

しかしながら、意味が経験なのだとすれば、この想定は維持できなくなる。少なくとも、意味盲のひとは過去の時点である語をどのように理解したのかについて語れず、そのために、言葉の意味を最初は別様に理解していた、すなわち誤解したと言うこともなくなるであろうし、同じ一

---

[32] 手稿では、最後の一文が「そのときに奇妙なのは、当然ながら、その時点との関係と一つのテクニックとの関係である」とされているが、タイプ原稿を作成する際に変更された。「テクニック」で意味されているのはそれを特定の仕方で使うことができるということであろうから、一文目の内容をなぞるものだと言える。それゆえ、変更前後でも文意が大きく変わることはなく、問題の要点が「時点との関係」にあることを強調する目的での変更だろうと推測される。本稿でもポイントをより明確にするために、変更後の記載を用いた。

[33] この時期にも、「言葉を聞いたときにある体験が生じないということが、その語を操作することを妨げたり、影響を与えたりするということが、どうやったら起こりうるのか」（MS130 p.232, 1946.7.31, RPP1 171）という言及がある。これは修辞疑問の色合いが強く、意味の体験と語の操作とは関係がない、つまり、意味盲であっても「語の操作」は可能だというのが、ウィトゲンシュタインの基本的なスタンスであったと言ってよかろう。「意味盲（Bedeutungsblind）」という用語は、ここでも使われていないが、三ページほど前で、家の絵を家として捉えないひとを「形態盲（Gestaltblind）」（MS130 p.229, 1946.7.29-30）と呼んでいる。このことから、「盲」という概念の範疇でこの記載もなされたと考えてよかろう。

つの語が、発せられる時点によって異なる意味をもちうるということも理解できないかもしれない。そうなると、この人物は、語の操作においてもかなりの支障をきたすことになるだろう。そうだとすれば、「意味盲は人間の言語を理解しないと言わねばならないのか」（MS130 p.239, 1946.7.31）。しかしそれは、当初ウィトゲンシュタインが想定していたのとは、相容れない結論となる。

> わたしが「意味盲」というケースを想定したのは、言語を使う際、意味の体験にはどんな重要性もないように思われたからである。それゆえ、「意味盲」はそれほど多くのものを失うことはないだろうと思われたからである。〔中略〕
> しかしながら、報告されたある語について、それが何かしら別のことを意味していると見てとるまでは、それが自分にとってはあることを意味していたとわれわれは言うことがあるが、このことは、上で述べたこと〔言語を使用する際、意味の体験には重要性がないということ〕と矛盾する。（MS130 p.266, 1946.8.4, RPP1 202）

語を操作する限りでは、意味の体験には重要性がない、それゆえ、意味盲が失うものは多くはない。それがウィトゲンシュタインの見立てであった。にもかかわらず、過去のある時点に言及して意味について述べることは、実際にある。もしこのような報告がなされるケースにおいて、意味が体験に類するものであるのだとすれば、意味盲はわれわれの言語を、少なくとも十全には、理解することはなくなるだろう。しかしそれを認めれば、言葉の意味について、少なくともその一部を、何らかの体験に類するものだと認めねばならないことになる。それゆえ、意味盲が失うものは多くないという想定は、かれにとって、簡単には譲ることのできないポイントだと考えられる。意味盲とは何ができないひとのことなのかという問いは、言葉の使用法（多義語の意味（β2））と言葉を聞いた際の体験（意味感覚（δ））とのあいだにある緊張関係を解くための補助線となる。

１項４　まとめ

多義語の意味（β2）という主題のポイントは、「あのときその語をしかじかの意味で聞いた」という文には、ジレンマが内包されているように思われるということである。すなわち、経験、体験の表出をしているにもかかわらずその内容は見いだせないということ、言い換えれば、経験ではありえないはずの言葉の使用法について、経験の報告の形式を用いた報告がなされるということであり、それゆえこの文には、経験と言いたくなる側面と、経験と言ってはならないように思われる二つの側面がある。この特徴を理解すれば、ある語をしかじかの意味で聞いたということは、本物の経験なのかと問いたくなるのも、納得がいく。

では、この問いにどう決着を着ければよいのか。選択肢の一つが、そのときこころのなかに何が生じたのか（精神的な過程に関する問い甲）を、内観によって明らかにすることである。つぎに展開されるのは、この立場の批判的な検討となる。

２項　問いへの応答

ある語をしかじかの意味で聞いたということは、本物の体験なのか。この問いを示した後、具

体的な体験を挙げては、その問題点が指摘されるという問答が、およそ一ヶ月にわたってつづく（MS130 p.212-MS131 p.68, 1946.7.22-8.19）。そこでウィトゲンシュタインが何をしようとしているのかと言えば、そのときこころのなかでまさにこれが生じた（問い甲への解答 b）のだから、それは本物の体験なのだと主張しようとする対話者を想定しているのである。次つぎに挙げられる具体例は、各対話者が、生じていると主張する「これ」の候補である。そして、それらの候補を一つずつ斥けていくことで、まずは解答 b が役に立たないことを示そうというのが、この問答の目的だと考えられる。

実際の考察は、単線で進むわけではなく、似たような論点のくり返しや関連事案への言及も多い。しかし以下では、体験の候補を三つに分類し、かれの考察を再構成して提示したい。

２項１　まさにこれが生じている

意味の体験の候補は、三つ（表象イメージ、稲妻のような速さの思考、独特な心的過程）に分類することができる。

一．表象イメージ

まず、意味体験の候補として思いつくもっとも素朴な答えは、表象像が思い浮かぶことであろう。たとえば「ロッカー」という語をロック歌手の意味で聞くとすれば、そのときの体験とは、ロック歌手のイメージが思い浮かんだことだというわけである。

しかしこの解答には、体験の内容が見いだせないように感じられるという、意味体験の前提を満たさないという問題がある。

> わたしの考えとは、すなわち、意味が思い浮かぶということが一定時間持続し、観察することができるとすれば、それを意味の体験と呼ぶことにひとが反対することはないということだ。あるいは、意味が思い浮かぶということが持続しうるのなら、何も――少なくともわれわれに思いついた意味にとって特徴的なものは何も、体験しなかったと言いたくなるということもなかったろうとも言える。（MS131 p.52, 1946.8.16）

表象像が意味の体験であるならば、われわれは意味の体験の内容を見いだせないとはそもそも感じないということである。あのとき「ロッカー」という言葉で、自分は歌手の K を思い浮かべていた等と言うことは実際あろうが、そのように言う場合には、体験があったかどうかわからないと言う気にはならない。もし表象像が「意味」の体験であるのなら、言葉を理解しているときにはつねに、何かを思い浮かべているはずであり、そうだとすれば、われわれが体験の内容を見いだせないように感じるということもない。それでは、意味体験の特徴であったジレンマも生じないし、それが本物の経験なのかと問いたくなることもなかろう。この説明では、われわれが実際に行っている活動を捉えられてはいないのである。

もう一つの問題は、表象像だけでは、意味に備わる志向性の役割が果たせないことである。この点を考えるために、ウィトゲンシュタインは、表象像をすべてスケッチに置き換えるひとという思考実験をしている。

声に出すことによってしか思考できず、スケッチを描くことによってしか想像することのできない人びとを考えてみろ。あるいは、われわれならば何かを想像する場面で、スケッチをするひとと言う方が、もしかすると適切かもしれない。わたしが友人の N を想像する場合に対応するのは、こうしたひとがその友人をスケッチすることではなく、スケッチに加えて、それが友人の N だと言うか、書くかしなければならない。――〔でも、〕かれには二人の友人がいて、互いに似ているうえに同じ名前だったら、いったいどうなるのか。そのとき「きみが意味していた（gemeint）のは、利口な方か、愚か者の方か」とかれに尋ねたらどうか。それにかれは答えることはできないだろう。（MS130 pp.233-234, 1946.7.31, RPP1 172）

「ロッカー」という語で、ロック歌手の K を思い浮かべる。しかし、問題は「かれについてのわたしの表象を、かれについての表象にするのは、何なのか」（MS131 p.62, 1946.8.18, RPP1 262, PI2iii17）ということである。スケッチに描いたイメージがどんなに鮮明にあろうと、さらにはかれの名前を加えようとも、それだけでは、ロック歌手の K を「意味していた」ということにはならない。

想像や思考という意識内容をすべて、スケッチや文字として、いわば外化する人物（以下、B 氏と呼ぶ）という想定を通じて、ウィトゲンシュタインはこのことを示そうとしている。B 氏には、よく似た容姿と同じ名前をもった二人の友人がいたとする。いわば、絵も名前も多義的なのである。そのとき、顔のスケッチを描いても、それに名前を付しても、その意味に決着をつける要素は、その絵のなかにはない。もし意味がそうした絵と文字に尽きるのだとすれば、きみが描いた絵（われわれの場合ならば、思い浮かべた表象像）は誰についてのものだったのかと問われても、B 氏は答えることができない。そうなると、かれは「あのときわたしは……を意味していた」と言えない、要するに「意味盲」だということになってしまうということである（cf. MS130 p.240, 1946.8.1, RPP1 175）。表象像が意味の体験であるとする立場からすれば、求めていたのとは逆の結論が出たことになる。

二．稲妻のような速さの思考

それならば、文を構成する語を逐一言ったり、線をいちいち描いてスケッチしたりするといった、具体的な活動に類するような過程には還元されない一瞬の過程として、意味の体験があると考えればよいのではないか。これが、つぎなる候補「稲妻のような速さの思考」というアイディアである（cf. MS130 pp.235-236, 1946.7.31, RPP1 173）[34]。たとえば「あのロッカーが好きだ」という文を言いはじめたときにはすでに、その文の意味は確定していたはずであり、そうした意味内容を備えた思考、あるいは表象像こそが「意味する」体験なのだというのが、その主張である。言おうとしたときにはその思考はすでに完了しているのだから、その思考は気づかぬほど一瞬に、「稲妻のような速さ」で生じたにちがいないということである。換言すれば、先に想定された、声に出すことによってしか思考できず、スケッチを描くことによってしか想像することので

[34] 元のアイディアはジェームズからとられたと推測される。cf. MS130 pp.235-236, 1946.7.31, RPP1 173, James(1950) vol.1, p.280. また、『探究』第 I 部にも言及がある cf. PI1 319-320

きないひとは、稲妻のような速さの思考はもたない（cf. MS130 pp.241-243, 1946.8.1, RPP1 178）。そして、かれが意味盲であるのは、この種の思考がないからだという仕方で、先の問題を乗り越えようとするわけである。

稲妻のような速さの思考というこのアイディアに説得力を与えるのが、意図（v）に関する言語活動である。話の途中、たとえば「あのロッカー……」と言った時点で、話を遮られたとしても、さっき何を言う「つもりだった」のかと問われれば、われわれはたいてい「あのロッカーが好きだ」と自分は言うつもりだった、そして「あのロッカー」とは、ロック歌手 K のことだとつづけることができる（cf. MS130 pp.235-236, 1946.7.31, RPP1 173）。そうだとすれば、これから話そうとする思考の全体が、話しはじめる前の一瞬にすでに完成したかたちで存在していたはずだというのが、もっともらしくおもわれる。

しかし、一瞬の思考とは、いったいどのような過程なのか。話しはじめる前の一瞬に、それに対応する内容が存在しているのだとすれば、それは自分に向かって話すといった過程ではありえない。なぜなら、話すという過程には、当然ではあるが、一定の時間の幅が必要だからである。このように、稲妻のような速さの思考というものの内実が明らかではないことも問題ではあるが、そもそもそのような思考がなくとも、すなわち、先の意味盲とされた B 氏であっても、同種の言語活動はできるのではないかというのが、ウィトゲンシュタインの指摘するポイントである。

先にみたように、顔のスケッチに名前を付したとしても、「きみが意味していたのは、利口な方か、愚か者の方か」という問いに、B 氏は答えることはできない。「それでもおそらく、『それ〔名前を付したスケッチ〕は、二人のうちどちらを表しているのか』という問いには、かれは答えることができよう」（MS130 p.234, 1946.7.31, RPP1 172）。あるいは、「『だれのことをきみは意味したのか』と言う代わりに、『説明して！』とか『つづけて！』等と言う」（MS130 p.248, 1946.8.1）[35]とすれば、この人物は、そのスケッチを指して「かれはあたまがいい」といったようにつづけることができるだろう。

では、B 氏が答えられる問いと答えられない問いでは、どこにちがいがあるのか。それは、最初の問いでは「きみが意味していたのは……」と、過去に「意味した」ことについて問うているのに対して、「二人のうちどちらをそれは表しているのか」という問い、「つづけて！」「説明して！」という命令が求めているのは、その絵をこれからどう使うのかを問うているということである。「この〔後者の〕場合には、その答えとは絵のさらなる利用法にすぎないのであって、体験に関する発言ではない」（MS130 p.234, 1946.7.31, RPP1 172）のである。第一、「『つづけて！』という命令への応答には、体験の表出にとって本質的な点である、過去の（あるいは少なくとも一つの）時点への言及がまったくない」（MS130 p.248, 1946.8.1）。要するに、かれは過去に自分のなかに生じたことを思いだして答える必要はなく、自分が描いたスケッチの使用法を答えれば、「誰を意味したのか」という問いに対するのと、似たような答えを与えられるということである。

そうだとすれば、この人物とわれわれの言語活動は、どれほど異なるのだろうか。

35　これらが対象としているのは、「N から手紙をもらった」という発言の「N」についてである（cf. MS130 p.247, 1946.8.1, RPP1 181）。しかしいまの論点に鑑みて、絵に付された名前が誰のことを意味しているのかという問いとして理解しても問題ないと判断した。

「わたしは Bank へ行って、お金を受けとってこなければいけない。」――この文をきみはどう理解したのか。この問いは、「きみはこの文をどう説明するのか、この文でどんな行動を予想するのか」といったことと別のことを意味しなければならないのか。〔中略〕
ここで、理解のあらゆる体験は、言語ゲームの使用、実践にかき消されるのではなかろうか。それが意味するのはただ、ここでそのような体験はまったくわれわれの関心事ではないということだ。（MS130 p.253, 1946.8.2, RPP1 184）

「Bank」という語を理解したとき、きみはそれをどう理解したのか。この問いに、わたしのなかに「銀行」という思考、表象像が生じたので、「銀行」として理解したと答えることは、あるかもしれない。しかしもし、きみはこの文をどう説明するのかと問われていれば、われわれはその文がどのように使われるのかを説明したであろうし、その答えには、時点への言及という体験概念の痕跡はそもそもない。そして、この答えは「Bank」という語をわたしがどう理解したのかということを、たしかに伝えるだろう。そうだとすれば、「意味盲のひととは、言葉を聞いたときの意味の体験というものについて語る傾向がないというだけなのか？！」（MS130 p.249, 1946.8.1）。つまり、意味盲のひととわれわれとのちがいは、体験の有無やその内容のちがいにあるのではなく、語り方のちがいにあるのではないかということである。

しかし、これにもまだ異議をとなえ、「意味する」とは体験だと主張することはできる。

三．独特の心理学的現象

つねに声に出して考える人びとというフィクションに対して、つぎのように抗議したくなるかもしれない。「家を出たとき、『パン屋に行かねばならない』とわたしは自分に言った」とそのようなひとの一人が言ったとする――このひとにつぎのように問うことはできるのではないか。「でも、きみはこれらの言葉を本当に意味したのか。きみはそれを言葉の練習としても、引用としても、ふざけて、あるいは誰かを混乱させるためにも、言うことができた。」（MS130 p.257, 1946.8.3, RPP1 192）

声に出された文が、まさに「パン屋に行かねばならない」という意味をもつのは、「言葉に伴われる体験」（MS130 p.257, 1946.8.3, RPP1 192）に依る。なぜならば、「パン屋に行かねばならない」という言葉だけでは、そこに本当にまさにその「パン屋に行かねばならない」という意味があるのかはわからないからである。その言葉自体は、言葉の練習として言うこともできるし、小説の音読の可能性もある。いずれの場合にも、「パン屋に行かねばならない」という発せられた文自体は同一なのだから、その「意味」というものは、その言葉自体とは別の領域に、言葉に伴われるもの、並列するものとして存在するはずだ。しかし、ここまでみてきたように、そのときに自分に対して言ったことや表象像は、その候補にはならなそうである。それでも、「ある深さの体験」「ある反響の体験」（MS130 p.258, 1946.8.3, RPP1 193）、あるいは「まさに（その経験に）独特の（*spezifisch*）表現によってのみ記述される」（MS130 p.165, RPP1 105）経験が存在しな

ければならないというわけである[36]。しかしながら、この想定には混乱が含まれている。まず、こうした体験が生じると思われる場面を確認していきたい。

> 他人が言った言葉を突然くり返す。「七時です」とかれは言うが、わたしは最初は何の反応もしない。それから、「七時？！それじゃあもう遅い……」とわたしは 突然叫ぶ。かれの言ったことが、はじめてわたしの意識にのぼったのである。しかし、わたしがその「七時」という言葉をくり返したとき、いったい何が起こったのか。それについて、わたしは何も興味深いことが言えない。かれが何を言ったのか、わたしはそのときはじめて理解したといったことをくり返すしかないのだが、それでは何も進まない。この「くり返すしかない」ということが、「独特の過程」について語る根拠になっている。（MS130 pp.284-285, 1946.8.5, RPP1 214）

「七時です」と聞いた時点では理解しておらず、その後「七時？！」とくり返したときにはじめて「七時」という言葉を理解するという場面である。しかしながら、ではその理解したはずの時点で「何が起こったのか」と問われても、「そのときにはじめて理解した」といったことをくり返すほかない。要は、ここでもわれわれは、求める体験の内容を見いだすことができない。そこで、その体験は「そのときにはじめて理解した」という表現によってのみ記述される「独特の過程」なのだと、むしろ強弁するのである。

しかしながら、先にも述べたように、「『独特の心理学的現象』という表現は私的な直示的定義に対応している」（MS130 p.265, 1946.8.4, RPP1 200）。『探究』第 I 部の私的言語に関する議論においてすでに考え尽くされたように（cf. PI1 243-315）、私的な直示的定義は不可能であり、つまり、この独特の心理現象という想定には混乱があると言わざるをえない。

また一方で、もし意味の体験とはそういった独特の過程なのだと言うとすれば、体験の表出があるにもかかわらず、その体験内容が見いだせないというジレンマの前提を満たさなくなる。本節の冒頭で引用した箇所のつづきには、すでにこのことが指摘されている。経験の内容は見いだせず、われわれに思いだせるのは服のようなものだと述べた後は、つぎのようにつづいている。

> そうすると、「きみは〔表現と〕別の内容を探し求めるべきではない」と言いたくなる。経験の内容とは、まさに（その経験に）独特の表現によってのみ記述されるということだ。しかし、これも満足のいくものではない。というのも、それにもかかわらず、まさにそこには内容がないとわれわれが感じるのはなぜなのか。（MS130 p.165, RPP1 105）

「あのとき『ロッカー』という語をロック歌手の意味で理解した」と、われわれはたしかに言う。しかし、まさにその「……と理解した」という表現で、意味理解の経験が記述できるのだとすれば、それこそが経験の内容なのだから、それを見いだせないように感じるということは、そもそもなかったはずだということになるのである。

36　この論点は、すでに『探究』第 I 部にもみることができる。cf. PI1 594.

ここまで、意味体験の候補（表象像、稲妻のような思考、独特の過程）を確認してきた。具体的な候補を挙げることの目論見とは、多義語をしかじかの意味で聞いたり、意味したりするときには、こころのなかでまさにこれが生じる（問い甲への解答 b）のだから、それは本物の経験であると主張することである。しかし、その主張はことごとく斥けられてきた。では、選択すべきは、そういったときこころのなかには何も生じない（問い甲への解答 a）、それゆえある語をしかじかの意味で聞くことは本物の経験ではないという解答なのか。ウィトゲンシュタインはそう考えているわけではない。次項では、この種の解答の問題点を明らかにしていきたい。

２項２　何も生じていない

ある語をしかじかの意味で聞くときに、われわれのなかには何も生じないという解答 a のどこに問題があるのか。この解答に関する考察は、解答 b（そのときまさにこれが生じる）に比して分量も少なく、『探究』第 II 部への載録もない。その理由の一つは、解答 b のように「これ」の候補を複数挙げられないことがあるが、こちらの立場は、ウィトゲンシュタインの考えをよりラディカルにした主張だということにも依ると思われる。その意味で、かれの立場との親和性は解答 b より高いが、問題が何もないわけではない。

まず、何も生じないという主張が、対処すべきポイントから考えていきたい。それは、「あのときわたしは……と意味した」という過去形の用法をどう理解するのかである。すでに確認したように、ある時点に言及する文をわれわれが用いるということは、「意味する」が経験であることを示唆する。では、こうした用法をどう理解すれば、そのとき何も生じていないと言うことができるのか。その手がかりは、以下の記載にみてとることができる。

> 「きみが話しはじめたとき、きみが……しようとしているのだと、わたしは考えた。だから、わたしも……というように動いたんだ。」つまり、ひとは自分がしたことについて、そのとき自分が何を考えていたのかによって説明する。こういった説明をわたしは後になってはじめて思いつくのか。実際に……と考えたから、わたしはこのように動いたのではないのか。（MS130 p.286, 1946.8.7, RPP1 217）

自分の過去の行為を説明するために、そのとき相手の言葉をどう理解したのかを述べるという場面だが、ここで示された二つの可能性は、そのときしかじかのことが生じた（解答 b）と、何も生じなかった（解答 a）という二つの主張を、別の仕方で再現したものと解釈することができる。すなわち、一方は、相手の言葉をしかじかに理解するという何らかの過程が実際に生じ、それを思いだして「そのとき……と考えた」と言っているという主張であり、これが解答 b に対応する。もう一方は、たとえば「なぜそんなことをしたのか」と後で聞かれた時点から遡行して、「そのときわたしは……と考えたからだ」という言い方で、事後構成的な説明したにすぎないということである。このように理解すれば、「考えた」と過去形で語っているとしても、そのときに何かが生じていたと考える必要はなくなる。これが解答 a に対応すると考えてよかろう。

そして、この後者の答えを、もっともラディカルにとるとすれば、過去の時点に言及して「意味した」「……という意味で聞いた」といった文の「すべて」が、遡行的に構成された説明だとい

う主張をすることになる。またそうなれば、意味盲は何も失わないという結論になるだろう。

この立場は、言葉の意味とはそれがどう使われるのかだというウィトゲンシュタインの考えに、たしかに沿っているようにもみえる。いわば、「意味」にまつわるわれわれの活動のすべてを、使用に一元化する主張だと言えよう。しかしこの立場をとれば、われわれの言語使用の実情を矮小化することになるのである。

> 以下の二つのケースを考えてみよ。
> １．わたしはあるひとに多義的な命令（たとえば「Bank へ行け！」）を与える。〔すると、〕かれは一方の意味で命令に従う準備をするので、問いつめると、かれはわたしの言っていることを理解して、「あなたが……を意味しているのだと、わたしは考えたのです」と言う。
> ２．わたしがあるひとに何かしら話をしていると、かれは「わたしは最初、あなたが……について話していたのだと考えていました」と言う。
> １の「あなたが……を意味していたのだと、わたしは考えたのです」という言葉は、そのときに体験された何かに関する記述として理解される必要はないようにわたしには思われる。しかし、二つ目のケースでこれに対応している言葉は〔そのように理解されねばならないように思われる〕。だから、意味盲のひとは前者の言葉は言うが、後者の言葉は言うことができないであろう。（MS131 pp.9-10, 1946.8.10）

１の「あなたが……を意味しているのだと、わたしは考えたのです」という発言は、事後構成的な説明と解釈することができるだろう。しかし２は、最初に命じられた時点で、その「Bank」という語について何がしか思い浮かべたり考えたりしており、それをずっと継続的に考えているか、後から思いだして「わたしは最初、あなたが……について話していたのだと考えていました」と表現したというケースが想定されている。そうだとすれば、これはやはり、過去の思考や体験を「意味していた」という仕方で語っており、それゆえ、意味盲のひとは２を言うことはできないということになる。

ある語をしかじかの意味で聞いたときに、何も生じていなかったという主張 a をもっともラディカルにとれば、過去形を用いて意味について語る文のすべてが、１のような事後構成的な説明に還元されることになる。しかし、ウィトゲンシュタインはそうした還元を支持しないだろう。かれは、自分の立場を「夢」に託して語っている。

> 意味が思い浮かぶことを夢と比較すれば、われわれは通常夢をみずに語る。〔中略〕
> 「意味盲」とは、つねに夢をみずに語るひとであろう。（MS131 pp.16, 17, 1946.8.11, cf. RPP1 232）

たしかにわれわれは多くの場合、夢をみずに、すなわち意味を思い浮かべることなく[37]、語る。しかしながら、けっして夢をみないわけではないと、ウィトゲンシュタインはここで示唆してい

[37] 「意味を思い浮かべる」というのは、表象像に対する批判的な検討（２項１）を踏まえれば、問題含みの表現であるが、その検討はつぎの２項３で扱う。

る。そうだとすれば、夢をみずに語るひと、意味盲のひとが失うものはたしかにそれほど多くはなくとも、何かしら失うものはあると理解すべきであろう。

しかし、ある語をしかじかの意味で聞いたとき、こころのなかには何も生じないという主張 a を採れば、過去の意味について述べるすべて文が、遡行的な説明（１のケース）に還元されることになる。それでは、われわれの言語実践を扱い切れないのである。

２項３　まとめ――意味盲は何を失うのか

以上、ある語をしかじかの意味で聞く、考えるとは「本物の経験」なのかという問題がどのように扱われているのかを確認した。それは、そのときわたしのなかに何が生じるのかという精神的な過程に関する問い甲への二つの答え、すなわち、そのときまさにこれ（表象像、稲妻のような速さの思考、独特の過程）が生じる（解答 b）と、何も生じない（解答 a）に対する、批判的な検討として再構成することができる。

それは本物の経験なのかという問いがなぜ生じたのかということから振りかえれば、「あのとき、その語をしかじかの意味で聞いた」などと、われわれは経験の表出に当たる表現をするにもかかわらず、その経験の内容が見いだせないためであった。そうした特徴は、「わたしがその語を聞いたとき、それはわたしにとっては……を意味していた」といった文に、経験に関する報告と、言葉の意味に関する説明という相容れない特徴が同居しているということにも現われている。では、この問題を扱うのに、なぜ精神的な過程に関する問い甲は不十分であるのか。そして、かれはこの問題をどのように解こうとしているのか。それを理解するためには、意味盲というアイディアに注目するのが、有益である。

そのアイディアを再確認すれば、それは、「われわれの言葉の馴染みの顔、それらの言葉は恣意的な記号ではなく、いわばその意味の像だという感覚、それらの言葉はその意味をいわば自分のなかに取りいれているという感覚――そういったことすべてと無縁な言語」（MS130 pp.88-90, RPP1 6）、あるいは「人びと」（cf. PI2xi294）であった。そして、「そのような言語とは、語を操作する」言語であって、「そこにおいては、言葉には『こころ』がない」（MS130 pp.88-90）。これが、ウィトゲンシュタインの念頭にある「意味盲」である。MII-2 において、意味盲に関するかれの考察はさらに深まっている。その思考を追い、意味盲のひとにできないことは何だとかれが考えているのかを明確にしていきたい。

MI での規定に加え、「意味盲とは、そもそも、意味が空になっているという体験をしないひと」（MS131 p.28, 1946.8.12）だと、言われるようになる。意味が空になる体験とは、MI を踏まえれば、馴染みの言葉から「こころ」が抜け落ち、それはもはや意味を取りこんではおらず、味気ない記号、さらには単なる線や音になったように感じられる体験であろう。ここで考えるべきは、その感覚が何に依っているのかである。

> たとえば、どんな文脈にも属さない言葉が、つかの間一つの意味をもち、その後すぐに別の意味をもつようになるとか、その語を何度かつづけて発していると、どんな「意味」も消えてしまうといった現象は、存在する。そしてここで問題になっているのは、思い浮かべることなのである。（MS130 pp.227-228, 1946.7.30, RPP1 167）

意味が消えてしまう現象とは、意味が空になったように感じることと同じであろう。また、これと同様の現象として、文脈に属さない単独の言葉が次つぎに意味をスイッチするように感じられるという、アスペクト転換に似た事例もここでは挙げられている。そして、これらの現象に係わるのは、「思い浮かべること」なのだというのが、ウィトゲンシュタインの見立てである。かれは詳細を語ってはいないが、具体的にはつぎのようなことになるだろう。たとえば「ロッカー」という一語だけを見たとき、最初は収納棚を思い浮かべ、それからロック歌手を思い浮かべる。すると、われわれには意味が転換したかのように感じられる。また、同じ語を何度も口に出すと、次第に何も思い浮かべられなくなり、それによって言葉から意味が抜け落ちたように感じる。

ここからまずみてとるべきは、われわれは言葉を聞いたときに何かを思い浮かべたり、何かを考えたりすることは実際にあるということである。そういった体験は事後構成的にでっちあげられるのだと、ウィトゲンシュタインは言いたいわけではない。もし「あのときわたしは、その意味を思い浮かべた」といった表現すべてを拒否すれば、われわれの言語活動の多様性は削がれることになるだろう。ここにおいて、ある語をしかじかの意味で聞いたとき、何も生じないという解答 a は斥けられねばならない。では、そうした表象像が「意味」（２項１、解答 b の一つ目の候補）なのかと言えば、もちろんそうではない。表象像には、意味の役割を担うことはできないからである。

そうだとすれば、そのとき思い浮かべられているものは、「意味」ではなくとも、意味感覚 (δ) ではありうると解釈するのがウィトゲンシュタインの立場なのか。この解釈は有望そうにもみえるが、かれの想定とは異なっている。というのも、意味盲のひとは何も思い浮かべることができないひとではない、とかれは考えているからである。

> さて、ふたたび意味盲のひとについて。それらの名前〔「モーツァルト」と「ベートーヴェン」〕を聞いたり、眺めたりするときに、計量不可能な何がしかによって、それらが区別されるとは感じない。そのことで、かれはいったい何を失うのか。——それでも、ある名前を聞いたときに、その名をもつある人物がまず思い浮かび、それから別の人物がおもいつくということが、かれにはありうる。——〔しかし、〕この名をもつある人物がかれに思い浮かんでも、その名前を特別な仕方で体験していると、かれが言うことはない。それは、いわば、まったく無味乾燥に思える。
> つぎの言い方を思いだせ。どんな言葉にも意味だけでなく、こころがある。（MS131 pp.29-30, 1946.8.12, 四文目まで RPP1 243）

ここで、意味盲のひとでも、ある言葉を聞いたときに、その言葉に対応するとわれわれならば言いたくなるような何がしかを思い浮かべることはあるとされている。つまり、思い浮かべられた表象像は、意味盲であろうとなかろうと同じでありうる。

では、意味盲のひとに何ができないのかと言えば、その言葉を「特別な仕方で体験している」と「言う」ことである。「言葉にはこころがある」、あるいは「計量不可能な何がしかによって、それら〔言葉〕が区別される」といった表現は、この「特別な仕方」の一例と考えればよかろう。

ほかにも、「〔言葉の〕全用法が、一瞬のうちにすでに何らかの仕方で、完全に含まれているという感覚」（MS130 p.152, 1946.5.26-7.21）、あるいは「その文のこの言葉は、まさにこの意味で発せられた。いわば、この雰囲気で」（MS130 p.239, 1946.8.1）、「〔意味の〕経験の内容とは、まさに（その経験に）独特の表現〔たとえば、『あのとき、その語を……という意味で聞いた』という表現〕によってのみ記述される」（MS130 p.165, RPP1 105）といった言い方も、ここに含めることができるだろう。つまり、言葉を聞いた際に思い浮かべたことを、「意味」「意味する」という言い回しを用いて、われわれは実際に語ることがある。しかもしばしば、「言葉の全使用が一瞬のうちに含まれる」とか「言葉の雰囲気」といったように、よく考えてみればそれが何を言っているのか不明瞭な表現を使って、語るのである。意味盲のひとにできないのは、こうした語り方なのである。

> 意味盲のひとは、いずれにせよ、言葉を聞いたり、発したりする際の体験を語の意味という観点で見ることはないだろう。（MS131 p.25, 1946.8.11）

意味盲のひとは、言葉を聞いた際に何の体験もしないひとと想定されているわけではない。かれらにできないのは、言葉を聞いた際の体験を「意味」に関連づけて見ることであり、それゆえ、かれらはある語を聞いた際に何がしかが思い浮かんでも、それを「意味が思い浮かんだ」と呼ぶことはない。同様に、ある語をつづけて聞いたために何も思い浮かべることができなかったとしても、それは「意味が空になる体験」とは呼ばれない。

つまり、意味盲のひとは、多義語の意味（β2）はわれわれ同様理解できるが、意味感覚（δ）について語ることはない。これが、ウィトゲンシュタインの想定している意味盲である。

この想定に照らせば、ある語をしかじかの意味で聞いたとき、わたしのなかに何が生じるのかという精神的な過程に関する問い甲は、われわれの言語実践をあまりに単純化して捉えていたと言うことができよう。この問いは、結局のところ、意味の体験は存在するのか否かという二者択一を迫る。意味盲についても、言語活動についてほとんどすべてを失うひとか、何も失わないひとか、極端な選択肢しか示すことができない。b の立場（ある語をしかじかの意味で聞いたとき、わたしのなかでこれが生じる）をとって、「意味」とは体験にほかならないと主張するのなら、意味を体験しない意味盲のひとは、ほとんどわれわれの言語を習得できない人物ということになるし、a の立場（ある語をしかじかの意味で聞いたとき、わたしのなかでは何も生じない）をとれば、過去の時点に言及して意味を述べる文のすべてが事後構成的な説明ということになるので、意味を体験できなくとも、そのひとは何も失わないことになるだろう。

それに対して、ウィトゲンシュタインの意味盲という想定から読みとられるのは、われわれの言語実践の複雑さである。すなわち、ある語をしかじかの意味で聞く際に、われわれが何がしかの体験をすることはあるということ、また、その体験は「意味」ではないにもかかわらず、われわれはそれを「意味」「意味する」という表現によって語ることがあるということである。

以上を踏まえれば、われわれが検討すべきは、そうした矛盾を孕んだ言語表現の実相である。この問題には先で取りくむことになるが、その前に、ある語をしかじかの意味で聞くとき、何が生じるのかという問い甲が絶望的にくり返されるのはなぜなのかということを明らかにしたい。

本稿でここまでみた考察においては、いずれの答えも不十分であるだけで、精神的な過程に関する問い甲がくり返されてしまう理由はまだ明らかにされていない。ウィトゲンシュタインの思考の順序にしたがって、この点をつづけてみていきたい。

3項　そのとき何が生じたのかという問いは、なぜ絶望的なのか

本節冒頭で確認したように、ある語をしかじかの意味で聞くということは本物の経験なのかという問いがまず立てられた。「本物の経験」なのかと問われたのは、体験の表出をしているにもかかわらず、体験の内容が見いだせないというジレンマが、そこに内包されているからである。そしてこの問いに、そのときこころのなかに何が生じたのか（問い甲）をもって答えようとしても、満足いく答えは得られなかった。この事態を捉えるのに、示唆的な一節がある。

> 難問（Schwierigkeit）を深く捉えることは、難しい。
> なぜなら、浅く捉えれば、それは難問のままだから。難問は根ごと抜きとらねばならない。つまり、それらの事柄について新しい仕方で考えはじめなければならないということだ。その変化は、錬金術の思考法から化学の思考法への変化のように、決定的な変化なのだ。――そういった新しい思考法は、確立するのがとても難しい。
> 新しい思考法が確立されれば、それまでの問題は消えてなくなる。それまでの問題をもう一度把握するのが難しくなるからだ。というのも、問題は表現方法のなかにあるのであって、新しい表現が着せられれば、かつての問題は古い服と一緒に脇へ置かれることになるから。（MS131 pp.48-49, 1946.8.15, CV p.55）

浅い捉え方のままでは難問はそのまま残るのであって、新しい思考法、問題の新たな表現方法へと転換する必要があると言う。これを、単なる一般論としても読むことはできるが、ここまでの考察の総括と解釈すると、精神的な過程に関する問い甲の問題点と今後の課題を整理することができる。

つまり、難問とは「ある語をしかじかの意味で聞く」といった発言に備わったジレンマのことであり、その浅い捉え方とは、そのとき何が生じるのか（問い甲）がはっきりすれば、それが本物の経験なのかも自ずと判明するはずだと思っていたことだと解釈できるのである。

では、このような捉え方では難問がそのまま残るとはどういうことか。それはまず、ここまでみてきたように、どちらの解答にも問題があり、結論が出せないということがある。しかしさらに注目すべきなのは、体験の有無を問題にしている限り、それでも「これ」が生じる（解答 b）という反論がつねに可能であるということである。

> さて、「そのような場合に、たとえば表象像やわたしが言う言葉以外には何も、わたしは体験しない」と、当然ながら、わたしは言うことができよう。――しかしこれに対して別のひとが、かれはやはりそれ以上の体験をする、意味は何らかの仕方で実際に目の前にあるのだと言うことはつねに可能であろう。（MS131 p.53, 1946.8.16）

ある文を特定の意味で言う際に、表象像や発話された当の言葉以外は何も体験しないのだと、雑駁に言えば「意味」とは体験されるものではないと、わたし、つまりウィトゲンシュタインは言うことはできる。しかし、たとえそう言ったとしても、それでもやはり意味というものは体験されるはずだという反論は、つねにありうるのだとかれは言う。

なぜかと言えば、そのように言うひとは、たとえば内観して自分の内側に生じていることを「意味」だと認定したから、そう主張しているのではなく、むしろ意味に関する一つのイメージを固持しようとしているからではなかろうか。そしてそのために、そのイメージに適う説明の方法を探しているのである。

難問に悩まされつづけるという事態を生んでいるのは、こうしたわれわれの思考法自体である。ウィトゲンシュタインは「夢」というテーマに託して、その構図を後に語っている。以下は、次節で扱う範囲（MII-3）になるが、ここで先に確認しておきたい。

> では、夜のあいだにその夢は実際に自分に現れていたのかどうか、それともその夢は目が覚めたひとの記憶現象なのかどうかという問いを立てることは、そもそも意味がないのか。それは、われわれがその問いで何を意味しているのか、すなわちこの問いをわれわれはどのように使うのかにかかっている。というのも、夢について、眠っているひとのこころに（たとえば一枚の絵画が示されるように）あるイメージが浮かぶという像をわれわれがつくっているのなら、そのときにはこの問いを立てることにはもちろん意味があるから。この問いで問われているのは——事態はこうなのか、それともこうなのかということであり、それぞれの「こう」には異なる像が対応しているのである。（MS131 pp.190-191, 1946.9.3, RPP1 369, cf. PI2 vii53）

「夢」（λ）とは、「わたしはこんな夢をみた」と目が覚めた時点で思いだされたというかたちでしか語られない[38]。その点において、過去形で語られる「意味した」が経験なのかどうかという問題と似たところがあると言えよう。では、夢について語るひとは、眠っているあいだの体験を思いだしているのか、それとも、目覚めた時点で思いついた話をしているのか。この二つの選択肢は、ある語を聞いた過去の時点で、わたしのなかにこれが生じたという主張（b）と、そのときには何も生じておらず、過去について話す際に遡行的に体験を構成しているにすぎないという主張（a）と重なっている。

そしてこの選択肢に意味があるのかどうかは、われわれがどんな像（κ）をつくるのか次第だと、ウィトゲンシュタインは言う。すなわち、夢とはあたまのなかで上映される映画であるという捉え方をするひとにとっては、夢は眠っているあいだに自分に現れるものなのか否か、という問いには意味があろう。同様に、意味とは、物理的な音とは別の領域にある何かしらもっと重要な精神的な過程であるはずだ、それが物理的な音に伴われてはじめて言葉は意味をもつようになるという像を描くひとには、ある語をしかじかの意味で聞いたとき、わたしのなかに何が生じたのかという問い甲は意味をもつ。

そして、この問いに具体的な候補を挙げて答えるひとが実際のところ求めているのは、その像

38　本稿では、「夢」と「思いだす」を一つのスレッドとして扱っている。註 30 参照。

を守ることなのであろう。だから、何も生じてはいないと反論されても、たとえば「言葉を聞いているあいだひとは二種類の体験をする、すなわち、〔一つは〕表象像といったもの、加えて、何かしらまったく捉えがたいもの、本来の理解を体験する」（MS130 p.278, 1946.8.6）といった仕方で、何かしらの答えを用意して、その像を固持しようとする。「何かしらまったく捉えがたいもの」あるいは、「計量不可能なもの」「独特の表現によってのみ記述されるもの」、どれもその体験の内容について答えていないことに鑑みても、具体的な体験を発見したという理由で、それらを主張しているのではないことが推察される。むしろ、これらをもちだすひとが求めているのは、何かしら精神的な過程が存在しなければならないという像を正当化してくれるものである。

つまり、この問いにかかずらっているかぎり、そのとき何も生じない（a）と言っても、まさにこれが生じている（b）と反論されるといった具合に、この問答が延々とつづく。それゆえ、そのときわたしのなかに何が生じるのかという問い甲は、絶望的にくり返されるのである。

だからこそ、この問いの立て方をわれわれは抜本的に変える必要がある。つぎにウィトゲンシュタインが取りくむのは、それを可能にする「新しい思考法」の確立である。

３節　MII-3：新しい思考法への転換

ここから、新しい思考法への転換をみていくことになる。期間にして言えば、1946 年 8 月後半から半月ほど（MS131 pp.68-207, 1946.8.19-9.7）と短いが、実り多い時期と言える。

ある語をしかじかの意味で聞く際に、こころのなかに何が生じるのかという、精神的な過程に関する問い甲は、像に立脚しているということを、前節の最後に確認した。新しい思考法へ向かうためにはまず、この「像」というものについて、とりわけその起源を理解する必要がある。

> でも、そういった〔言葉に随伴する精神的なものが重要だという〕思いちがい、あるいは混乱した像はどこから来るのか。――ひとはプリミティブな像を使い、われわれには謎に思えるものの説明をそのなかに見るのだ。――〔謎の〕解明ならば、見通すことの非常に困難な事態を、それは見通しよく叙述するのだろう。〔しかし、〕そういった叙述の代わりにわれわれが与えるのは、像なのだ。それは、まさに諸々の像がそうするように、説明しているように思えても、難問は解かれないまま残っている。（MS131 p.68, 1946.8.19）

ここで直接的に言及されているのは、「語や文には何かしら精神的なものが伴われていて、この随伴物が重要なのだ。この随伴物が、いわば、言葉を現実と、このように関係づけたり、別様に関係づけたりする」（MS131 pp.67-68, 1946.8.19）という像である。では、そうした混乱した像はどこから来るのか。この問題を解明することが、MII-3 の課題である。そしてここにはすでに、その答えも示されている。すなわち、プリミティブな[39]像を謎の解明ととり違えることによって、

[39] ウィトゲンシュタインが「プリミティブ（primitiv）」に込めている意味を、確認しておきたい。『探究』第 I 部において、この形容はしばしば「言語」に対して用いられ、四つの名詞のみから成る建築家の言語ゲーム（PI1 2）や言葉を学ぶ過程にある子どもの言語使用（PI1 5）、動物の鳴き声（PI1 25）が典型である。これらの事例から推察されるのは、われわれの言語よりも単純で、原初的な言語実践の特徴を強調するために、「プリミティブ」という語が選択されているということである。この

というのがその答えである。ここでまず考えるべきは、プリミティブな像とは何かであり（１項）、プリミティブな像からどのようにして混乱した像に至ってしまうのかをより具体的に理解することである（２項）。以上を踏まえたうえで、かれの求めた新しい思考法とは何であるのかを明らかにしたい（３項）。

具体的な考察に入る前に、本節のポイントとなる「像（Bild）」（κ）という概念に、ウィトゲンシュタインが込めている意味を、確認しておきたい[40]。その基本的なアイディアは、すでに『探究』第 I 部で完成している。像とは、「われわれの文法を像的（bildlich, 比喩的）に描いたものであり」、「事実ではなく、いわばイラスト化された言い回し」（PI1 295）とされていた。たとえば、「どんな棒にも長さがある」という文は、「棒」という概念の説明であるが、もしこの文を像（絵）に描くとすれば、特定の長さをもった一本の棒を描くことになる。しかし、このようにイラスト化すると、これが文法を描いているということが忘れられてしまう。というのは、「その棒の長さは二メートルだ」という文は事実を記述しているが、これを描けばやはり一本の棒の像になるからだ。この二つの文にはまったく異なる役割があるにもかかわらず、両者の像（絵）は似たようなものになる（cf. PI1 251）。ここに、哲学的な混乱が生じるというのが、ウィトゲンシュタインの見立てである。

これが、新しい思考法を理解するといういまの課題にとって、もっとも重要な「像」の基本となる用法である。しかしながら、ドイツ語の「Bild」には多様な意味があり、ウィトゲンシュタインも文脈に応じてさまざまな意味を込めている。絵や彫像、表象像、あるいは『論考』を念頭においた対象の写像、またたとえば「バラ色の人生」のような比喩的な言い回し、さらには範例や典型の意味で使われることもある。「Bild」という語のこうした多義性を、おそらく意図的にウィトゲンシュタインは利用することで、「像」という概念を第 I 部とも変容させながら、ダイナミックに論述を展開している。このダイナミズムを失わないよう、以下では、基本的に「像」という訳語を当て、適宜その意味するところ補っていくこととする。

１項　プリミティブな像とは何か

ある語をしかじかの意味で言う、聞く際に、こころのなかにまさにこれが生じるという考えを、ウィトゲンシュタインは批判的に検討した（前節２項１）。これに対して起こるであろう一つの反応を、かれは想定している。

> でも、人間にはこころはなく身体だけがあると、きみは言うのか。（MS131 pp.68-69, 1946.8.19）

傾向は、第 II 部においてはさらに強まり、「プリミティブな叫び」（PI2ix82）や「まだしゃべることのできない子どものプリミティブな反応」（PI2xi215）、視線やしぐさ、一つの単語といった「プリミティブな反応」（PI2xi289）といったように、言語以前とも呼びたくなるような「叫び」や「反応」と結びついた仕方で用いられるようになる。

40　この種の「像」については、これを「哲学的像」と呼び、『探究』の「治療」の対象であったとする Fischer(2011), 大谷(2014)らの解釈、誤った文法的概念を寓話的に画像化する「文法像」を焦点化する鬼界(2013)の解釈などがある。また、ウィトゲンシュタインが用いる「像」の多様性については、Eagan(2011)が論じている。本稿の「像」解釈もこれらに学んだ。

ひとがある語をどのような意味で理解したのかという問題にとって、その言葉をどのように使うのか、要するに、そのひとが何を言うか、どうふるまうのかということだけが重要なのだとすれば、必要なのは、身体がそれなりの応答をするということだけになるように思われる。もしそうだとすれば、同じことはこころなしの身体にもできるだろう。そうではなく、人間には、ふるまいには還元されない「こころ」があるはずではないのか。そう言いたくなるということだ。

こうした対話者の反応は、前節で挙げた諸論点を理解したうえでの反論というより、「こころ」というものが軽視されることに我慢ならないといったような、ある種の感情的な反発にもみえる。しかしながらウィトゲンシュタインは、むしろそのナイーヴさゆえに、この反応に関心を向けているのではなかろうか。というのも、この反応を引き起こすのは、われわれに深く染みついた「こころ」にまつわる像だからだ。そしておそらくかれ自身も、そうした像に馴染んでいる一人なのである。かれは、対話者の言いたがっていることを、おそらくはかれ自身がよりコミットできるかたちに捉えなおして、つぎのように自問している。

> でも、肉体が解体しても魂（Seele、こころ）は存続しうるという宗教の教えはどうか。その教えるところをわたしは理解するか。もちろん、わたしはそれを理解している。——そのときに、わたしはさまざまなことを想像することもできる。（MS131 pp.69-70, 1946.8.19, RPP1 265, PI2iv23）

身体がなくなっても魂、こころは存続しうるという教えを、自分は理解するか。この問いは先の対話者の考えを、別の仕方で表現したものと言える。というのは、ふるまいには還元されないこころにせよ、身体なしに存続するこころにせよ、「こころ」とは身体とは別の次元にあるもの、しかも身体よりも人間にとって重要なものだという前提が共有されているからである。

つまり、身体なしのこころという教えを理解できるとすれば、自分も対話者と似たような考えをもっていることになる。では、意味とはその使用であるという立場をとるということは、人間には身体だけがあればよいと考えることなのか、またそうだとすれば、「こころ」に関する自分の信念に、ウィトゲンシュタインは実のところ反しているということになるのか。ここで、意味に関する自身の考えを一貫させるためには、「いいや、身体なしのこころというものは、われわれには理解できないのだ」と答える方が簡単である。しかしながらかれは、この問いに、「もちろん、わたしはそれを理解している」と、逆の答えをしている。この一見相反するようにみえる両方の態度を両立するかたちで理解することが、かれの考察を捉えるためには、重要である。

1項1　こころの像

両方の態度を理解するためのポイントは、引用のつづきにある。肉体なしの魂という教えを理解するどころか、われわれはさまざまな想像もしているし、「そうしたことは像〔絵〕にも描かれてきた」（MS131 p.70, 1946.8.19, RPP1 265）と、言われている。ここで考えるべきは、実際にわれわれは何を想像し、どんな絵（像）を描いてきたのかということである。二種類の像を、かれは挙げている[41]。

---

[41] 以下で検討する『心理学の哲学1』275節について、Schulte(2013)の解釈を参考にした。

「願望とは、ある対象に対する精神、こころの態勢である。」「願望とは、ある対象にかかわるこころの状態のことである。」これをよりわかりやすくするために、ひとは切望のようなものを考え、切望の対象がわれわれの目の前にあって、それをわれわれは焦がれて見つめていると考える。対象がわれわれの前にない場合には、たとえばその像〔絵〕が代わりをし、そこに像〔絵〕もなければ表象が代わりをする。願望とは、したがって、表象像に対するこころの態勢である。（MS131 p.76, 1946.8.20, RPP1 275）

冒頭に挙げられた二つの文、「願望とは、ある対象に対する精神、こころの態勢である」「願望とは、ある対象にかかわるこころの状態のことである」は、「願望」の説明と言ってよかろう。そして、ここでわれわれは、切望の対象がわれわれの目の前にあって、それを焦がれて見つめていると考える。しかし、このままでは対象が目の前にある場合しか扱えないので、対象の代わりとしての絵、さらに、その絵の代わりとしての表象像と抽象度を上げていくことで、あらゆるケースを網羅できるところまで、この説明図式を強化することができる。その結果、「願望」とは、表象像に対するこころの態度ということになり、その全体がこころのなかに収められることになった。ここで働いているのは、対象の代わりをする「像」である[42]。

しかしここで、われわれは実際に何を考えているのか、というのがウィトゲンシュタインの問題提起である。「こころの態勢」ということで、われわれは何を描き、想像しているのだろうか。

だが、本当のところつねにひとが考えているのは、ある対象に対する身体の態勢である。表象に対するこころの態勢は、すべて一枚の像〔絵〕に描くことのできるものである。すなわち、対象の像（実際に描かれた絵）に対して、要求の身ぶりをして、ひとのこころが傾いている様子を描く像によって。（MS131 pp.76-77, 1946.8.20, RPP1 275）

「こころの態勢」としてわれわれが実際に描いたのは、ある対象を欲しそうにする表情や要求のしぐさ、身を傾ける様子といった身体の態勢なのだとウィトゲンシュタインは言う。

元々われわれは、身体とは別の次元にあるはずの「こころ」について想像し、描こうとしていたはずである。にもかかわらず、身体の絵を用いるという、本末転倒な状況になっているとも言えようが、それでも、身体の絵を用いなければ、われわれは「こころ」を描くことも想像することもできないのである。

このことをより実感するためには、身体なしのこころというものが、実際どのように想像されてきたのかを、考えるのがよい。たとえば宗教画や、幽霊画でさえ、われわれはひとの身体を描

42　対象の代わりをする像（絵）という考えは、対象と表象の関係に関する一つの理解であると同時に、言葉に関する考えも暗示していると解すべきであろう。つまり、「語は対象の代わりをするという考え」（MS130 p.270, 1946.8.5, RPP1 270）である。この考えに従えば、たとえば「ねこ」という語は実在のねこの代わりをする一種の絵であり、「ねこ」という語を聞く、理解することは、「ねこ」という語が代替した対象の代わりとして、ねこの表象像をこころに思い浮かべることにほかならないということになる。これは要するに、言葉の意味を理解するとは、特定の表象像を思い浮かべることであるという、前節２項１でみた主張である。つまり、ここで、言葉にはそれに並列するものがこころのなかに生じなければならないという像も、同時に語られていると解釈することができる。

く。あるいはひとの魂といったものならば、かたちの定まらないもやで描くこともできるかもしれない。しかし、より具体的なこころの状態になればなるほど、われわれは身体の表現に頼らざるをえなくなる。幽霊の恨んでいる気もちは恨めしい顔によってしか描くことはできないであろう。また逆に言えば、人間の身体を描けば、それはこころあるものにどうしても見えてしまうということでもある。人間のようにふるまう動物や人造人間（ウィトゲンシュタインの想定で言えば「こころのない部族」）が、機械や奴隷として扱われることに、われわれはしばしば居心地のわるさを感じる。それは、人間に似た姿形とふるまいがあれば、われわれはそれをこころあるものとして見てしまうからである。つまり、こころは身体とは別の次元にあるはずだというわれわれの思いに反して、両者はつねに結びついた仕方で捉えられているのである。

こころと身体とのこうした関係を、以下の節は鮮やかに描いている。

> こころのこもった（seelenvoll）顔の表情。こうした印象をつくりだしているのが実際には色とかたちであると思うためには、こころのこもった表情をした顔というものを絵に描くことができるということを、思い起こさねばならない。一目で我を忘れ、驚き、うっとりして見つめるものが、ある人物の単なる眼——眼球、まぶた、まつげ等——にすぎないとは、とても信じられない。それでも、そうした働きをしているのは、ひとの眼以外の何ものでもない。「そこからきみは……を見てとることができる。」（MS131 p.71, 1946.8.19, RPP1 267）

こころとは、身体とは別の次元にある、何かしらより重要なもののはずである。そうだとすれば、こころのこもった表情が、単なる絵の具によって構成された色とかたちによって描けるなどとはとても信じられない。しかし、これはまったく驚くべきことではないのだ。なぜなら、こころの状態としてわれわれが考えるのは、実際にはつねに身体の態勢だからである。

こういった身体とこころとの切り離すことのできない関係を、ウィトゲンシュタインは「人間の身体は[43]、人間のこころのもっともよい像〔絵〕である」（PI2iv25, cf. MS131 p.80, 1946.8.20, RPP1 281）と、端的に表現している（以下では、「こころの像」と呼ぶ）。

しかしながらこの考えには、ふたたび反論が返される。

１項２　心理学は何を扱うのか

こころの状態が身体のふるまいによって描かれるのだとすれば、「心理学が扱うのは、（たとえば）ふるまいであって、人間の精神状態ではないということか」（MS131 p.85, 1946.8.22, RPP1 287, PI2v28）。身体よりも重要なものであるはずの「こころ」が、結局は身体的なふるまいに還元されているという疑念が、やはり払拭できないということであろう。

しかし、身体はこころの像であるということによって、ウィトゲンシュタインが考えているのは、こころは身体に還元可能であるといったことではない。かれが注意を促しているのは、こころと身体を、たとえば内側に隠されてあるものと外側にある直接見ることのできるものといった、

43　手稿では「人間」という言及にとどまっているが、『探究』第 II 部において「人間の身体」へと変更された。この文の趣旨をより明確にするための変更であろうと推測され、本稿でも『探究』第 II 部の記載を用いた。

並列関係にある二つのものとして扱う、その単純化された思考法である。

> 「かれは不機嫌だった」とわたしが報告するとき、わたしが報告しているのは、ふるまいなのか、それともこころの状態なのか。(「空がいまにも降りだしそうに見える」とわたしが報告するとき——わたしが語っているのは、現在についてなのか、それとも未来についてなのか。)両方である。ただし、並列してではなく、一方を通じて他方を〔語っているのだ〕[44]。(PI2v29, cf. MS131 pp.87-88, 1946.8.22, RPP1 288)

「かれは仏頂面をしていた」、「かれは『気分がわるい』と言った」「かれは不機嫌だった」。これらはあくまでふるまいの報告でしかないのだから、もしこころの状態について報告したいならば、これに加え、たとえば「かれは不快な気分を感じている」と言う必要があるのかと言えば、けっしてそんなことはない。むしろ、他人の態度を見るときにわれわれは、他人のこころを端的に「見てとる」(cf. MS131 p.71, 1946.8.19, RPP1 267)[45]。ふるまいに関する報告は、こころについて間接的に語っているのではなく、「かれは仏頂面をしていた」と言えば、顔に関する表現を用いて、わたしはかれのこころの状態についても語っているのである。それが、身体はこころの最良の像であるという洞察の眼目にほかならない。

身体とこころとのこうした関係性は、一方でたしかにわれわれの言語使用の現実であるが、にもかかわらず同時に、混乱した像への起点ともなる。

まず、混乱した像がどこからくるのかをもう一度確認すれば、「ひとはプリミティブな像を使い、われわれには謎に思えるものの説明をそのなかに見る」(MS131 p.68, 1946.8.19)ことによってということであった。この考察を理解するためにまず考えるべきは、「混乱した像」と「プリミティブな像」はどのような関係にあるのかということである。これには、二つの読み方が可能である。一つは、両者を同じものと考える読み方で、言葉に随伴する精神的なものが重要だというのは、プリミティブな像であり、その像のなかに、われわれは謎に関する説明を見ているということになる。もう一つは、プリミティブな像のなかに説明を見ることによって、混乱した像を使うことになるという読み方である。こちらの場合には、二つの像は異なるものになる。

本稿では後者の解釈をとり、結論を先に述べれば、「混乱した像」をたとえば精神的な過程が言葉に随伴するという像として、「プリミティブな像」をこころの像として読んでいきたい。というのは、前者の読み方では、こころの像に関する思考の位置づけが不明になるということ、そして、混乱した像を批判するだけの単純な議論として、ウィトゲンシュタインの考察を解することになるという二点に、問題があるからである。前項でみた、また以下でもみる自問自答に表れているように、かれの立場はもっとアンビヴァレントなものである。

「プリミティブな像」=こころの像という仮説の下、次項では、混乱した像がどこから来ると

44　手稿においては、「ある意味では一方を、また別の意味ではもう一方を〔語っているのだ〕」であるが、よりあいまいさの少ない『探究』第 II 部の表現を引用した。

45　他人のふるまいのなかにこころの状態を見てとることは、アスペクトの一種として、考察の対象になる(8章2節)。当然ながら、他人のこころに関するすべてのケースで、ふるまいのなかに明白にそのこころの状態を見てとることができるわけではない。容易に見てとられないケースは、8章3節にて扱うことになる。

ウィトゲンシュタインが考えていたのかを明らかにしていきたい。

２項　混乱した像はどこから来るのか

精神的な過程に関する問い甲（ある語をしかじかの意味で聞いたとき、こころのなかで何が生じるのか）の前提にある混乱した像をまず再確認すれば、精神的な過程とは「内部に生じる」「水面下で起こる」（MS130 p.158, RPP1 97）という像（本章１節）、および、「語や文には何かしら精神的なものが伴われていて、この随伴物が重要なのだ」（MS131 pp.67-68, 1946.8.19）という二つの像が、ウィトゲンシュタインの念頭にはある[46]。では、こうした像はどこから来るのか。

言葉の意味とはその使用であり、こころのなかに何が生じるかには重要性はない。こうした考えに対して、ふたたび一つの反応が返されるところから、議論は展開していく。

> 「『かれがせめて来てくれれば！』という文には、われわれの切望が込められていることがある。」そのとき、その文に込められたものとは何だったのか。あたかもわれわれの精神からある重みがそれに積みこまれたかのようだ。そうだ、そうしたことすべてをわたしは言いたい。わたしがそうしたことを言おうとするのは、はたしてどうでもいいことなのか。（MS131 pp.78-79, 1946.8.20, RPP1 277）

かれの来訪を切に願って「かれがせめて来てくれれば！」と祈るとき、その文に切望や祈りを込めている気がする。そのようなときには、たとえばテキストの例文を読むときとは異なる重みが、その文に積みこまれるように感じる。こうしたことを、われわれはたしかに言いたくなることがある。では、それはどういう意味なのかと問われれば、つぎのように説明する。すなわち、この文自体は、いわば空っぽの音として存立しており、われわれのこころのなかに生じた切望を積みこむことで、はじめてその文はまさに「かれがせめて来てくれれば」という意味をもつようになる。だから、本当にかれに来てほしいと思っていないとき、たとえば単なる発音練習としてこの文を言うときには、空っぽの音を発しているにすぎない。つまり、この文にとってもっとも重要なのは、その文を発するときにこころのなかに生じている、まさにこの切望であり、それを文に込めるという仕方で、その文とこころのなかの切望とを関係づけることなのである。

しかしこれは、「混乱した像」とウィトゲンシュタインが評した考えの一種と言えよう[47]。にもかかわらず、ここでもかれは、「そうだ、そうしたことすべてをわたしは言いたい」と同意し、「わたしがそうしたことを言おうとするのは、はたしてどうでもいいことなのか」とさえ、自問している。ここから伺えるのは、これが混乱した像であることをかれ自身が自覚しながら、それでもこうしたことを言いたくなるという衝動は、否定できないということである。しかも、ここで人称が「われわれ」から「わたし」へと変わっていることに鑑みても、この発言はかれの率直な告

46　また、「夢」に関しては、あたまのなかで映画が上映されるという像を取りあげた（６章３節）。

47　本節の冒頭で言われていたのは、「この随伴物が、いわば、言葉を現実と、このように関係づけたり、別様に関係づけたりする」という考えであった。典型的には、「ロッカー」という言葉をこころのなかで、特定のロック歌手と結びつけるといったことが念頭にあるだろう。それに対して、いまの「切望」のようなケースでは、結びつけられるべき「現実」はこころのなかに生じた過程であるため、この説明をそのまま当てはめることはできない。それでも、いまの例で言えば、「積みこむ」という仕方でこころのなかの「切望」と言葉を関係づけていると、説明を拡張することはできよう。

白であることをうかがわせる。

では、それが混乱した像であるということを自覚するウィトゲンシュタインでさえ、「われわれの精神からある重みが、その文に積みこまれたかのようだ」といったことを、言わずにいられないというのはどういうことなのか。それを明らかにするために、まず身体に関する語彙を用いた表現に注目するようかれは促している。この種の表現に関する考察を追うことで、「プリミティブな像」がなぜ混乱した像の起点になるのかが、理解できるようになる。

２項１　プリミティブな像とは何か、再考――身体に関する語彙を用いた表現

上で引用した「『かれがせめて来てくれれば！』という文には、われわれの切望が込められていることがある」という文に関する分析（MS131 pp.78-79, 1946.8.20, RPP1 277）のつづきをみていきたい。

> わたしがそうしたこと〔「かれが来てさえくれれば！」という文に、切望がこめられることがあるということ〕を言おうとするというのは、はたしてどうでもいいことなのか。重要なのではないか。希望がわたしの胸の内に生きているというのは、重要なのではないか。それは、人間の態度を表す何らかの重要な像なのではないか。あたまのなかに考えが生じるとひとが思っているのは、なぜなのか。――あるいは、より正確には、かれはそう思っているのではなく、それを体験しているのだ。というのは、考える際には、あたまのなかにこもって独りになるために、あたまに手をあて目を閉じる。あたまを後ろにもたせかけて、あたまのなかで起こることを何も邪魔してはならないというしるしに、ある手の動きをするからだ。――さて、これは重要な種類のふるまいなのではないか。(MS131 pp.79-80, 1946.8.20, RPP1 278)

「かれが来てさえくれれば！」という文に切望が込められることがあると、かれ自身ときに言いたくなる。それはどうでもいいことなのかという、先の引用と同じ問いがくり返されるが、これには答えないまま、話題は「希望がわたしの胸のうちに生きている」、さらには「あたまのなかに考えが生じる」といった身体に言及する言い回しへとスライドしている。これらが、文に切望を随伴させるという考えとどのような関係にあるのかは明かされていないが、このままウィトゲンシュタインの思考の流れに逆らわずに、「あたま」や「胸」といった身体を指す語彙を用いた表現の分析をみていきたい。

かれはつづけて、あたまのなかに考えが生じるとわれわれが思っているのはなぜなのかと問うている。しかしこの問いにも直接は答えず、「思っている」という言い回しを、より正確だと言って、「体験している」へと変えている。そして、これがより適切である理由として、考える際には、あたまに手をあてて目を閉じるといったふるまいをわれわれはするからだと言う。どういうことかと言えば、そのときわれわれは「あたまのなか」に集中するという状況のなかに実際に身を置き、それゆえその状況を体験してもいるということであろう。言ってしまえば、身体を動かすということは、その動きを体験することでもあるということであるが、これはけっしてつまらない指摘ではない。というのは、考えることと「あたまのなか」にまつわるこうした体験の結びつきは、われわれの言語実践を支えている基盤の一つだからである。

われわれは子どもの頃から、考えるときには何度もくり返し、あたまに手を当て、目を閉じて、あたまのなかに集中するという状況を体験し、また、そうした状況において「考える」と「あたまのなか」という語を結びつけて、学んできた（cf. MS131 p.171, 1946.9.1, RPP1 354）。それはわれわれに深く浸透した習慣であり、考えるときにはもはや自然と「あたまのなか」を結びつける。むしろだからこそ、いまのわれわれにとって、あたまに手を当てるふるまいの像（絵）は、「考える」というこころの像となっているのだと言えよう。こうしたふるまいは、子どもの原初的な言語実践に起源があり、またわれわれの言語ゲームの基盤になっているという意味において、「プリミティブな像」[48]、「人間の態度を表す重要な像」なのである。

しかしながら、このようなプリミティブな像を誤解することによって、われわれは混乱に導かれることになる。こうした像に対する二種類の理解を、つぎに確認していきたい。

２項２　プリミティブな像に関する二種類の理解

ポイントになるのは、以下の考察である。

> でも、つぎのような表現はどうか。「きみがそう言ったとき、わたしはそれをハートで理解した。」そう言いながら、同時に心臓を指差す。ひとはこのしぐさのことを言っている（*meinen*）わけではないってのか？！もちろん、ひとはそのしぐさのことを言っているのだ。それとも、一つの像を使っているだけなのだと、ひとは意識しているのか。もちろん意識してはいない！（MS131 pp.161-162, 1946.8.31, RPP1 345, PI2iv26）

この記載（以下、『心理学の哲学１』の節番号、345 節にて言及する）は、『探究』第 II 部に載録されることからも、重要な指摘をした箇所だと推察されるが、この節は読解が難しい。それは、前半で述べられていること、すなわち「わたしはそれをハートで理解した」によって、心臓を指差すしぐさのことを言っているということの内実が、必ずしも明瞭ではないからである。そこで、別の考察（352 節）を補助線として用いながら、この 345 節を解釈していきたい。

> つぎのように言うひともいるかもしれない。「考える際に、わたしの思考には場所がある[49]。というのは、たとえば……という思考は、頭で考えることも、ハートで考えることも、わたしにはあるから。」――そうすると、そのことが示すのは、思考には場所があるということなのか。わたしが思うのは、それは思考の体験をより詳細に記述しているのかということである。それはむしろ、新しい体験を記述しているのではないか。
>
> 「『わたしはあたまのなかで考えた』と言いたい。」（MS131 pp.169-170, 1946.9.1, cf. RPP1 352）

---

[48] 註 39 でも触れたように、「プリミティブ」という形容の対象は、『探究』第 I 部の「言語」から第 II 部の「反応」へと移っていく。この移行には、ここで論じた「こころの像」＝「プリミティブな像」という捉え方が影響したものと考えられる。

[49] タイプする際に、「場所の感じがわたしにはある」に変更された。

日本語ならば、「あたまで理解する」とも「ハート（こころ）で理解する」とも言う[50]。「あたま」ならば、論証の展開を追えたといったことだろうし、「ハート」ならば、共感して相手の言っていることが腑に落ちるといった、心情面での納得を示唆するだろう。実際われわれは、状況に応じて両者を使いわけることができる。ここまでは、われわれの言語使用の現実として確認してよいだろう。では、「ハートで理解する」といった文は何を意味しているのか。その答えとして、352節で二つの立場が示されていると解釈することができる。すなわち、括弧に入れられた対話者の発言と、それに対するウィトゲンシュタインの応答である。

まず対話者の立場は、理解とは、その特徴に応じて、「あたま」に生じることもあれば「心臓」に生じることもある、つまり理解には場所があるという主張である。こちらの立場は、身体の場所を示す語を文字通りにとって、「ハートで理解する」とは心臓のところで理解という過程が生じている、あるいは少なくともそう感じるという事実の記述と捉えるわけである。そして、胸を指差すしぐさは、理解の生じている場所を明示するためだと考える。

もう一つの立場は、ハイフン以降に読みとることができる。こちらは、思考や理解に場所があるという対話者の主張には懐疑的で、「ハートで理解する」という文は、理解というこころの状態に関する記述なのではなく、「新しい体験」を記述しているのではないかと言う。問題はこの「新しい体験」が何を意味するのかである。

しかしそれを考える前に、この二つの立場を、先に引用した345節に読みこんでみたい。345節の問題は、「わたしはそれをハートで理解した」と言うことが、心臓を指差すしぐさのことを言っているというのがどういうことなのか、判然としないことであった。なぜこれが容易に理解できないのかと言えば、二つの立場が同時にほのめかされているからである。

345節における二つの立場を、まず明確にしよう。一つは、「ひとはこのしぐさのことを言っているわけではないってのか？！」と問う人物であり、352節の対話者と同じ立場である。ここで対話者は、ウィトゲンシュタインの言いそうなことを予測して、先に反発していると解釈できる。すなわち、対話者の言いたいことを補足すれば、つぎのようになろう。きみ（ウィトゲンシュタイン）は、「『それをハートで理解した』という文は、心臓を指差すしぐさのことを言っているわけではない」と言いたいのだろう。だってきみは、「理解」の意味とはこころのなかに生じる過程ではないと考えるのだから、胸のなかに「理解」が生じていることも否定するだろう。しかし、そんなことはない。実際われわれは、「ハートで理解した」と言う。そしてこれが意味するのは、理解が心臓のあたりに生じているということにほかなるまい。そして、心臓を指差すしぐさも、理解がそこにあるということを言っている。つまり、この文もしぐさも共に、理解が心臓のところにあるという同じことを言っているのだ。これが345節の一つ目の立場である。

そしてもう一つが、「もちろん」とつづける、この対話者に対するウィトゲンシュタインの応答である。「ハートで理解した」という文が意味しているのは心臓を指差すしぐさではないと、ウィトゲンシュタインは考えていると対話者は予測しているが、それに反して、「もちろん、ひとはそのしぐさのことを言っている」と、かれは応えている。それはどういうことなのか。答えは、

---

[50] 352節は「考える」を用いているが、「ハート（こころ）で考える」という言い回しが、少なくとも日本語にはなじみのない表現であるため、345節で用いられた「理解する」という文で考察していきたい。ポイントは、あるこころの状態が身体の内側にあるように思えるということであるため、「理解する」に変えても問題はないと判断した。

つづきにあるように、ここでわれわれは像を使っているということである。この「像」を、プリミティブな像、すなわちこころの像である身体のしぐさと解釈したい。つまり、「ハートで理解する」という言葉は、たしかに心臓を指差すしぐさのことを言っている。しかしそれは、理解が心臓のところに存在しているということではなく、胸を指差すしぐさも「ハートで理解する」という言語表現もともに、共感の像であり、その限りで同じことを言っている。

この解釈は、「あたまのなかで考える」という表現が体験を記述していると述べていた 352 節とも整合する。問題は、この「体験」で何が意味されているのかであるが、思いだされるのは、ひとは「それ〔あたまのなかに考えが生じるということ〕を体験している」（MS131 pp.79-80, 1946.8.20, RPP1 278）と言われていたことである。われわれは、考えるときにあたまに手を当てるなどして実際に身体を動かす。そして、そのしぐさをするということはまた、あたまのなかに集中するという状況に自分の身を置くことで、この状況を体験することでもあると指摘した。そして、「ハートで理解する」同様、「あたまのなかで考える」という言い回しがあたまに手を当てるしぐさのことを言っているのだとすれば、この表現はまた、そのしぐさによって生じる状況の「体験」を記述していると言うことができるだろう。

しかし 345 節では、ひとは「像を使っているだけ」なのだとも言われている。あるいは、352 節において、記述されると言われているのは「新しい体験」である。ともに強調されている「だけ」「新しい」とは何を意味しているのか。ここまでの解釈では、この点を十分に理解することはできない。更なる読解のためには、「像」に込められたもう一つの含意を理解する必要がある。

２項３　「像」のもう一つの含意――言葉の身体と言葉のこころ

「像」という概念に込められたもう一つの含意を理解するには、意味感覚（δ）を経由するのが有益である。こころの像というアイディアはこのテーマにも援用されるが[51]、ここで語られるのは、人間の身体とこころではなく、言葉の身体とこころである。

意味感覚が最初に言及された記載をもう一度振り返れば（cf. MS130 pp.88-90, RPP1 6, PI2 xi294）、それは「われわれの言葉のなじみの顔、それらの言葉は恣意的な記号ではなく、いわばその意味の像[52]だという感覚、それらの言葉はその意味をいわば自分のなかに取りいれているという感覚」であった。また、「そういったことすべてと無縁な言語」においては、「言葉には『こころ』がない」 と評されていた。このアイディアが、ここでふたたび「言葉を何かしら親密なもの、こころある（seelenvoll）ものとみなす傾向」（MS131 p.140, 1946.8.29, RPP1 324）として言及される。問題は、言葉の「顔」や「こころ」が何を意味するのかである。

この思考の流れにおいて取りあげられるのは、よく知られた人物の名前と、その意味であるところの名前の担い手という例である。

> ゲーテの署名はいかにもゲーテっぽい（goetheisch）感じがわたしにはする。その限りで、それは顔のようなものである。というのも、ゲーテの顔についても、わたしは同じことが言

---

51 『ラスト・ライティングス１』では、「その言葉には、ある雰囲気がある」という意味感覚の表現が「像的な表現」と呼ばれている（cf. LW1 726）。

52 これは、言葉はその意味の写像であるかのようだという感覚であり、ここで使われている「像」とは、註 42 でみたのと同種の、何かの代わりをする「像」であろう。

えるだろうから。
それは鏡像（*Spiegel*）に似ている。（MS131 pp.150-151, 1946.8.30, RPP1 336）

「夏目漱石」という名前は[53]、いかにも漱石っぽい感じがする。たしかに、「夏目漱石」という名前には、かれの作品やその人となりを伝える逸話が、ある種の雰囲気となって、そこから醸しだされているように、わたしには感じられる。そして「夏目漱石」という名前の雰囲気は、たとえば『こころ』という作品にぴったりあうように思える。それは、かれの顔がまさに漱石っぽい感じがするのと同様なのだと、ウィトゲンシュタインは言う。たしかに、漱石の肖像にも、いかにもあれらの作品をつくりだしそうな、独特な雰囲気があるように感じられる。

こうしたとき、「まさに x っぽい」「独特の雰囲気がある」「ぴったりあう」などと、われわれはたしかに言うが、それで何を言おうとしているのか。ウィトゲンシュタインはつぎのように分析している。

かれの名前はかれの作品にぴったり（passen）なようにみえる。――どういうふうにぴったりしてみえるのか。まあ、わたしはだいたいそういうふうに表現する。――でも、それですべてか。――名前とその作品は、一つの強固な統一体（Ganze）をつくっているかのようなのだ。かれの名前を見れば、その作品がわれわれのあたまに浮かぶし、かれの作品について考えれば、その名前が浮かぶ。その名前を、われわれは畏敬の念をもって口にする。
その名前は一つのしぐさに、一つの建築様式になる。（MS131 p.155, 1946.8.30, RPP1 341）

「夏目漱石」という名前とかれの作品とが「ぴったり」に思える、それらが一つの統一体をつくっているかのようだということの内実は何かと言えば、夏目漱石という名前を聞けばその代表作が自然と思い浮かび、かれの作品のタイトルやよく知られた一文を見れば、その作者は夏目漱石だとすぐにわかるということだというのが、かれの分析である。

では、どうしてこれらは結びつくようになったのか。それはふたたび、われわれの「習慣」なのだと、かれは考えている。「夏目漱石」と『こころ』、そして漱石の肖像という組みあわせをわれわれは子どもの頃から何度も見聞きし、また自分自身その組みあわせに言及するといったことをくり返してきた。そうした経験が何度も反復されることによって、それらは次第に堅固に結びつき、いまや、別の組みあわせがまちがっていると感じるほどに馴染んで、一体化している。つまり、「われわれの習慣を通じて、このかたちが範例（Paradigma）になる、いわば法の力を授けられる」（MS131 pp.156-157, 1946.8.30, RPP1 343）ということだ。われわれはいまや、「『こころ』を書いている夏目漱石」というタイトルの絵なら容易に想像できても、「『富嶽三十六景』を描く夏目漱石」を想像しようとしても、「どうもちぐはぐで苦笑してしまうようなことしか想像できない」（cf. MS131 p.152, 1946.8.30, RPP1 338, PI2vi51）[54]。「夏目漱石」と『こころ』、かれの肖像という組みあわせは、そうした習慣を経たものにとっては、すでに一つの範例なのである。

---

[53] 引用では「署名」であるが、日本では署名の習慣がないため、ここでは「名前」として論じた。つぎの引用においては、ウィトゲンシュタインも「名前」によって同種の議論をしている。
[54] ウィトゲンシュタインが挙げている例は、「第九を書くベートーヴェン」と「第九を書くゲーテ」。

そしてこのような堅固な結びつきを身につけたひとが、「夏目漱石」という名前を、たとえばため息まじりに発するなら、それは尊敬の念を表現する「しぐさ」になっている。そして、その名前がしぐさになりえているということは、かれの名前とかれの作品との関係がすでに堅固に成立しているという意味において、「一つの建築様式」になるのである。

さらに、固有名以外の言葉についても、これと似たようなことが言えるだろう。「ねこ」という文字はいかにもねこっぽく感じるし、「やさしい」という語にはやさしげな雰囲気がある。これらの言葉には、もしその文字や音を変えれば失われてしまうような、「馴染みの顔」があるような気がする。それは、現実のねこやねこの絵を見るときに、われわれが「ねこ」という言葉を数えきれないほど使ってきたからである。この文字や音は、元は恣意的な記号であったのだとしても、「ねこ」という語の数えきれないほどの使用を通じて、両者の密接な結びつきは一つの範例となり、法の力をもつようになった。もはや違和感を覚えずには、「ねこ」以外の名前を使うことはできない。逆に言えば、こうした習慣を積み重ねていないもの、よく知らない人の名前や外国語には、意味感覚を感じることはない。

このような関係性を指して、「夏目漱石」と『こころ』、「ねこ」とねこという動物、いわば「互いに密接に結びついているもの、結びつけられたもの、それは互いにぴったり合うようにみえる（scheinen）」（MS131 p.151, 1946.8.30, RPP1 337, PI2vi50）と、われわれは表現するのである。しかし、「それはやはり、みえ（*Schein*）といったことではなく、像なのである」（MS131 p.195, 1946.9.3, RPP1 373, PI2vii54）というのが、ウィトゲンシュタインの指摘である。しかし、「像」ということで、かれは何を言おうとしているのか。

自分の部屋に置いてあるいつも使う家具の馴染みの感じを引きあいに、かれはそれを指摘している。いつも使っている机は、わたしの部屋に馴染んでいる。机の位置が少しでもずれていたら違和感があるし、別の机を部屋に置いてもしっくりこない。そうしたとき、「それは、一つの有機体のある部分なのだ」「それをとりのぞいてしまうと、以前とはまったく別のものになってしまう」（MS131 p.153, 1946.8.30, RPP1 339）といったことを言いたくなるだろうと、ウィトゲンシュタインは言う。しかしそれは、尻尾が切れたヤモリの尻尾が再生したときのように、その机を置けば、部屋が一つの有機体として十全なものに回復するということでは、もちろんない。この表現が示しているのは、話者がその机をどのように描くのかという、その描き方である。

> ここでわれわれにあるのは、切り離すことのできない周囲の状況である。では、そのように言うひとは何を言っているのか。かれはどんな種類の描き方を提案しているのか。――それは、ひとが像〔絵〕を描く際の描写方法なのではないか。――たとえば、その机の位置がずれたなら、きみはその机とその周囲の状況を併せて新しい像〔絵〕を描く。（MS131 p.154, 1946.8.30, RPP1 339）

机と部屋とは一つの有機体であるかのようにみえる。しかし、この「有機体」、あるいは「ぴったり合う」「一つの統一体」といった文言は、その文字通りのことを表現しているのではない。これらの言い回しが示しているのは、話者は机と部屋とをひとまとまりのものとして捉え、机を描くときにはその周囲の状況を背景にした像（絵）を描くということ、言い換えれば、この机と部屋

に対する話者の態度なのである。そしてそうした自分の態度を、「有機体」という、机と部屋という無機物とは別のものに託して、すなわち一種の像（イメージ、比喩）を用いて語ることによって示しているのである。

同様に、言葉の「顔」や「こころ」といった表現を使うときも、言葉というものを自分はどのように扱うのかという捉え方を、イメージを用いて表明しているのだと言える。

> どんな語も――こうひとは言いたくなる――異なる文脈においてはたしかに異なる性格でありうるけれど、それでもやはり、一つの性格――一つの顔をつねにもつ。なにしろ、それはわれわれを見つめている。――実際、どんな語も小さな一つの顔だと、文字が一つの顔かもしれないと考えることができよう。さらにまた、文全体は一種の群像画（Gruppenbild）のようなもので、それらの顔のまなざしがそれら顔同士のあいだに一つの関係を生みだして、それゆえに全体が有意味な群像になっていると考えることもできるかもしれない。（MS131 pp.138-139, 1946.8.29, RPP1 322, cf. PI2vi38）

どんな語にも顔があり、さらに文はそれらの顔同士の関係において成り立つと、言うことはできる。このように言うことで何がしたいのかと言えば、言葉と意味とは絵（像）とそれが写しとる対象という関係にあるということ、そして、文はそのように写しとられる対象同士の関係として描くという、言葉の捉え方を肖像画と群像画という像（イメージ、比喩）に託して語っているのである。

ただしこれは、一種のカリカチュアであろう。「われわれの言葉の馴染みの顔」「言葉のこころ」などと、われわれが通常言うときに念頭にあるのは、文を群像画として描くことでは、おそらくないであろう。むしろ、物理的な存在でしかないはずの線や音に、意味や話者の思いがその内側に満ちて、言葉がまるでこころのこもった表情のようにみえると、われわれは言いたくなるといったことではなかろうか。つまり、言葉には、物理的な側面に還元されえないより大事なもの、たとえば意味や話者の心理状態が伴われているはずで、それが言葉にこころを、生命を与えるという像を描こうとしているということだ。そしてこうした物理的なものとそれに還元されないより重要なものという関係を描くのに、身体とこころの関係という比喻を用いるのである。

以上で、本項冒頭の問いに答える準備は整った。では、混乱した像はどこから来るのか。

２項４　まとめ――混乱した像はどこから来るのか

混乱した像がどこから来るのか。この問いに答えるためには、先延ばししていた二つの考察について、読解を完成させる必要がある。

まず、問題の考察を再確認しよう。一つは、「わたしはそれをハートで理解した」と言いながら同時に心臓を指差すという場面で、「一つの像を使っているだけなのだと、ひとは意識しているのか。もちろん意識してはいない！」（345 節）という考察であった。そして、ここでわれわれが使っている「像」を、本稿では、プリミティブな像、すなわち共感の像として使われるしぐさのことだと解釈した。問題は、その像を使っている「だけ」とはどういうことなのかであった。

もう一つは、「わたしはあたまのなかで考えた」という表現は、「新しい体験を記述しているの

ではないか」（352 節）という指摘であった。この表現は、あたまに手を当てるといったしぐさによって自分が身を置くことになる状況、あたまのなかに集中するという状況の体験を記述しているということだと解釈した。そこで残されたのは、それが「新しい体験」であるということ、この新しさが何に由来するのかということである。

この二つの問題はともに、ウィトゲンシュタインの使う「像」という概念に、イメージや比喩という含意があるということを理解すれば、解答することができる。ポイントは、比喩とはどのような用法なのかを考えることである。そのためには、352 節のつづきが参考になる。この節の最後には、「『わたしはあたまのなかで考えた』と言いたい」という発言が、添えられていた。352 節だけでは、その意味するところは判然としないが、タイプ原稿には載録されなかった、手稿のつづきをみると、ウィトゲンシュタインの言いたいことがみえてくる。

> 「……〔『わたしはあたまのなかで考えた』〕とわたしは言いたい」の文法。「わたしは言いたい」がここで意味しているのは、わたしはその表現を自発的に使うということ、〔そして〕自分がすでに学んだテクニックではない意味でそれを使おうとしているということである。（MS131 p.170, 1946.9.1）

「わたしは言いたい」の特徴として、二つのことが指摘されている。まず、「あたまのなかで考える」「ハートで理解する」と言うことは、われわれの「自発的な」表現、自然な発露だということである。考えるときにわれわれがあたまに手を当てるのは、思考は脳の活動であるから頭に刺激を与えるのがよいといった推論によるのではない。子どもの頃からの習慣によって自然と出てしまう、いわば勝手にからだが動く反応に類した行為である。「あたまのなかで考える」という言語表現も、このしぐさに類する自然な発露なのだということである。これは、「ハートで理解する」という言葉が、胸を指差すしぐさのことを言っているというのと同じ指摘である。

いまの二つの問題にとって、重要なのは後者の指摘である。すなわち、「あたまのなかで考える」という言い回しを使うとき、われわれは「自分がすでに学んだテクニックではない意味でそれを使おうとしている」ということである。

まず、われわれがこれまで学んできた用法とは何かと言えば、「あたま」あるいは「ハート」の文字通りの使い方だと考えてよかろう。すなわち、「ハート」という語は身体の一部である「心臓」を指し、たとえば医者の言う「心臓に異常がある」という文は、病変のある身体の場所について述べている。それに対して、「ハートで理解する」というのは、「心臓」という身体の絵に託して、共感というこころの状態を描いている。前項でも確認したように、身体がこころの像であるからと言って、こころが身体に還元されるわけではない。あくまで、両者は別の存在である。それでも、こころについて語るためには、身体に託して語らざるをえない。「言葉のこころ」という言い回しが、身体とこころというイメージに訴えることによって、意味感覚を比喩的に表現していたのと同様に、「ハートで理解する」という表現は、「ハート」という身体の絵に託して共感を語っている。それが、われわれにとっての「こころ」の描写方法なのである。その意味においても、身体はこころについて語るために使われる像（比喩、イメージ）なのである。それゆえ、ここで「ハートで理解する」における「ハート」という言葉は、その文字通りの意味で使われて

いるのではなく、比喩的な用法なのである。

「ハートで理解する」という表現の記述する体験が「新しい」のは、このことに由来する。「あたまがズキズキと痛い」という言葉で頭痛を記述するとき、この「あたま」という語は身体の部分を指しており、その痛みが帰属される場所がこの文では述べられている。これが、われわれの学んできた用法である。それに対して、同じ「あたまが痛い」という言葉でも悩みを表現するために用いられているのなら、それは頭痛とは異なる新たな体験を記述している。というのは、この言葉が記述しているのは、痛みがあたまのなかに存在しているということではなく、たとえばあたまを抱えて絶望的な問題を考えているというその状況の体験であろう。この表現は、身体の絵に託してこころの状態を描くという意味で、比喩的、像的な使われ方をしている。

しかし、345 節のつづきにあったように、われわれはここで自分が像を使っている「だけ」であって、「ハート」はその文字通り「心臓」を意味しているわけではないということを意識してはいない。問題はここにある。そうして、「ハートで理解する」という比喩的な言い回しを、これまで通りの仕方で、つまり「ハート」は心臓という身体の場所を指し、理解の在り処について述べているのだと、対話者のように、理解してしまう。それによって、「理解」とは胸の内に生じる過程なであって、それが「ハート」に生じるのか「あたま」に生じるのかによって、性質にちがいがあるなどと考えるようになる。ここで、われわれは、プリミティブな像（共感の自然な表現）を、謎（「理解」とは何か）の解明と取りちがえているということである。これが、混乱した像がどこから来るのか、という問題への解答である[55]。

345 節を『探究』第 II 部に載録する際、ウィトゲンシュタインは、「ハートで理解する」という表現を「像的な（bildlich, 比喩的な）表現」（PI2iv26）と呼ぶ。手稿には、この種の表現に名称が与えられておらず、また、「像的な表現」の外延も明確ではないが、本項でみてきたような身体の語彙を用いてこころについて語る文を典型として、これに類する表現に、「像的な表現」という名称を当てたい。その基準は、あるもの（たとえば、こころの状態）がそれとは別のもの（身体のふるまい）に託して、語られていることとする。

以上、混乱した像がどこから来るのかという問題を考察した。では、ここからわれわれはどのようにして、新しい思考法に辿り着けばよいのか。

3 項　新しい思考法とは何か

まず、「新しい思考法」に関する考察を、もう一度引いておこう。

> 新しい思考法が確立されれば、それまでの問題は消えてなくなる。それまでの問題をもう一度把握するのが難しくなるからだ。というのも、問題は表現方法のなかにあるのであって、新しい表現が着せられれば、かつての問題は古い服と一緒に脇へ置かれることになるから。（MS131 pp.48-49, 1946.8.15, CV p.55）

新しい表現を用いれば、それまでの問題は消える。なぜかと言えば、とりわけ像的な表現においては、問題の対象をどのように表現するのかということは、また同時に、それをどのような絵に

55　比喩と哲学的な混乱の関係について、鬼界(2018)、とくに 4 章 2 に学んだ。

描くのかということでもあるからである。それは、イメージ（像）を用いることの必然的な帰結である。共感を「ハートで理解する」と表現すれば、どうしても理解は心臓という身体の絵（像）と結びつけられる。つまり、ある表現の仕方をとれば、その表現が依っている描写方法にも巻きこまれざるをえないということである。２項の最初に挙げた例で、具体的に考えていきたい。

> 「『かれがせめて来てくれれば！』という文には、われわれの切望が込められていることがある。」そのとき、その文に込められたものとは何だったのか。あたかも、われわれの精神からある重みがそれに積みこまれたかのようだ。そうだ、そうしたことすべてをわたしは言いたい。（MS131 pp.78-79, 1946.8.20, RPP1 277）

まず最後の文に注目すると、「そうしたことすべてをわたしは言いたい」と述べられており、「……とわたしは言いたい」の文法が、ここにも適用できるだろう。すなわち、「わたしはその表現を自発的に使うということ、自分がすでに学んだテクニックではない意味でそれを使おうとしている」（MS131 p.170, 1946.9.1）という、二つの特徴である。

まず、「……という文には、われわれの切望が込められていることがある」「あたかも、われわれの精神からある重みが積みこまれたかのよう」という文は、だれが何のために言ったのか。よくその状況を顧みれば、言葉の意味とはその使用であって、そのとき話者のこころに生じたことに重要性はないという考えに対して、対話者が発した言葉であった。つまり、これは懐疑や反発の表明である。加えて、これらの表現もまた、比喩的な用法だと言える。というのは、文を構成する音とこの文で表現される切望との関係を、空の容器とその中身という像（イメージ）によって描いているからだ。しかしここまでは、われわれの言語実践の確認である。それでも、この表現の扱いをしくじると、われわれは混乱した像に足をとられるようになる。

最初のつまずきは、これらの文は像的な用法として新しい使われ方をしているにもかかわらず、われわれは自分が像を使っているにすぎないということには、無自覚であることだ。それゆえ、この「込められる」「積みこまれる」といった言い回しを、文字通りに理解する。すると、「かれがせめて来てくれれば！」という空っぽの文に、胸のうちに生じた切望を積みこむことではじめて、この文は話者の意図する「かれがせめて来てくれれば」という意味をもつようになるという像を描くことになる。この絵は、たしかに「……という文には、われわれの切望が込められていることがある」という像的な表現の提示している描写方法にしたがって描かれている。しかしながら、そもそもこの文はその文字通りの仕方では使われてはいない。この文は実のところ懐疑や反発の表明であり、空っぽの文とその内容というのは、実際の使われ方には対応していない、混乱した像なのである。

しかしわれわれは、この文の提示する描写方法をそのまま真に受けてしまう。すると、引用にもある通り、「その〔『かれがせめて来てくれれば』という〕文に込められたものとは何だったのか」と、問うことになる。そして、このように問われれば、空っぽの文を構成している物理的な音や線には還元されえない、別の領域に存立する何がしかにちがいないと思う。なぜなら、その文を練習で読むときも、かれの来訪を願って言うときも、その音自体は同じであるからだ。すると答えは自ずと、切望だということになる。あるいはこの答えを否定するために、文はどんな場

合にも空っぽなもので、そもそも何がしかを積みこむなどというのは妄言にすぎないと答えることも可能である。しかしながら、この種の答えも、空っぽの文とその内容という混乱した像に依っていることに変わりない。

そして、切望が文に積みこまれるという答えを選択すれば、つぎには、その切望とは何なのかといった問いが立てられるだろう。こう問われれば、われわれは「胸のうち」を内観したくなる。なぜなら、切望はたとえば胸に手を当てるしぐさや、「胸のうちに希望が生まれている」という身体に言及する文によって描かれる。これらは、切望の自然な発露なのだが、ふたたび、これらの表現をその文字通りにとって、切望とは胸のうちに生じる精神的な過程だという像を描くからである。しかし、これもやはり混乱した像にほかならない。そして、この問いへの解答は、胸のうちを内観したらしかじかのものが生じていたと答えるか、あるいはまた、内観しても何も生じてはいないと答えるか、ということになるだろう。しかしいずれの答えも、切望という精神的な過程が胸の内側に生じるという混乱した像のバリエーションにすぎない。「そうなると、不適切な類比の一つひとつが、さらなる不適切な類比によって説明されることになる。その結果、最終的には疲れ果ててしまうために、このごたごたを放置するよりほかになくなってしまう」(MS131 p.91, 1946.8.23, RPP1 292）ということである。こうした状況は、「絶望的」と言うほかない。

つまり、表現法とものごとの描写方法は、密接に結びついて、一旦ある表現をとれば、その像から抜けだすことは容易ではないのである。だからこそ、われわれは問いの立て方から変更しなければならないのである。では、どのような問いを立てればよいのか。

それは要するに、本節で追ってきた思考法である。すなわち、哲学的な混乱が生じている場面で、自分がどのような表現をしているのかを思いだし、列挙すること、そして、その表現がどのように使われているのかを分析すること。すなわち、表現に関する問い乙を考察することである。問題が表現法と結びついているとすれば、それを解消するには表現法を分析する必要があるのは言うまでもない。そうした考察を通じて、混乱が生じる場面では、往々にして自分が像的な表現を使っているのだということが理解できれば、そこで使われている文を文字通りの意味で理解することもなくなり、混乱した像を描くこともなくなるということである。

４節　まとめ――MII の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部との関係

以上、MII（MS130 後半～MS131 終盤、1946 年夏）の考察を追った。ここでウィトゲンシュタインが取りくんだ哲学的課題は、混乱した思考法からの脱却とそれに代わる新たな思考法の確立である。

ここまで、さまざまな表現をみてきたが、総括として、意味の萌芽体験を例にまとめたい。１節においてわれわれは、考察の対象として念頭に置かれている文の典型として、「意味の萌芽を体験する」という文を挙げ、その特徴を、心的な過程について述べる文ではあるが、よく反省してみれば、その文字通りのことが言われているのかについて疑問が浮かぶような文だと、説明しておいた。本節の分析を踏まえれば、これはこころにまつわる像的な表現の特徴だったと言える。そうだとすれば、この事例（cf. MS130 pp.151-152, RPP1 94）において、混乱した像から新たな思考法への展開を再構成できるはずである。

ウィトゲンシュタインがまず挙げていたのは、「『Bank』と聞いたとき、わたしには銀行の意味が思い浮かんだ」という文であった。この文は、過去の時点に言及しているという点においては、「意味」の体験を表明しているかのように思えるが、やはり「意味」の体験内容を思いだすことはできない。その点においては、体験ではないようにも思われる。それゆえ、やはり「それは体験なのか」という問いが立てられていた。そして、このつぎに挙げられたのが、「この使用法に〔後々〕なっていく、その萌芽をわたしは体験した」という文であった。というのも、「萌芽」に備わった、過去の時点では予測できなかったとしても、後になってみれば、特定の樹に育つという特徴が、いまの困難を説明するのに有効であるようにみえるからである。すなわち、言葉を聞いた時点では予測できなかったとしても、後から思いだせば、特定の意味に育つ体験というものを措定することができれば、うまい説明ができるからである。そして、こう説明してしまえば、そのとき自分のなかに何が生じたのかという、精神的な過程に関する問い甲を立てるのも自然な流れであろう。しかしそれによって、われわれは絶望的な状況に追いこまれることになる。

では、どのような問いを立てればよいのかと言えば、そのヒントはすでに書かれてあった。すなわち、それらの表現が「われわれにとって自然な表現方法である」可能性を考えてみることである。では、「あのときしかじかの意味が思い浮かんだ」「使用法の萌芽を体験した」という表現がどう使うわれるのかと言えば、言葉を聞いた時点でその意味を理解していたとか、何らかの表象像が思い浮かんだといったことであろう。つまり、「萌芽」というのはあくまでも像（比喩、イメージ）であって、文字通りの使われ方とは異なる新しい用法なのである。しかしそのことを自覚していなければ、この表現を文字通りにとって、「体験される意味」を追い求めることになるということだ。

以上の思考をまとめるとすれば、哲学的な混乱を象徴する、精神的な過程に関する問い甲から、新しい思考法である、表現に関する問い乙への転換と言うことができるだろう。

MII は、4 章でも確認したように、準備稿における一つ目のピークに当たる。それは、『探究』第 II 部にも反映されており、ii～vii 章の約半数[56]がこの時期の考察から載録されている。これら計六章において示された論述の流れを述べるとすれば、以下のようになるだろう。まず検討されるのは、多義語の意味（β2）とは体験であるという考え、要するに、「あのときその語をしかじかの意味で意味した」などと言うときにこころのなかに何が生じるのかという問い甲に対する解答 b、とりわけ意味とは表象像であるという考えである（ii 章）。しかし、表象像によっては志向性が説明できないことが指摘される（iii 章）。この二章が、MII-2 の成果を用い、精神的な過程に関する問い甲の引きおこす混乱を示すために使われている。しかしながら、この問いが絶望的な状況にわれわれを立たせることになるという点には触れられておらず、何も生じないという解答 a も登場しない。準備稿の詳細な検討は、部分的にしか再現されていない。

そしてここから、第 II 部でも、新しい思考法の確立へと向かっている。それは、MII-3 において展開された思考である。まず確認されるのは、人間の身体がこころの像であるということ、そして身体に言及する語彙によってこころの状態を述べる言い回し、たとえば「ハートで理解する」が、像的な表現であるということである（iv 章）。こうした身体とこころの関係を踏まえ、つづけて、心理学は何を扱うのかという問題が考察される（v 章）。そして、身体とこころの関係を言葉

56　計 49 節中 26 節。

とその意味の関係に援用した、意味感覚（δ）の議論ががつづく（vi 章）。準備稿においては、意味感覚の典型が「言葉のこころ」「言葉の顔」という表現であることを踏まえての展開であったが、『探究』第 II 部の vi 章にはこの事例が挙げられておらず、v 章からのつながりはみえづらくなっている。他方で、第 II 部では、意味が体験ではありえないこと（問い甲への解答 b の否定）をくり返し、そのような問題に代えて、意味感覚の表現がどのように使われているのか（問い乙）を検討するという流れが、よりみてとりやすいかたちに編集されている。そして、問い甲の前提に像（κ）があるという指摘が、問い甲の問題点をあぶりだしている（vii 章）。この章は、一見すると、像と夢という異なる二つの主題が混在しているように思われるが、準備稿を踏まえれば、問い甲と像との関係が夢（λ）という事例を通じて示されていることがわかる。以上の ii~vii 章までが、MII を下敷きに作成された章となる。

表 6-1 MII における主題と『探究』第 II 部の対応関係

章	主題	本章の対応節	章	主題	本章の対応節
ii	多義語の理解（β2）	２節	v	心理学（θ）	３節１項２
iii	表象像と志向性	２節２項１	vi	意味感覚（δ）	３節２項３
iv	こころの像と像的表現（κ）	３節	vii	夢（λ）、像（κ）	２節３項、３節

7章　MIII（MSS131 終盤～135 前半）の分析

精神的な過程に関する問い甲から表現に関する問い乙への転換にまつわる一連の考察が一段落したのが、1946 年 9 月の前半（MS131 p.207, 1946.9.7）である。一つの課題に解決が与えられたことを考慮し、ここにムーヴメントの区切りを置いた。心理学の哲学テキスト群の思考全体に照らせば、MIII は、4 章でも述べたように、MII の補足と MIV の予備的考察によって構成されていると解釈することができる。

MII の考察がまとまって以降、かれの思考は徐々にスローダウンしていく。そして、9 月末にケンブリッジに戻り[57]、10 月から翌 47 年 5 月まで心理学の哲学に関する講義を開講している[58]。多忙な大学生活であったのであろう[59]、この頃のウィトゲンシュタインは、自分の考察にのみ集中的に取りくむということが困難な状況にあったと推察される。それでも、10 月の中頃までは、『探究』第 II 部へとつながる考察をつづけているが、19 日（MS132 p.192）からは、手稿ノートを講義内容のメモとして使うようになる[60]。そしてこの学期が終わるとすぐに、ウィトゲンシュタインはふたたびスウォンジーへと向かったようである。ノートを心機一転した 1947 年 7 月 12 日（MS135 p.1r）からふたたび旺盛な執筆がもどり、アスペクトを見るというスレッド（ε）が浮上してくる。そして 8 月以降には、ウィーンなど次つぎと滞在先を変え[61]、手稿の日付も 8 月 3 日で一度とまっている（MS135 p.139）。その後帰国したウィトゲンシュタインは、ケンブリッジに辞表を提出し、この 1947 年の秋でかれの大学教員としての生活は終わることになった[62]。そして、このケンブリッジ滞在中に、MS130 中盤から MS135 前半までの考察を選別し、タイプ原稿 TS229（RPP1）が作成される[63]。以上の 1946 年 9 月 12 日から、タイプ原稿を作成し終える 47 年の秋までの一年ほどを、本稿ではムーヴメント III として扱う。

講義メモとしてノートが使われた時期があいだに挟まれることに鑑み、この期間をさらに三つに分けたい。内容的には、講義メモ（MIII-2）の前後に、これまでの考察の補足（MIII-1）と、以降の展開を射程に収めた予備的考察（MIII-3）が存在するにとどまっている。

MIII-1（MS131 p.207-MS132 p.192, 1946.9.7~10.18）：MII の付論
MIII-2（MS132 p.192-MS134 p.184, 1946.10.19~1947 夏）：講義ノート
MIII-3（MS135 pp.1r-146, 1947.7.12~11.9）：MIV の予備的研究

57　夏の休暇が終わり、9月30日にかれはケンブリッジへ戻っている。「今日、ケンブリッジに到着した。至る所に嫌悪を覚える。人々には優美さがなく、わざとらしいし、傲慢だ。大学の雰囲気には、吐き気がする」（MS132 p.85, 1946.9.30）という日記が残されている。

58　この講義については、三名の学生が記録した講義録、『講義 1946-47』が出版されている。

59　週に二回の講義に加え、数名の学生に対する個人指導や、定期的な会合があり、さらに、モラル・サイエンス・クラブでは議長を務めていた。以下、伝記的な事実については、Monk(1990) pp.487-519 に拠っている。

60　『講義録 1946-47』のうち Shah の記録には、1946 年 10 月から翌 47 年 5 月までの日付が記入されている。かれの記録と他二名の記録、そして手稿をつきあわせると、10 月 19 日から、講義内容と手稿とに内容の一致がみられるようになる。なお、講義録と手稿との関係は菅崎(2017a)にまとめた。

61　まずダブリン（アイルランド）へ、かつての学生であったドゥルーリーを訪ねた。そして、8 月の末にはケンブリッジにいったん戻った後、ウィーンへ帰郷している。

62　つぎのミケルマス学期（10 月～12 月）まではサバティカルとして在籍はしている。

63　47 年 11 月 9 日、「ここまでタイプした」（MS134 p.184）と書きこまれている。

大学生活の影響は大きかったものとみえ、ムーヴメント III においてまとまった考察はみられなくなる。このような考察の質を考慮し、本章では、準備稿および『探究』第 II 部における位置づけや影響に注目し、各主題の要点を述べることとする。

１節　MIII-1：MII の付論

9 月中旬からひと月ほどのあいだ（MIII-1, MS131 p.207-MS132 p.192, 1946.9.7~10.18）に確認されるのは、主に、運動感覚（ι）、内観（ζ）、信じる（η）、アスペクトを見ること（ε）という四つのスレッドとなる。これらは『探究』第 II 部に照らせば、 viii～xi 章に当たり、ii～vii 章に組み込まれる考察をほぼ順番通りに進めてきたムーヴメント II のつづきと捉えることはできる。しかしながら、これらは新たな思考の展開というよりも、これまでの論点を別の主題にも援用するといった内容で、ムーヴメント II の付論と捉えるのが適切であろうと思う。また、その質においても MII とは異なると言わざるをえない[64]。

では、どのような論点に関する付論なのか。それは、身体とこころ、また、外的な事実と心的な過程との関係だと考えられる。

> この〔ふるまいとこころについて語る〕場合、事情は物理的対象と感覚印象について語る場合とまったく同様である。ここでわれわれには二つの言語ゲームがあり、互いの関係は複雑なのである。この関係を単純な仕方で記述しようとすれば、ひとは誤りを犯すだろう。（MS131 p.88, 1946.8.22, RPP1 289, PI2v34）

物理的対象と感覚印象、身体的なふるまいとこころの状態、それらの言語ゲームの関係は複雑だと言う。そして MIII-1 では、それら「二つの言語ゲーム」が、具体的に考察されていると解釈することができる。すなわち、身体の運動と運動感覚という二つのゲームの関係[65]、あるいは事実と信念の、そして色やかたちとその視覚像という二つのゲームの関係である。そして、これらの主題を扱うときに、ウィトゲンシュタインが抗するのは、両者の関係を単純化された図式によって説明しようとすることである。アスペクトを見るという主題に注目して、かれの思考を確認したうえで、それ以外の主題（運動感覚、「信じる」、内観）も含めた MIII-1 がどのような議論を展開しているのかを確認する。

---

[64]　言及されるテーマ自体は『探究』第 II 部にみられるものであるが、ここでの記載から載録されたのはごく少数の節にとどまる。ii～vii 章のおよそ半分程度の節がすでに書かれていたムーヴメント II とは、考察の完成度においてちがいがあると言わざるをえない。viii、ix 章については MIII からの載録はない。x 章は計 25 節であるが、そのうち 6 節が、xi 章は計 254 節のうち 12 節が MIII からの載録である。

[65]　運動感覚については、他にも、たとえば喜びというこころの状態は喜んだ顔の表情、その身体的な感覚を、構成要素としてもつのかどうか（cf. MS132 pp.78-84, 1946.9.29, RPP1 449-456）という論点もある。しかし、『探究』第 II 部には載録されない議論であることを踏まえ、本稿では扱わなかった。

1項　アスペクトを見ること

アスペクトを見ることを、「色やかたちは同じままなのに、視覚像が、すなわちその体制（Organisation）が実際に変化するような、視覚現象」（MS132 p.180, 1946.10.13, RPP1 534）と表現できると、ウィトゲンシュタインは言う。そうすると、変化する「視覚像、体制」とはどのようなものなのか。そして、「色やかたち」と「視覚像、体制」とはどのような関係にあるのかと、問いたくなる。

この問題を考えるためにウィトゲンシュタインがまず試みるのは、「として見る」を体験概念として確立することである。

> 「いまわたしはそれをこれとして見ている、いまはそれとして見ている」とひとが言う場合を、「あるものをあるものとして見る」の典型的な〔言語〕ゲームと、わたしはみなす。それゆえ、異なったアスペクトを認識する場合、しかも見られたもののどんな使用からも独立に認識する場合である。
> それゆえ、わたしはこう言いたい。絵が使われるということを、その絵がそのように、あるいはこのように見られたということに対するサインとしては、わたしは見ない。（MS132 pp.12-13, 1946.9.12, RPP1 411）

「あるものをあるものとして見る」の典型的な言語ゲームとみなすと言われているのが、「いまわたしはそれをこれとして見ている、いまはそれとして見ている」という言い回しである。単なる冗語にもみえるが、この言い換えのポイントは、「いま……見ている」というように時点への言及が明示されていることである[66]。この言い換えによってかれが何を意図しているのかと言えば、この「として見る」を体験概念として扱うということである。そして「それゆえ」、アスペクトは絵の使用とは独立に認識されるのである。先にも確認したように、痛みの有無は、その痛みについて述べるかどうかとは関係がない。したがって、もし「として見る」が体験概念なのだとすれば、ウサギ-アヒルの反転図形をウサギとして使ってはいないとしても、いまそれをウサギとして見ていないことになるわけではない。アスペクトを見ることとは、言明されることによって、あるいは絵が特定の仕方で使用されることによってはじめて、遡行的にあったことにされるようなものではないということである。

しかし、われわれはここで、多義語の意味と同型の問題に行きあたる。というのは、先にも確認したように、このアスペクト体験の内容を、われわれは提示することができない（５章２節５項）からだ。「その図形――それをわたしは同一のままのものとして見ている――の新しいアスペクトが、つぎつぎにわたしには思い浮かぶ。それはあたかも、その図形につぎつぎに新しい服が着せられるのだが、それにもかかわらずどの服も別の服と同じであるかのようなのだ」（MS130 pp.115-116, RPP1 33）と、ウィトゲンシュタインはその構造をまとめていた。つまり、変化した

66　これまで体験概念の特徴としてみてきたのは、過去形を用いた表現であった。ここで同様の論点を「……として見る」という現在形の言い回しに応用したと考えることができる。また、現在形で言われているのと同じことは、過去形に変えても言うことができる。すなわち、当時「いまわたしは……として見ている」といった表明をしなかったとしても、アスペクトについては、「あのとき……として見たことを、わたしは覚えている」と言うことができる。

視覚像、体制を示そうとしても、結局、変化の前と同じ色やかたちを示さざるをえない。これでは変化を示すことはできないが、それでも、別の視覚像を提示できるわけでもないのである。ここで、色やかたちと、それらから切り離しうる視覚像や体制という二つのものをもちだして説明しても、われわれの実践を扱うことはできないということである。

同様に、一方には諸々の運動感覚が列挙してあり、その隣には各運動感覚と対応する運動が列挙してあるといったような一覧表によって、運動感覚を説明するならば[67]、あるいは、「信じる、思う」とは、何らかの精神的な過程を事実に随伴させることだと考えるとすれば[68]、それは過度な単純化であろう。

そして、こうした単純化が可能だと思うのは、感覚や印象を内観によって同定できる、要するに「わたしが知覚しているのはこれだ――」（MS132 p.68, 1946.9.26, cf. RPP1 444）と言えば、「私的な直示的定義」（MS131 p.217, 1946.9.8, RPP1 393）が可能だと前提しているからにほかならない。そして当然ながら、ウィトゲンシュタインはこの種の考えには、けっして与しない[69]。

２項　まとめ――MIII-1 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響

以上の議論を、本稿の枠組みに照らせば、つぎのように捉えなおすことができよう。すなわち、そのとき（運動するとき、アスペクトを見るとき、「わたしは……と思う」と言うとき）こころのなかに、まさにこれが生じるという考え（精神的な過程に関する問い甲への解答 b）の問題点が、ふたたび指摘されたということである。そして、この問題を乗り越えるためにわれわれが思いだすべきなのは、やはり、ここで誤解を招くような表現をわれわれは使っているということなのである。

67　この種の表が成立するためには「感覚と運動とを相互に割りあてておかねばならなかったはずだ。〔中略〕あるいはまた、遂行された運動の同一性の基準の他にさらに、感覚の同一性の基準がなければならない」（MS131 pp.214-215, 1946.9.8, RPP1 391）。しかしながら、それは不可能である。なぜなら、「その動きの感じを正しく再現するということが、この場合に意味するのは、その動きを外見上正しく模倣したということである」（MS131 p.210, 1946.9.7, RPP1 385）からだ。つまり、運動感覚の同一性の基準とは、運動の同一性にほかならない。

68　ウィトゲンシュタインは、ムーアのパラドクスを題材に、一人称現在直説法と、三人称、過去形、仮定法のあいだに非対称性があることを指摘することを通じて、このような考えの問題点を示している。まず、一人称現在直説法の「雨が降っているとわたしは思う（glauben）」が意味しているのは、「雨が降っている」と何かしら同じようなことである（cf. MS131 p.101, 1946.10.3, RPP1 473, PI2x89）。つまり、この文は、「思う」という文言が使われてはいても、実のところは、事実について述べているということだ。それに対して、三人称の「雨がふっているとかれは思っている」という文は「雨が降っている」という意味にはならないし、「雨が降っていると、もしわたしが思っているとしたら」という仮定は「雨が降っているとしたら」に変えることはできない。また、「雨が降っていると、そのときわたしは思った」は「そのとき雨が降った」と同じような意味にはならない。つまり、三人称、仮定、過去形の「思う」は、どれもその文の主語になる人物の信念について語っている。

もし、「信じる」とは、「精神の内に同じ思考を生じさせる」あるいは「同じ感じを生じさせる」（MS131 p.101, 1946.10.3, RPP1 473）ことなのだとすれば、「でもやっぱり、『わたしは思った』は、『わたしは思う』が現在において言っているまさにそのことを、過去において言っているはずだ！」（MS131 p.102, 1946.10.13, RPP1 476, PI2 x89）ということになる。しかし、われわれの言語実践に照らせば、それは事実ではないということである。

69　これは、『探究』第 I 部における私的言語に関する議論においてすでに片づいた問題とも言えるが、かれはこの問題をここでも素通りはしていない。

「わたしが語っているのは、色やかたちは同じままなのに、視覚像が、すなわちその体制が実際に変化するような、視覚現象のことである」と言うひとがいたとすれば、――わたしはこう答えることができる。「きみが言っていることはわかる。きみが言った、そのことをわたしも言いたい。」――そうすると、わたしが言っているのは、「そうだ、われわれ二人ともが語っているその現象は、本当に、体制の変化なのだ」ということではない。そうではなく、「そうだ、体制の変化といったことについて語るというのは、体験の表出なのであって、それをわたしも意味しているのだ」と、わたしは言っているのである。（MS132 p.180, 1946.10.13, RPP1 534）

「色やかたちは同じままなのに、視覚像が、その体制が変化する」という表現を文字通りにとれば、色やかたちとは独立に視覚像、体制は存立しており、後者だけが変化するということになるだろう。この表現をそのように理解すれば、「視覚像、体制」とは何か、要するに、アスペクトを見るとき、わたしのなかで何が生じるのかという問いを立てたくなる。

しかし、ここでわれわれはやはり思いちがいをしている。「色やかたち……」というのは、実際に起こっていることの記述なのではなく、体験の表出なのだというのがウィトゲンシュタインの指摘である。換言すれば、われわれがここで問うべきは、この表現はどのように使われているのか（表現に関する問い乙）であったと言えよう。そのように問えば、体験の表出という答えが得られるのである。

MIII-1 においてウィトゲンシュタインが扱っている哲学的な問題とは身体や対象、事実とこころとのあいだの関係を単純化し、精神的な過程に関する問い甲を立ててしまうという状況からどう脱却すればよいのかということであり、それに対する解答は、表現に関する問い乙を立てる必要があるということである。つまり MIII-1 において成されたのは、、MII の成果を意味体験のみならず、運動感覚（π）、信じる（η）、アスペクトを見ること（ε）という別の主題へ援用すること、そして精神的な過程に関する問い甲の前提にある内観（ζ）という考えを検討することであったとまとめることができる。

これを『探究』第 II 部の構成に照らせば、ii~vii 章の成果の援用と補足が、viii~xi 章につづいたと言うことができよう。ただしアスペクトを扱う xi-1 章は、MII の援用にはとどまらない。その本格的な考察は、ムーヴメント IV にて展開される。

表 7-1 MIII-1 の主題と『探究』第 II 部との対応関

章	ii~vii 章との関係	主題
viii x xi-1	援用	運動感覚（π） 信じる（η） アスペクトを見ること（ε）
ix	補足	内観（ζ）

２節　MIII-2：講義ノート

先にも述べたように 1946 年 10 月の中旬から、手稿ノートは講義メモとして使われるようになる（MIII-2, MS132 p.192-MS134 p.184, 1946.10.19~1947 夏）。それに伴って、すでに結論の

出ている考察、たとえば、精神的な過程に関する問い甲から表現に関する問い乙への転換[70]や、内観と私的直示に関する議論[71]をくり返すような内容が、手稿にも多くみられるようになる。ただし、心理学的概念の系譜への志向が示されていること（１項）および、概念的探究に関するコメント（２項）には、注目すべきである。というのは、この二つの論点には、つぎのムーヴメントIVの方向性が示されているからである（３項）。

１項　心理学的概念の系譜

心理学的概念の系譜、先行研究の言い回しを借りれば、「心理学的概念の論理学」（Schlute(2000) p.7）「心理学的概念の地理学」（Hacker(2010) p.300）を志向しはじめるのが、この時期である。

ウィトゲンシュタインは率直に「心理学的概念の系譜について、わたしは語りたい」（MS133 p.73r, 1947.2.12-27, RPP1 722）と書き記し、実際この後かれは何度か、心理学的概念について系図的に描いている。その内容は次章で確認することとし、ここではかれがどのような目的でそうした系譜を語ろうとしているのかをみておきたい。

> きみが心理学的現象を分類し、あるいは比較することは何の役に立つのか。――それによって、一連のさまざまな哲学的問題に答えることができる。それは、さまざまな概念的な難問を明確にするための一つの方法なのである。（MS134 p.156, 1947.4.28-5.10）

ここから、心理学的概念の系譜について語ること自体が目的なのではなく、ウィトゲンシュタインにとって第一の目的は、あくまで難問を解くことにあるということがみてとられる。かれが必要としているのは、絡まった問題を解きほぐすために参観できる有益な資料だと言えよう。その資料が、厳密すぎて煩瑣であっては意味がない。それゆえ、「心理学的現象の系譜について、わたしが求めているのは、厳密さではなく、展望がよいこと」（MS134, p.83, 1947.4.2, RPP1 895）なのだと、かれは言うのである。

２項　概念的探究とは何をするのか

この時期ウィトゲンシュタインは、自身の探究方法、すなわち概念的な探究についても、記している。

---

70 「信じる、思う」という主題に、精神的な過程に関する問い甲から表現に関する問い乙への転換が適用されている。

> 「雨になるだろうとわたしは思ったということを、わたしは思いだした」と言うとき、「どんな事実を、どんな過程をわたしは思いだしたのか」と問うてはならない。（それはすでに確認されている。）そうではなく、「このように話すことにどんな目的があるのか、それはどのように使われるのか」を問え。（MS133 pp.70r-v, 1947.2.12-27, cf. RPP1 716）

71 たとえば、「『考えるとは何かしら独特なものだ』〔という文〕が意味するのは、つぎのことではありえないのだ。つまり、『思考とはこれだ』――これとは、要するに、わたしが自分のなかで指示しているものである」（MS133 p.27v, 1946.11.6）といった考察が、みられる。

しかし、概念的探究とは何をするのか。それは、人間の〔使う〕諸概念の自然誌なのか。――まあ、自然誌は、言うなれば、植物と動物を記述する。しかし、植物についてそのあらゆる詳細が記述されて、そのときはじめて、以前は見てとられていなかった、それらの構造上の類似性を見てとるひとが現れることはありうるのではないか。それゆえ、かれがこれらの記述に新しい配列を確立することはありうるのではないか。かれはたとえば、こう言うのだ。「この部分をこれと比較してはならない、むしろ、あれと比較せよ！」〔中略〕かれは「それをこのように見よ！」と言っている――そしてこのことには、さまざまな利点や帰結がありうるのだ。（MS134 pp.153-154, 1947.4.27, RPP1 950）

概念的探究とは何をするのか。これを、植物に関する探究[72]に託して、かれは語っている。

それは三つの段階を踏む。まず、問題のことがらについて詳細が記述されるということ。つぎの段階は、その記述によって、以前は見てとられていなかった類似性を見てとるようになるということ。そして最終的には、問題の概念に新しい配列が確立されるということである。

３項　まとめ――MIII-2 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響

心理学的概念の系譜、概念的探究に関するコメントはともに、『探究』第 II 部には載録されていない。しかしながら、つぎのムーヴメント IV に照らしたとき、この二つの議論は以降の考察の方向性を示唆していると言える。詳細は８章で論じることになるが、その思考は概念的探究のステップを、行きつ戻りつしながらではあるが、踏んでいくことになる。主題は、アスペクトを見ること（ε）である。

かれはまず、アスペクトに関連する心理学的諸概念の詳細を記述している。要するに、それらの概念の系譜を描く。そして、その系図に依拠しながら、アスペクトの報告に使われる「として見る」という概念と、その他の諸概念間の類似性を見てとろうと努め、その「新しい配列を確立する」のである。つまり、概念の系譜に関する考察とは、あくまでアスペクトの表現である「として見る」という概念の明確化という目的に服しているのである。

そしてもう一つ注目すべきは、ここからアスペクトが焦点化されることである。なぜウィトゲンシュタインは、意味体験からこの主題へと、対象を変えたのか。その理由が、概念的探究に関するコメントのなかにほのめかされているように思われる。というのは、「類似性を見てとる」こと、そして「それをこのように見よ！」とは、要するにアスペクトを見ること、アスペクトを転換することだからである。つまり、アスペクトに関する考察とは、自らの概念的探究という方法がどのような概念的基盤のうえに成りたっているのかを明らかにすることだとも解釈できるのである。このような動機をウィトゲンシュタインは表立って言うことはないが、アスペクトと概念的探究との関連にも留意したい。

[72] ウィトゲンシュタインの念頭には、ゲーテの形態学があった。本文で略した部分には、ゲーテへの言及がある。

３節　MIII-3：MIV に向けた準備

1947 年の 7 月中旬から、再び連日の考察が書き込まれるようになり、大学生活によって中断されていた考察が再開される（MIII-3, MS135 pp.1r-146, 1947.7.12~11.9）。おそらくはこのころ大学生活にまつわる雑事が片付き、前年の夏まで取りくんでいた思考が再開されたものと思われる。そして、ウィトゲンシュタインはこの頃から、アスペクトを見ること（ε）に関する概念的な探究に向かっていくことになる。まず、この主題をどう扱うのか、その基本的な指針から確認していきたい。それがもっともはっきり表れているのが、以下の記載である。

> わたしは、写真の眼がわたしに語りかけるままにさせている。
> わたしはその像を、ひょっとするとはじめて、実際の顔として見ている。「その表情に見入る」。「そのとき何が生じているのか」とは問うてはならない。そうではなく、「この表現でひとは何をしているのか」と問え。（MS135 pp.47-48, 1947.7.20, RPP1 1033）

写真の人物のまなざしにこころを奪われて、その像を実際の顔「として見る」。「そのとき何が生じているのか」と問うのではなく、「この表現でひとは何をしているのか」と問えというのは、精神的な過程に関する問い甲から表現に関する問い乙への転換そのものである。

ただし、多義語の理解に関して展開したような細かい議論は、ここではくり返されていない。アスペクトに関する議論の中心は、次章でみる「として見る」の概念的な探究になるが、その本格的な考察を前に、かれは二つの誤った立場を検討している（１項）。それはいずれも、色やかたちとアスペクトに関する単純化された説明である（本章１節１項参照）。それを踏まえたうえで、自分の立場を明確にしている（２項）。以上を確認した後、MIII-3 の位置づけを確認したい（３項）。

１項　アスペクトを見ることに関する二つの誤った立場

先に、アスペクトの表現として「色やかたちは同じままなのに、視覚像が、すなわちその体制が実際に変化するような、視覚現象」（MS132 p.180, 1946.10.13, RPP1 534）という言い方を確認した。では、色やかたちと、ここで「視覚像」「体制」と呼ばれているもの、要するに色やかたちの再現によってはその変化を記述できないものとの関係をどう理解すればよいのか。

選択肢の一つは、いずれも直接的な視覚の対象として扱うことである。この立場は、ケーラーに託されている。

> 「もの」や「背景」とは、赤いや丸いと同様の、視覚的な概念である――そうケーラーは言うだろう[73]。見られたものの記述は、色やかたちの報告だけではなく、何がものであり、何が背景であるのかという報告も含んでいる。〔中略〕わたしは一方〔ものや背景〕を、他方

[73] cf. Köhler(1975) p.203. ケーラーがウィトゲンシュタインに与えた影響については、米澤(2008, 2009)が参考になった。

〔色やかたち〕と同様に、直接的に見ている――かれはそう言うだろう。（MS135 pp.37-38, 1947.7.18, RPP1 1023）

自分が見ているものを報告する際、その色やかたちだけでなく、それが何かといったことも、われわれは述べる。このことから、色やかたち、そしてそれが「ウサギ」だということも、すべては「直接の視覚対象」、「わたしの視覚対象」（MS135 p.127, 1947.8.1, RPP1 1107）の性質だと考えるのが、この立場である。この推論の背後には、「見られたものの記述」とは、もっぱら「主観的に見られたものの記述」（MS135 p.38, 1947.7.18, RPP1 1023）だという前提がある。この考えの問題点を述べる前に、もう一つの選択肢を確認しておこう。

それは、「本来わたしの見ているものとはやはり、対象の影響によって、わたしの内に生起するもののはずだ」（MS135 p.94, 1947.7.25, RPP1 1075, PI2xi158）という考えである。そして、そのわたしの内に生起するものとは、「何かしらコピーのようなもの、自分の前に引きだして、改めて眺めることができるようなもの」であり、あたかも「物質化したもの（*Materialization*）」のようだと、ウィトゲンシュタインはつづけている。

そして、この物質化したものとは空間的な何かであって、空間的な概念によって完全に記述されるはずである。それが微笑むこともたしかにあるが、その友好さという概念はその叙述には属さず、その叙述とは異質なのである（そのような概念が叙述に役に立つこともあるとは言え）。（MS135 pp.94-95, 1947.7.25, RPP1 1075, PI2 xi158）

こちらの立場は、先の立場とは異なり、わたしが見ているものとは、色やかたちといった空間的なものに尽きると考えている。それゆえ、たとえば「友好さ」については「感じとる」（cf. MS135 pp.88-90, 1946.7.25, RPP1 1070）、あるいは「知る」（cf. MS135 pp.90-91, 1947.7.25）、「推論する」（cf. MS135 pp.123-125, 1947.7.31, RPP1 1102）対象だということである。

二つの主張の対立点は、「見られたもの」に、色やかたち以外をどこまで含むのかという点にある。前者は、色やかたち以外にも、何がものであり、何が背景なのかということも、視覚の対象だと考え、後者は、視覚の対象は色やかたちといった空間的なものに限られると考えている。しかし、ウィトゲンシュタインはどちらの選択肢もとらない。 では、かれの立場とはどのようなものか。

2項　ウィトゲンシュタインの立場と MIV へ向けた課題

ふるまいのアスペクトを見る例を用いて、かれは自分の立場を明らかにしている。具体的に言えば、「その子がイヌに触ろうとしているのだが、どうも勇気がでないのだということをわたしは見てとる」（MS135 p.86, 1947.7.25, RPP1 1066）、写真の人物のまなざしに見入って「わたしはその像を、ひょっとするとはじめて、実際の顔として見ている」（MS135 p.47, 1947.7.20, RPP1 1033）ともらすといった場面である。

まず、前項の二つの立場をこの事例に当てはめれば、つぎのようになるだろう。まずケーラーに帰された前者の立場ならば、印画紙上の数色の斑点を見るのと同じように、それが顔であると

いうこと、あるいはさらにそのまなざしも直接的に見ていると言うであろう。後者の立場ならば、われわれが見ているのはあくまで色の斑点であって、それがどんなふうにまなざしているのかといったことは、推測されるのみだということになる。 ウィトゲンシュタインは、この両方の立場を斥ける。

> わたしはたしかに、きみが他のひとに投げかけるまなざしをわたしは見ると言う。そして、わたしの言うことを訂正しようと、わたしはそれを本来は見ていないのだと言うひとがいれば、わたしはそれをまったく愚かしいことだとみなすだろう。
> 他方で、わたしがこういった語り方をすることで、何かを認めたというわけではないのだ。わたしはそのまなざしを眼の色やかたちと「同様に」見ているのだと、わたしに言うひとには反対する。（MS135 p.122, 1947.7.31, RPP1 1101）

われわれはたしかにまなざしを「見る」と言う。われわれのこのような言語使用を不純なものと考え、「見る」という語は色やかたちに限定するべきだと主張する「浄化論者（Purist）」（MS135 p.123, 1947.7.31, RPP1 1102）がいるとすれば、それはまったく愚かしいとまで言う。「まなざしを見る」というのは、われわれの言語使用の現実であって、それを改善すべきだなどというのは、ウィトゲンシュタインの意図するところではまったくない。

しかしだからと言って、まなざしを眼の色やかたちと「同様に」見ているという主張に与するわけでもない。なぜなら、こちらも、われわれの言語使用を適切に見てとっていないからである。

> しかしながら、このふるまいのなかの恐れ——あるいは顔の表情——を、わたしは実際に「見ている」と言うべきなのか。なぜ言ってはならないのか。——とは言えそれによって、知覚されるものに関する二つの概念のちがいが否定されるわけではない。顔の絵が、その顔の目鼻立ちを非常に正確に再現しているのに、その表情は正しく再現していないということがあるだろう。また、表情は似ていても、目鼻立ちはうまく捉えていないこともあろう。
> 「よく似た表情」は、「よく似た解剖学的構造」とはまったく別様に、顔を分類する。（MS135 p.87, 1947.7.25, RPP1 1068）

ウィトゲンシュタインの立場とは、「見る」には二つの用法があるというものである。一つは顔の目鼻立ちに対して使われ、もう一つは恐れや表情、まなざしに使われる。両者のちがいは、こう表現することもできる。すなわち、何を見ているのかと問われたときに、「一方は一枚のスケッチによる記述、もう一方は諸々の言葉や像による記述」（MS135 p.19,1947.7.15）が、答えとしてつづく。 たとえばある人物の顔を写した写真を見ているときに、きみは何を見ているのかと問われるとする。その人物の顔かたち、骨格や目鼻の形や位置について伝えたいならば、その写真の色やかたち、その配置を正確に再現するのが適切な記述となろう。それに対して、その表情を伝えようとすれば、「微笑んでいる」とか「悲しげだ」といったことを言ったり、その表情をまねしたりする方が、より容易であろう（cf. MS135 p.91, 1947.7.25, RPP1 1072）。

そして、この二つの「見る」のちがいは、色やかたちと「もの」「背景」とのちがいにも対応する。たとえばウサギ-アヒルの反転図形にも、その線画の正確な再現と、それは「ウサギ」であるといった二種類の記述の仕方がありうる。前者は色やかたちに対して使われる「見る」であり、後者をひとまず「アスペクト」と捉えておきたい。その特徴は、「その記述は、その図自体の記述には属さない概念を前提している」（MS135 p.45, 1947.7.19）ということである。後者の報告をするためには、「悲しげ」「ウサギ」といった、色やかたちとは異なるカテゴリーの概念を必要とするということだ。

つまり、色やかたちを「見る」こととアスペクトを「見る」ことは、ちがう使われ方をしているのである。にもかかわらず、ウィトゲンシュタインがケーラーに帰した立場は、このちがいをまったく無視している。その意味で、浄化論者同様、かれもわれわれの実際の言語使用を適切に見てとっていないということである。

しかし、「ここで見ることの対象ではありえないものが、見ることの対象になっているように思われる」（RPP1 1007, cf. MS135 p.18, 1947.7.15[74]）、三次元空間に存立しうる色やかたちとは別の「第四の次元」（MS135 pp.93-94, 1947.7.25, cf. RPP1 1074）を知覚するとでも言いたいのかと、浄化論者からは言われるかもしれない。また、色やかたちを「見る」ことと「もの」「背景」を「見る」ことが異なる用法なのだとすれば、そのちがいはいったいどこにあるのかと、ケーラーに帰された立場からは問われるであろう。そうなると、ウィトゲンシュタインの課題は、二つの「見る」のちがいの明確化ということになる。

3項　まとめ——MIII-3の準備稿における位置づけと『探究』第II部への影響

以上のMIII-3の考察において、ウィトゲンシュタインが取りくんだのは、アスペクトを見る（ε）という主題に関する自身の立場を明確にすることであったと言える。そのために、かれは自らとは異なる二つの立場（色やかたちと「もの」「背景」は共に、直接的な視覚の対象だと考えるケーラーに帰された立場、「見る」対象はあくまで空間的なものであると考える立場）を参照項とし、両者との差別化によって自らの立場を表明した。かれの立場とは、「見る」という語には、色やかたちを見ることとアスペクトを見ることの、二つの用法があるということである。そうなると、ここから当たるべき課題は、この二つの用法のちがいを考察することだと確認された。

振りかえれば、この問題は、MIにおいて立てられた問い（多義語の意味（β2）、意味感覚（δ）、アスペクトを見ること（ε）に関する問い）の一つである（５章２節４項）。MIIにおいて二つの問いに片がつき、ここでかれは残されていた最後の問いに取りくみはじめたということである。その際かれは、自分とは異なる立場を補助線にすることで、まず解決すべき課題を明確にした。つまり、MIII-3とは、MIにおいてすでに提示されていた課題を再確認することで、つぎのムーヴメントIVへ向けた予備的考察を行ったと言えるわけである。そして、『探究』第II部に照らせば、これは、アスペクトを主題化するxi-1章を下支えする議論ということになる。

---

[74] normlized ver.では、「〔ひとが〕見ているものは、見ることの対象であるかのように思われる」と訳することのできる文が起こされているが、これでは意味が通らず、前後とのつながりとも整合しない。リライトの誤りではないかと推測される。そのため、前後のつながりに鑑みて、同箇所からタイプされたと推測される『心理学の哲学１』1007節を用いた。

８章　MIV（MSS135 後半～137 前半）の分析

TS229（『心理学の哲学１』）をタイプした後、ウィトゲンシュタインはアイルランドに滞在し、ふたたび旺盛な執筆に入った[75]。そして、1947 年の晩秋からおよそ一年にわたる考察が、TS232（『心理学の哲学２』）としてまとめられることになる。このタイプ原稿の元になった考察を、本稿では、ムーヴメント IV とする。

ここから考察は、アスペクトを「見る」ことに関する概念的探究のステップを踏んでいくこととなる（前章２節２項参照）。すなわち、まず心理学的概念の系譜を作成し、それに依拠しながら、「として見る」という概念とその他の諸概念間の類似性を見いだす試みへと進む。そして、この探究を通じてかれが求めているのは、この概念の新しい配列を見いだすことである。

では、こうした概念的探究は、そもそも何のために必要とされているのか。かれはどのような問題を解決しようとしているのか。意味体験に戻って、MII の成果を再確認することから、考察ははじめられている。

> でも、「意味を体験する」という表現は、唯一の自然な表現なのではないか。――それが意味しうるのは、つぎのことにすぎないだろう。すなわち、その表現は、学んだことはなくともわれわれが自発的に使う、体験のプリミティブな表出なのではないのか、ということである。（MS136 p.149, 1947.12.8）

「プリミティブ」という形容で思いだされるのは、MII において、混乱した像の起点となった「プリミティブな像」である（６章３節）。本稿ではこれを、こころの状態を描くのに身体の像を用いることだと解釈した。ここでの「プリミティブ」という表現にも、この考えが踏まえられていると考えられる。すなわち、「意味を体験する」という表現は、たとえば詩の言葉をありありと実感するといった場面で、そのときの感動した気もちの表現になっているといったことが考えられよう。そしてまたやはり、この表現はこれまで学んできたのとは別の、新しい用法なのである。というのは、「意味」という言葉を、その文字通りの用法ではなく、「体験する」という、元々「意味」とは結びついていなかった概念と結びつけて語っているからである。以上は、MII において得られた成果、像的な表現の特徴の再確認であるが、ここで浮上するのは、この新しい用法の「体験する」は、どういう意味なのかという問いである。

> そうすると問題はこういうことになる。でも、たとえば色や音と「同様」ではない仕方で、われわれは意味を体験するのか。そしていまや、概念的なちがいをわれわれは述べねばならない。（MS136 p.149, 1947.12.8）

色や音を見聞きするときに使うのが、われわれがこれまで習ってきた「体験する」の用法である。

---

[75] ウィトゲンシュタインはレッド・クロス（ダブリンの南）の農場に滞在した後、5 月には西海岸のロスロへと移っている。そして、8 月にはロスロを後にし、ダブリンやウィーンを訪れている。（cf. Monk(1991) pp.520-550）

では、これと「意味を体験する」はどう異なるのか、その「概念的なちがい」はどこにあるのか。この問いは、MIII-3 においてアスペクトを見るという主題を対象にした問いと同型と言うことができよう。すなわち、色やかたちに使われる「見る」とアスペクトに使われる「見る」は、どう異なっているのか。これに解答を与えることが、概念的探究の目的なのである。以降、通常の用法と新しい用法の概念的なちがいは何かというこの問いを、「新しい用法に関する問い丙」、あるいは単に「問い丙」と呼ぶ。

そしてこの問い丙を、主にアスペクトを見るというテーマ（ε）について展開するのが、ムーヴメント IV ということになる。主要なスレッドとして、以下の三つを認めることができる[76]。

・心理学的概念の系譜に関する考察（ι）
・アスペクトに使われる「見る」の分析（ε）
・他人のこころに関する不確実さを自然誌において位置づける（μ, γ）

これらの主要スレッドに照らし、本稿では、ムーヴメント IV を五つに分けることとしたい。

MIV-1（MS135 p.146-MS136 p.100b, 1947 冬~1948.1.12）：心理学的概念の系譜 1 （ι）
MIV-2（MS136 p.100b-126a, 1948.1.12-17）：MIV-1 のアスペクトへの適用（ε, ι）
MIV-3（MS136 p.126a-MS137 p.5a, 1948.1.17-2.4）：心理学的概念の系譜 2 （ι）
MIV-4（MS137 pp.5a-38a, 1948.2.4-3.25）：IV-2 で残された問題とアスペクトの総括（ε, ι）
MIV-5（MS137 pp.38a-76a, 1948.5.28~夏）：体験の表出の自然誌における位置づけ（μ, γ）

IV-1～4 において、心理学的概念の系譜に関する探究と、そのアスペクトへの適用が交互に考察されている。そして、IV-4 と 5 のあいだは、およそ二ヶ月空白があり、思考のフェーズは変化しているとみるほうが適切であろう。これを踏まえて以下では、心理学的概念の分析１、２（ι）をまとめて確認し（１節）、そのうえでアスペクトを見ることに関する考察（ε）へと進んでいきたい（２節）。この再構成は、ウィトゲンシュタインの意図にも沿うものだと言える。というのも、タイプを作成する際にかれは、手稿の記載順を変更し、IV-1 と 3、IV-2 と 4 を並べるかたちに編集をほどこしているからである[77]。そして３節において、体験の表出の自然誌における位置づけというテーマ（μ, γ）をみることとしたい。

１節　MIV-1, 3：心理学的概念の系譜

すでに確認したように、心理学的諸概念の系譜を作成する目的は、アスペクトに使われる「……として見る」と、その他の諸概念とのあいだにある類似性を見いだすことにある。つまり、心

[76] もう一つ、自然誌と「色」概念の形成の関係というスレッド（γ）がときおり挿入される。しかしこの主題は、『探究』第 II 部以降（MS173,『色彩について』）にもち越されることになる。そのため、本稿では扱わない。
[77] MIV-2 の時期に書かれた手稿から『心理学の哲学２』355-414 節として載録された考察を後ろへまわし、MIV-3 の時期に書かれた 306-354 節を前に出すかたちで編集がされている。

理学的概念の記述という課題自体に何らかの問いや結論があるわけではなく、あくまでも「さまざまな概念的な難問を明確にするための一つの方法」（MS134 p.156, 1947.4.28-5.10） だということである。これを踏まえ、本稿では、諸概念の特徴には入りこまず[78]、大枠の系図を示すにとどめたい。ただし、意識状態と傾性、行為とのちがいは、次節において重要なポイントになるため、少し踏みこんで、確認する。

１項　心理学的概念の系図

ウィトゲンシュタインは、心理学的なもの、心理学的な概念の系譜を二度にわたってまとめている。その二つは、似た点も多くあるが、統合することは困難であるため、二つの系図を示す[79]。

図 9-1 心理学的概念の系図１（cf. MS134 pp.41-43, 1947.3.18, RPP1 836, 837）

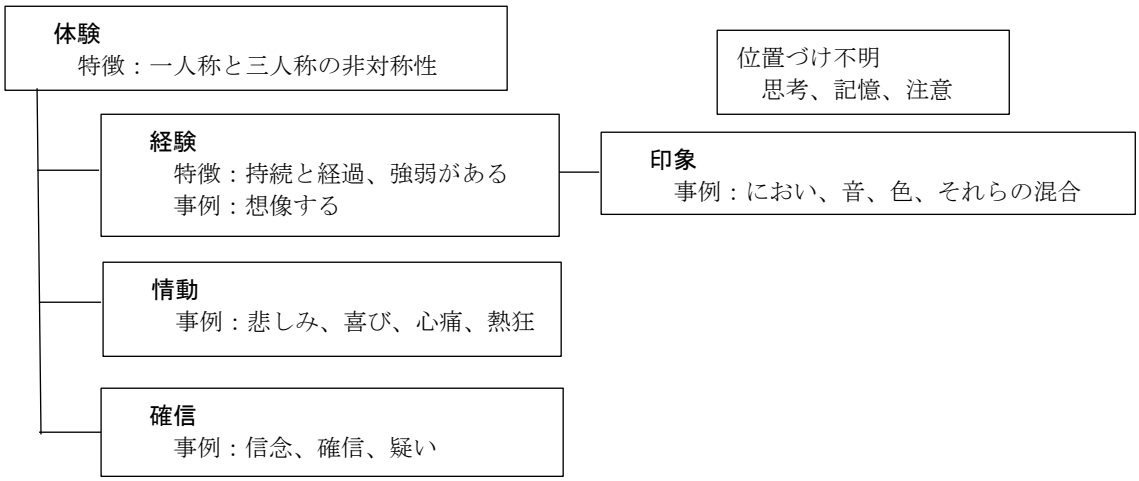
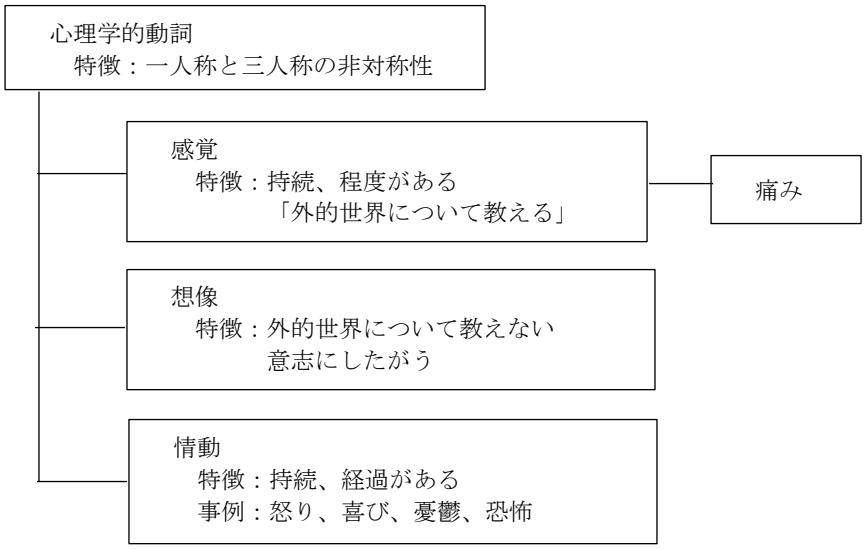


図 9-2 心理学的概念の系図２

（MS136 pp.3a-4a, 1947.12.18, RPP2 63, MS136 pp.27a-28b, 1947.12.24, RPP2 148）



[78] ウィトゲンシュタイン自身は、「わたしがここでしていることはそもそも、諸概念のちがいを実演してみせる言語ゲームを指摘することである」（MS135 p.186, 1947.12.17）と言い、実際に諸概念の特徴の記述を行っている。

[79] Schulte(2000)も、二つの系図を起こしている（pp.28, 31）。本稿でも参照した。

アスペクトを見ることに関係してくるのは、系図１においては、経験（想像する）と印象（色を見る）であり、系図２においては感覚と想像である[80]。

２項　意識状態、傾性、行為

意識状態、傾性、行為の区別は、「見る」に関する分析の前提となるため、ここで少し詳しく確認しておきたい。まず、意識状態と傾性の特徴からみていきたい。

> 「意識状態」について、わたしは語ろうと思う。そして、ある特定の像を見ること、音を聞くこと、痛みの感覚、味覚等をそう呼ぼうと思う。信じる、理解する、知る、意図するなどは、意識状態ではないとわたしは言いたい。後者は、さしあたり「傾性（Disposition）」と呼ぶとすれば、傾性と意識状態との重要なちがいは、傾性は意識が中断したり、注意が移ったりすることによって、途切れるわけではないということである。（また、これは当然ながら、因果的な考察ではない。）（MS135 pp.180-181, 1947.12.13, RPP2 45）

意識状態と傾性を分けるポイントは、意識の持続である。たとえば「甘い」という味覚は、甘いということを感じている限りで存在し、「意識状態」に分類することができる。それに対して、砂糖は甘いということをわたしは知っているが、眠ったからといってその知が途切れることはない。それゆえ、「知る」は「傾性」に分類できる。

アスペクトを「見る」ことに関連してくるのはまず、ある特定の像を「見る」ことが「意識状態」に分類されていることである。そして、「そのように捉える（auffassen so）」や「とみなす（halten für）」といった表現が「傾性」に当たるということである。というのも、これらの表現の用法とは、「『もしきみがわたしに……と問えば、わたしは……と説明しただろう』という条件文によって表現される知のようなもの」（MS131 pp.41-42, 1946.9.19）だからである。

では、行為でウィトゲンシュタインは何を考えているのか。日本語の行為に類する語をかれは複数用いており（Akt, Handlung, Tätigkeit, Tun）、それらのあいだのちがいは判然としない。ただし、これらの言葉で括られる概念はそれほど多くはなく、MIV において言及される限りでは、「想像する」「解釈する」「考える」の三つである。

> 何かを想像することは、一つの活動（Tätigkeit）と比較できる。（MS136 p.11a, 1947.12.20, RPP2 88）

> 想像するという概念は、〔見るがそうであるような〕受信という概念よりむしろ、行為（Tun）の概念に似ている。想像することを創造的な行い（Akt）と呼ぶことができよう。（また実際そう呼ばれてもいる。）（MS136 pp.16a-b, 1947.12.21, RPP2 111）

---

[80] 系図１で印象は、想像を含む経験の下位概念とされているのに対し、系図２においては、感覚と想像は、両立不可能な概念になっている点に、ちがいがある。

解釈することは考えることであり、行動すること（Handeln）だからだ。（MS137 p.35a, 1948.3.15, RPP2 546, PI2 xi248）

これらが「行為」とされるポイントは、二つあるだろう。一つは、それらが意志的になされるということ、そして、実際の身体的な行為に類することを、いわば頭のなかで行なっているということである。

ある特定の想像や考えが、勝手に思い浮かんで振り払うことができないといったことがまれにあるとは言え、想像する、解釈する、考えるは、基本的には、意志的になされると言ってよかろう。実際、前項でみた系図２では、想像の特徴として意志にしたがうことが挙げられていた。

つぎに、身体的な行為に類するという後者のポイントを理解するために、「メロディーを想像する」ということを考えてみたい。かれは、これを「こころの中で前もって歌う」と言い換え、「それは、暗算と同様に、活動（Tätigkeit）と呼ばれるだろう」（MS136 p.9a, 1947.12.19, RPP1 81）と言っている。こころの中で前もって歌うことは一音一音を声に出すことに置き換えられるであろう。また暗算は、計算過程を紙に書くように、あたまのなかでステップを踏むことに置き換えられるような過程が考えられていると思われる。ごく基礎的な四則算や暗算の達人といったケースはこれに当てはまらないだろうが、前もって歌うことと類比的な活動であるとすれば、ここで念頭に置かれているのは、一瞬のひらめきといったことではなく、一定の時間の幅をもつ過程だと考えられる。同様に、特定のイメージを想像することは絵を描くことに置き換えられようし、考えることが活動でありうるのは、想像のなかで自分に話す（cf. MS135 p.154, 1947.12.9, RPP2 9 etc.）からである。同様に、解釈するとは「偽だと証明されるかもしれないような仮説を立てること」（MS137 p.35a, 1948.3.15, RPP2 547, PI2 xi249）だと言われていることを踏まえれば、この場合にも、これは……かもしれない等と考える、自分に向かって話すことであろう。

以上で、意識状態、傾性、行為のちがいは確認されたが、これに基づく心理学的概念の分類は、それほど単純ではない。同じ語であっても、その使われ方によっては、別のカテゴリーに分類されることがある。行為の典型として挙げられた「考える」が、もっとも複雑である。

たとえば、〔いまわれわれが使っている「考える」に関して、〕二つの（あるいは二つ以上の）異なる語をひとは所有することができよう。「声に出して考えること」のための言葉、想像の中で考えながら話すための言葉、何かしら思い浮かんで（あるいは何も思い浮かばず）、それでもその後で確信をもって答えを与えることができるような休止のための言葉。
われわれは二つの言葉をもつことができよう。文で表現される思考のための言葉、後から「言葉の服をきせる」ことができるような、思考のひらめきのための言葉。（MS136 p.58b, 1948.1.4, RPP2 215）

声に出して考えることや想像の中で話すことは行為に分類できるだろうが、たとえ何も思い浮かんでいなくとも後から答えるという特徴は傾性と合致するようにみえる。また「ひらめき」をどう扱うのかは、アスペクトにおいても懸案事項の一つであり、この時点では明確な位置づけはな

されていない[81]。このような多様性を指して、「考える」は「枝のひろがった概念」（MS136 pp.59b, 60a, 1948.1.4, RPP2 218, 220）だと形容される。

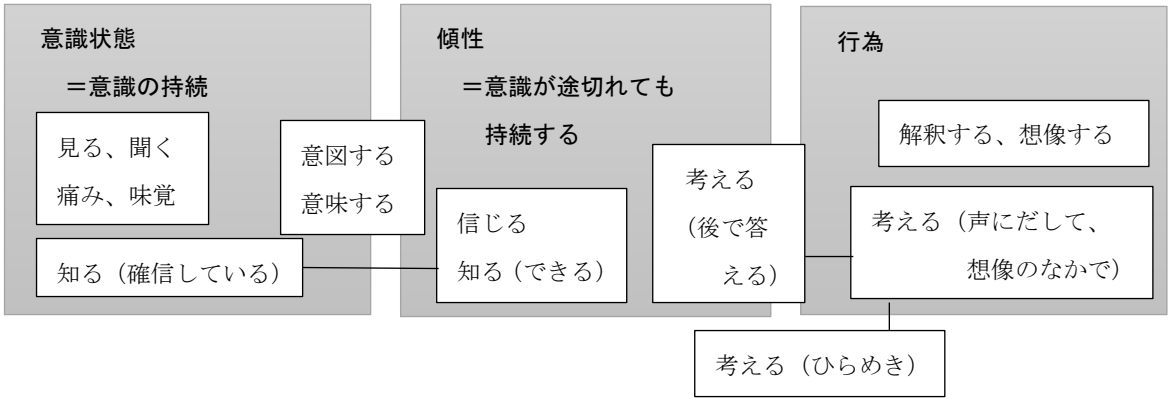
「意図する」や「知っている」、さらには「意味する」についても、傾性と意識状態の二つの可能性が指摘される。

> いまや「意図する」をわたしは二つの仕方で呼ぶことができるだろうか。すなわち、わたしがそれを意識していないときにも持続するようなもの〔傾性〕、そしてもう一つは、意識状態であるようなもの。（MS136 p.69b, 1948.1.6）

> 「わたしは知っている」は、一方では「わたしは……ができる」〔傾性〕を意味するが、他方では「わたしはそれについて確信している〔意識状態〕というのは事実だ」ということを意味すると、言いたくなる。（MS136 p.99a, 1948.1.12）

> 「きみは何を意味していたのか」や、これに似た問いは二つの仕方で使われることがあるだろう。一方では、言語ゲームをつづけることができるように〔傾性〕、意義や意味の説明が求められているにすぎない。他方では、その文が話された時点で何が生じたのか〔意識状態〕にわれわれの関心が向けられる。（MS136 p.75b, 1948.1.7, RPP2 254）

図 9-3 意識状態、傾性、行為の系図



２節　二つの「見る」の分析

以上の心理学的概念の分析を踏まえつつ、アスペクトに使われる「見る」の分析へと移りたい。以下では、二つの用法に関する解釈がどのように変化していくのかに着目しながら、ウィトゲンシュタインの思考を時系列に沿ってみていきたい。

二つの「見る」は、前章でもすでにそのアイディアが登場していた。

81　たとえば、「上で述べたように、本来の想像と記述する能力を伴ったひらめきとのあいだに、ちがいがあるのかもしれない――このようなちがいはまったく存在しないのかもしれない。あるいは、そこにはたしかにちがいがあるのだが、期待されたのとは別種のちがいかもしれない」（MS136 pp.26a-b, 1947.12.24）といった記載に、かれの逡巡がみてとられる。

しかしながら、このふるまいのなかの恐れ――あるいは顔の表情――を、わたしは実際に「見ている」と言うべきなのか。なぜ言ってはならないのか。 ――とは言えそれによって、知覚されるものに関する二つの概念のちがいが否定されるわけではない。顔の絵が、その顔の目鼻立ちを非常に正確に再現しているのに、その表情は正しく再現していないということがあるだろう。また、表情は似ていても、目鼻立ちはうまく捉えていないこともあろう。
「よく似た表情」は、「よく似た解剖学的構造」とはまったく別様に、顔を分類する。(MS135 p.87, 1947.7.25, RPP1 1068)

ここで、二つの「見る」は、顔の目鼻立ちと表情という、対象のちがいとして述べられていた。前章を振り返れば、前者の場合に見られているものは色やかたち、その配置であり、スケッチによって記述されうる（cf. MS135 p.19,1947.7.15)。それに対して、後者の場合に見られているものの「記述は、その図自体の記述には属さない概念を前提しており」(MS135 p.45, 1947.7.19)、「諸々の言葉や像」(MS135 p.19,1947.7.15）によって記述されると言われていた。

以下では、二つの「見る」のちがいが念頭に置かれているケースにおいて、色やかたちを対象にする用法を「見る１」、それに対置される用法を「見る２」と呼ぶことで、当面区別したい。先取りして言えば、「見る２」としていくつかの用法が挙げられるが、それらは必ずしも一貫してはいない。MIV の時点では、この概念についてまだ十分な見通しが得られていないということが、ここには反映されている。「見る２」の特徴が整理されるには、二次手稿を待たねばならない。そこで本節では、「見る２」が問題を抱えていることを念頭に置きながら、ひとまずウィトゲンシュタインの叙述に逆らわずに、その展開を追っていきたい。

１項　IV-2：「見る２」の新しい配列とはいかなるものか

傾性と意識状態のちがいを、「見る」に援用することで、ウィトゲンシュタインはまず、より具体的な見通しを立てている。

わたしはこう言うべきだ。「その図をそのように把握する」（持続する状態、傾性）がある、また、「その図をしかじかのように凝視する（ansehen)」があり、それから「その図をそのように見る」がある。(MS136 p.100b, 1948.1.12)

すでに確認したが、「把握する」という概念は条件文によって表現される知であり、傾性に分類される。「持続する状態」という文言は、誤解を招きかねないが、「傾性」と並べられていることを勘案すれば、意識が持続している状態ではなく、「意識していないときにも持続する」(MS136 p.69b, 1948.1.6）という意味であろう。そして、「凝視する」は何かしら気になることなどがあって、集中して見ているということであろうから、意識状態と言える。そして、これらとは異なる概念として、「その図をそのように見る」があることが示唆されている。傾性とも意識状態とも異なる「そのように見る」という用法を、われわれはどう位置づけるべきなのか。これが、課題である。

１項１　「見る２」と「知る」

MIV における、二つの「見る」に関する最初の言及は、以下である。

> ある対象、立方体、木、ひとの頭部を眺めているときに、何を見ているのかと問われれば、わたしは答えとして一枚のスケッチを描くか、あるいは一つのモデルをつくるか、または言葉やしぐさによって記述を与えることができる。〔中略〕
> このケースを、二つの仕方で見ることのできる右のような図の場合とどう比較するのか。〔中略〕
> 最初のケースでは、わたしは答えとして見られたものの正確な模写をつくって、それを指しながら「それが、わたしがそこに見ているものだ」と言うことができよう。しかしながら、わたしがその図〔二つの仕方で見ることのできる図〕を「どのように」見ているのかを述べるためには、そうしてはならない。むしろ、わたしは別のかたちを示さねばならない。(MS136 pp.102b-103a, 1948.1.13)

最初の段落は、「見る１」の場合に、見られたものがどう記述されるのかを述べていると考えられるが、ここにもすでに、前章から変化がある。前章では「見る１」はスケッチによって記述され、表情を「見る」こと（「見る２」）は言葉や像によって記述されると言われていたが、ここでは「見る１」の記述として、スケッチもモデルや言葉、さらにはしぐさも加えられている。見られたものの記述に、より多様な可能性を認めていると言えよう。

そうなると、「見る２」に当たるケースは、いまの場合にどう記述されることになるのか。ここでは、複数の見え方のある図を「どのように見る」のか、あるいは「何として見る」のかが、「見る１」に対比されている。そしてこれを記述するには、正確な模写ではなく、別のかたちを示す必要があるというのが、ここでの答えである。挙げられているのは、F としても、F の鏡文字としても見ることのできる図である。これについて、何を「見ている（１）」のかと問われれば、正確な模写がもっともよい答えになるだろう。しかし「どのようなものとして見ている（２）」のかという問いには、その図をそのまま模写しても答えにはならない。F か F の鏡文字という、その図とは別のかたちを示さねばならないということである。

このケースで「見る１」と「そのように見る」（「見る２」）のちがいはどこにあるのか。手がかりは、以下の記載にある。

> 文字がわたしにどのように現れるのか（vorkommen）は、それゆえ、それが厳格に規範にそって書かれているのかどうか、あるいは、規範からどのように逸脱しているのかに依る。そうすれば、文字のかたちについて一つの説明しかわかって（kennen）いないか、二つの説明がわかっているかによって、ちがいが生じるということも理解できるようになる。（MS136 p.104a, 1948.1.13, RPP2 357）

たとえばウィトゲンシュタインは、先の図を F か F の鏡文字としてしかおそらく見ていないであろうが、漢字を知っているわれわれは干としても見ることができる。文字のかたちについて、ア

ルファベットという範例しか知らないのか、さらに漢字を知っているのかによって、文字の現れ方、文字が「どのように見える」のかという点には、ちがいが生じるようになる。それに対して、正確な模写が答えになるような「見る１」の記述には、そのかたちを示すことが重要であり、知識のちがいが反映されることはない。

これを端的にまとめれば、「こうした印象を受けとることができるのは、このかたちを示すだけではなく、そのかたちについてあれやこれやのことを知っているひとだけである」（MS136 p.104a, 1948.1.13）ということになろう。つまり、「そのように見る（２）」を記述するためには、目の前のかたちとは別のかたちを示さねばならないということである。

以上、「見る２」が成立する条件として、目の前の対象に関係づけられる別の可能性について「知っている」「わかっている」ことが必要であることを、ここまで確認してきた。しかし、ここにはもう一つの論点がすでに含まれている。

１項２　アスペクトのひらめきと「考える」「想像する」

複数の見え方が可能であるということは、それまで F という文字にしか見えていなかったものが、F の鏡文字として見ることもできるということに気づく瞬間があるということでもあろう。では、このアスペクトに「気づく」瞬間、要するにアスペクトの「ひらめき」をどのように位置づければよいのか。ウィトゲンシュタインは、この問題にも高い関心を寄せている。

> その文字を F の鏡文字として見るということは、「それはまた F の鏡文字でもありうる」という思考に対応している。そのような「それはまたそのようにも把握することができる」というあらゆる思考が、アスペクトをひらめかせる。ひらめき（Aufleuchten）と残光（Nachleuchten）。わたしはこう言いたい。このような思考がなければ、ひらめきは存在しない。〔中略〕それゆえ、わたしは前に一度[82]、アスペクトは思考の残響であると書いた。（MS136 p.104b, 1948.1.13）

先の図を F としてだけでなく、干としても把握できると、われわれは「考える」。こうした思考がなければ、アスペクトがひらめくこともないというのが、ウィトゲンシュタインの見立てである。より実感できる事例は、ある一つの顔「のなかに」他の顔との「類似性を見る」という例である。この例は、後でもみるように、「見る２」の一種として扱われることになる（cf. MS137 pp.37b-38a, 1948.3.25, RPP2 556, cf. PI2 xi111）。

> いまかれの顔のなかにかれの父親をわたしは見ていながら、それでもそのときにかれの父親のことを考えないということは可能なのか。かれの顔のなかにかれの父親を見るということは、かれの父親の顔を想像することの一種であった。（MS136 p.109a, 1948.1.14, RPP2 367）

最初はかれがだれに似ているのかは言えないけれど、だれかに似ていると思いながら、かれの顔を眺めている。すると、かれの父親の顔が思い浮かび、かれはお父さんに似ているのだと気づく。

82　cf. MS135 pp.49-50, 1947.7.20, RPP1 1036

かれの父親の顔を想像しなければ、このアスペクトがひらめくことはなかったであろう。

このように自分の実体験を思いだしてみれば、アスペクトのひらめきには「考える」ことが必要であると、たしかに言えそうである。しかし、考えることがアスペクトに気づかせるのはなぜなのか。

> わたしはこう言いたい。そのようなあらゆる場合に、わたしはその図をある特定の関係において見ている。そしてそれゆえ、まさにそのことによって、この関係についてわたしは考えていると言うことができるのではないか。「関係」とは、やはり（それが何を意味しようと）思考の対象である。（MS136 pp.107b-108a, 1948.1.14）

あるものをどのように見ているのかを述べるためには、当の対象とは別のかたちを示す必要がある。それは言い換えれば、目の前の対象とそれには属さない別のもの、たとえば手書きの線と鏡文字、かれの顔とかれの父親の顔を関係づけることにおいて、アスペクトは成立するということである。そして、二つのものを関係づけるということは、両者のあいだに成立しうる関係について「考える」ことにほかならない。

１項３　アスペクトを保持することと「考える」

しかしまだはっきりさせるべきことが残っている。つまり、アスペクトのひらめきに思考が必要なことはわかったが、その思考はひらめき以降にも働くのか。というのも、一旦ひらめいたアスペクトをわれわれはしばらく持続させることができるように思えるからである。たとえば、かれがかれの父親に似ていると気づいたとき、たしかにわたしはかれの父親の顔を思い浮かべた。しかし、そのひらめきの後もしばらくは、かれの顔のなかに父親の顔を見ているということはありうる。ひらめきと持続するアスペクト、そして考えることはいかなる関係にあるのか。この点は、以降でウィトゲンシュタインを悩ませることになる。そこで、この論点をもう少し詳しく論じた箇所をみておきたい。

> アスペクトを保持するためには、努力しなければならないかのように、わたしには思える。だから、アスペクトとは行為（Tun）の状態かのように思える。それゆえ、鐘を鳴らしつづけるためには、何度もくり返しその鐘をつかねばならないかのように思える。（MS136 p.108b, 19481.14）

「鐘を鳴らす」という比喩的な表現が用いられている。これが表しているのは、考えること（鐘をつくこと）によってアスペクトがひらめく（鐘が鳴る）ということであろう。そして、そのアスペクトを保持するためには、鐘を何度もくり返しつかねばならないかのようだと言う。要するに、かれの顔のなかの父親というアスペクトを保持するためには、父親のことをくり返し考えなければならないということである。

これは「行為の状態」と呼ばれている。「考える」「想像する」が行為に類するものとされていたことは、すでに確認した。問題は「状態」が何を意味するのかであるが、かれの念頭にあるの

はやはり、「見る」も含まれるところの、意識状態ではなかろうか。つまり、考えることはアスペクトをひらめかせるが、そのアスペクトを持続させるためには、絶えず思考を働かせることによって「見る」という意識状態を保持しなければならない。これが、アスペクトのひらめきとそれ以降も持続するアスペクトに関する、少なくともこの時点での、かれの理解であろう。しかし、「行為」と「意識状態」という異なるカテゴリーは、どのように両立しているのか。この点には、まだ不明瞭な部分が残されていると言わざるをえない。

しかも、ひらめきの後に持続するアスペクトを表現するのに、「残光」「思考の残響」という言い回しが用いられていたことから推察するに、かれがこれらの表現で言おうとしていたことは、おそらく、鐘を何度もつきつづけることではないだろう。一度鐘をついただけでも、その音は消え残って響いていると言おうとしていたのではなかろうか。「行為の状態」という位置づけでは、かれの見立てともずれが生じているようにみえる。この点には、MIV-4 で戻ることになる。

１項４　「見る２」は「見る」なのか

さて、「見る２」には、「考える」の要素が多分にあることがわかったが、それならば、「見る２」はむしろ「考える」ことだと言うべきなのか。要するに、アスペクトについて「見る」という語を使うことの正当性はどこにあるのか、という根本的な問いである。かれはこの問題に、「視覚印象――[83]わたしが言っているのは、ある特定の対象を眺めている（anschauen）ときに、自分はそれを見ているとひとが語るところのものである――は、どのように叙述されるべきなのか」（MS136 p.105b, 1948.1.13）を考察することで答えようとしている。

まず「見る１」の場合には、すでに確認したように、われわれは「一枚のスケッチを描くか、あるいは一つのモデルをつくるか、または言葉やしぐさによって記述を与えることができる」（MS136 p.102b, 1948.1.13）。なかでももっとも正確な記述は、精密な模写であろう。そして、同様に、「アスペクトに対する『見る』という語は、われわれが見ることのできる仕方で示される模写が存在する限りで、正当化される」（MS136 p.119a, 1948.1.16）。この定式化の眼目は、「把握している」「みなしている」（傾性）とのちがいを明確にすることである。

たとえば、ひどい癖字の手紙を読んでいて、そのなかに単なる線にしか見えない箇所があったとする。ただし、文脈に照らせば、それは「F」であると解釈できそうだといった場合があろう。そのとき、その線の塊をわたしは「F として見る」ことはできておらず、「F とみなしている」だけだと言える。もしここで、何を見ているのかと問われれば、その線を模写するであろうが、それを「F」と結びつけることはできていない。

もし「F として見ている」のだとすれば、そのことが模写にも現れるはずだと、ウィトゲンシュタインは考えている。

> しかし、ここでひとが見ているものは、その判じ絵を正確に模写するのだが、その線は特別な順序で描かれるということによっても叙述されよう。（MS136 p.106a, 1948.1.13）

---

[83] 手稿において、ここはコンマで区切られるのみだが、読みやすさのためにハイフンを挿入した。なお、つぎのハイフンは手稿にも書かれている。

異なる模写（異なる結果）をわたしがつくりだすということは、見ている状態（Sehzustand）という概念と合致する。同じ模写をわたしはつくるが、別様につくる——異なる順序で線を引く——ということは、考えるという概念を指し示している。（MS136 pp.112b-113a, 1948.1.15, RPP2 369）

別のものを見ているときには、その模写は当然ながら異なり、また、模写が異なるということは、異なるものを見ているということを示唆する。これは、「見る１」の場合には、たしかに言えそうである。そして、これを「見る２」にも敷衍したのが、同じ模写ではあっても別様につくるというアイディアだと言えるのではなかろうか。たとえば壷にも向き合った二人の人物の顔にも見える「ルビンの壷」を模写するとする。その模写は、壷として見ているときも、横顔として見ているときも、同じになるだろう。しかし、もし壷として描こうとすれば、まず壷の上辺をまっすぐに引いてから、壷の側面に当たる曲線を描くであろうし、ひとの横顔として模写しようとすれば、顔の輪郭に当たる曲線を頭から首に向けて描きはじめて上下の直線は最後に引くであろう。

つまり、模写をつくるということが「見る」という語の使用を正当化する。ただしそれだけでは、「見る１」と「見る２」のちがいが現れない。そこで、その際の手順のちがいにおいて、アスペクトを特徴づける「考える」という側面が現れるというわけである。

１項５　まとめ——二つの「見る」の新しい配列

以上の考察は、こうまとめることができよう。

「わたしはその図をいまは……として見ている」とわたしがかれに伝えるとき、多くの点で視知覚と似た伝達をしているのだが、また、把握、解釈、比較、あるいは知と似た伝達もしているのだ。（MS136 p.114b, 1948.1.15, RPP2 378）

「として見る」（「見る２」）は、一方で「見る１」、すなわち視知覚と似たことを伝える。それは、模写が可能であることによって、正当化される。当然ながら、何を見ているのかと聞かれて、つねに模写をもって答えるわけではないであろう。先にも確認したように、スケッチやモデル、また言葉やしぐさによっても記述を与えることはできる。しかし、模写によって、要するに色とかたちによって、自分の知覚を伝えることが、少なくとも可能である必要はあり、またその限りで、「として見る」ことは「見る」の範疇にあると言える。

他方で、もしこの質問に言葉でもって答えるとすれば、ウサギ-アヒルの図をウサギとして見ている場合とアヒルとして見ている場合には、答えは当然ながら異なるものになろう。そして、もしそれを「ウサギ」として見ているとすれば、その絵とウサギというその絵自体には含まれない別のものとを関係づけているということである。換言すれば、その絵はウサギとしても把握できるなどと「考える」、あるいは、実際のウサギを「想像」する、二本の突起は耳と比較できると「解釈する」ことでもありうるだろう。またさらに、目の前にあるのと別のものについて考えたり、想像したりすることが可能であるためには、それらを「知って」いなければならないということも、先に確認した通りである。あの図がウサギのように見えると言うひとがいれば、そのひ

とは当然ながら「ウサギ」というものについて知っていることになる。

したがって、「として見る」が何を伝達するのかという点において、視知覚の伝達に近い側面と、把握、解釈、比較、さらには知の伝達に近い側面があると言える。そしてこのように、複数の、しかもカテゴリーの異なる諸概念[84]とも類似性があるということが確認できれば、「として見る」「そのように見る」といった表現をどう扱えばよいのかという問題にも、解決がみえてくる。

> それは……の限りで、見るということである。
> それは……の限りでのみ、見るということである。
> （わたしにはこれが解決であるように思える。）（MS136 p.119b, 1948.1.16, RPP2 390）

「それは……の限りで、見るということである」とは、換言すれば、「それはどの程度、見ることなのか」（PI2 xi182, cf. LW1 638, 642, 646）を明らかにすることである。そしてそれによって達成されるのは、「見る２」が関連する心理学的諸概念の系譜のどこに位置づくのかということ、要するに、この概念の新しい配列である。これが、ウィトゲンシュタインが提示した解決である。

ただし、以上の考察で、かれは完全に満足したわけではない。そのことは、「いまわたしが誤りを犯す場所には、論理の欠陥がある」（MS136 p.104b-105a, 1048.1.13）、「（なおくり返し、わたしは深刻な論理的誤りを犯す！）」（MS136 p.108a, 1948.1.14）といった、自分の考察に関するメタコメントが散見される[85]ことから推察される。

しかしながら、どこに誤りがあるのかを、かれは直接的には述べていない。それでも、これらのコメントの前に何が書かれているのかに注目すると、以下の二つの論点について、かれが不満を感じていることが推測できる。すなわち、一つはアスペクトとは「思考の残響である」というアイディア（cf. MS136 pp.104b-105a, 1948.1.13, 106b, 1948.1.14）（１項３参照）であり、もう一つが、見られたものの記述としての「模写」という考え方（MS136 p.106b, 1948.1.13, p.117a, 1948.1.15）（１項４参照）である。かれのコメントはほのめかしの域を出ておらず、そのどこが誤りなのかは判然とはしない。しかしながら、以降の考察を読み進めると、たしかにこの二つの考えをかれが修正していることが読みとられる。次項では、この点を解明していきたい。なお、その際ポイントになるのは、「想像する」という概念だろうと、かれは予感していたようである。

> でも、アスペクトを見ることと想像することとの比較によって、どのくらいのことを得られたのか、わたしはまだ確信していない。その比較は、わたしには重要に思えるのだが。（MS136 p.110a, 1948.1.14）

84　「見る」は状態、「把握する」「知る」は傾性、「解釈する」「考える」は行為とされていた。「比較する」は特段分類されてはいないが、これが二つのものの部分がどのような関係にあるかを考えるといった過程であることを考慮すれば、おそらくは行為に分類することができよう。

85　他には、「わたしの誤りが論理的な種類のものだということの証拠は、わたしが概念の哲学についてよく考えているときに、その現象がわたしの前に現れるということだ」（MS136 p.106b, 1948.1.13）、「わたしは無数の混乱した問いを立てる。この森を通り抜けることができますように」（MS136 p.117a, 1948.1.15, CV p.77）などがある。

２項　IV-4：残された問題

前項で扱った MIV-2 において、ウィトゲンシュタインは心理学的概念の系譜を二つの「見る」の分析に適用し、「として見る」「そのように見る」という概念を扱うためには、「それはどの程度、見ることなのか」（PI2 xi182, cf. LW1 638, 642, 646）を考察する必要があるという結論に至った。その後三週間ほど、心理学的概念の系譜に関する考察に戻った後（MIV-3）、かれはふたたび、アスペクトを見るというテーマに取りくんでいる（MIV-4）。その課題は、MIV-2 で残された問題、すなわち、「思考の残響」と見られたものの記述としての「模写」という二つの論点について、より適切な分析をすることである。

この問題を解くための補助線になるのは、アスペクトを見ることのできないひと、いわゆる「アスペクト盲」は何を失っているのかという問いである。結論を先に述べれば、それは「空想力（Phantasie）」（MS137 p.26a, 1948.3.3, RPP2 490）、「想像力（Vorstellungskraft）」（MS137 p.30a, 1948.3.8-9, RPP2 508）である。以下では、まずアスペクト盲に関する考察を追い、それを手がかりに上記の二つの論点にどのような修正が加えられたのかを述べたい。

２項１　アスペクト盲は何を失っているのか

まず「アスペクト盲（aspektblind）」あるいは「形態盲（gestaltblind）」がどう定義されているのかを確認したい。それは、「あるものをあるものとしてけっして見ないひと」（MS137 p.24a, 1948.2.19, RPP2 478）とされている。定義はこのように単純であるが、これが具体的にどのようなことを言っているのかを理解するのは、それほど簡単ではない。

ウィトゲンシュタインがはっきりと述べていることは、つぎの二点である。すなわち、一つは「かれは諸々の像に対してわれわれとは異なる態度をとる」（MS137 p.24b, 1948.2.19, RPP2 479）ということ。もう一つは、「あらゆる像の立体的なアスペクトが、あるひとにとってはつねに固定したままなので、そのひとはアスペクトの転換を見ることがないということは、当然ながら想像できる。しかし、この仮定はわれわれの興味を引かない」（MS137 p.24b, 1948.2.19, RPP2 480）ということ。もう少し具体的に言えば、アスペクト盲とは、ウサギ-アヒルの反転図形がウサギにしか見えないために、ウサギがアヒルに転換する瞬間を見ることのできないひとではない。そもそもそれを「動物のあたまの像として見ることがなく、したがってわれわれによく知られたアスペクトの転換を見ることもないひと」（MS137 pp.24b-25a, 1948.2.19, RPP2 482）のことである。

では、このような事態は、どのような能力の欠如によって生じるのか。それを理解するには、子どもと「それはまたこのようなものでもありうる」というゲーム（cf. MS137 pp.33a-b, 1948.3.10-14, RPP2 535, PI2 xi205, 206）をするという場面を先に参照するのが、有益であるように思われる[86]。ウィトゲンシュタインは具体的な場面を詳細に描くことはしていないが、つぎのような状況を想像するのが、かれの考察を理解する助けになるのではなかろうか。

たとえばテーブルを「いまからこれを宇宙船にしよう！」と言って、実際にそれが宇宙船であるかのような芝居をする。要するに、ごっこ遊びである。この遊びには、宇宙船のドアの位置を

[86]　ウィトゲンシュタイン自身は、アスペクト盲の議論をある程度固めた（cf. MS137 pp.24a-25a, 1948.2.19-20, RPP2 478-483）後で、このゲームを参照項として挙げている（cf. MS137 pp.33a-34a, 1948.3.10-14, RPP2 535-538）。

決めて、そこからしか出入りしないようにするということも含まれよう。当然ながら「ドア」の位置以外からもテーブルの下に入ることはできるが、この子はそうしないし、われわれにも同じことを求める。

しばらくして、別の子どもがやってきたとする（元々いた子を一子、後から来た子を二子と呼ぶ)。ところが、二子は「ドア」の位置ではなく、別のところからそのテーブルの下に入ってくる。一子は「だめだよ！そこは壁なんだから」などと言うかもしれないし、ひょっとしたら「いまわたしたちはこのテーブルを宇宙船として見ているんだよ」と言って[87]、説明するかもしれない。それでも二子がこれをよく理解せず、宇宙船に適した芝居をすることがなければ、この子には何かしらできないことがあるのかもしれないと、われわれは考えるだろう。

では、二子にはどのような能力が欠けているのか。結論は、アスペクト盲同様に「想像力」ということになるが、これを理解するために、適した芝居ができないというのがどのような状況なのかを、もう少し考えてみたい。まず、一子が何を言っているのかが二子にはまったくわからない様子で、ゲームに少しも参加できないという場合が考えられよう。このケースでは、テーブルが宇宙船でもありうるということが、二子にはそもそも理解できない。しかしながら、ウィトゲンシュタインがアスペクト盲として関心を寄せているのは、このようなケースではなく、おそらくつぎのようなケースである。二子は「ドア」の位置を度々まちがえるので、一子は「ドア」の位置に目印をつける。すると二子は、その印を確認してから行動するようになる。さまざまな設定ごとに、二子はいちいち確認する必要があるので、ゲームはスムーズには進まない。

このようなふるまいは、アスペクト盲のひとがとる態度について、「われわれが青写真に対してとる態度かもしれない」（MS137 p.24b, 1948.2.19, RPP2 479）と形容されているのとも合致するであろう。設計図に書かれた特定の図形について、教えられれば、それを外開きのドアとみなすべきだ等ということは、わたしにもわかる。それでも、わたしはその図形を「ドアとして見ている」わけではない。わたしにとって設計図の図形が描かれた通りの図形でしかないように、二子にとってはそのテーブルはテーブルでしかない。換言すれば、テーブルが宇宙船でもありうるというゲームに「活き活きと参加している」（MS137 p.33b, 1948.3.10-14, RPP2 536）一子に対して、二子は印をいちいち読みとる必要があるということだ。

さて、二子にできないこととは何か。それは、そのテーブルを「想像の世界で囲む（umgeben）」（MS137 p.30b, 1948.3.8-9, RPP2 511）ことだというのが、ウィトゲンシュタインの考えである。

> 同じものが何かしら別のものを表しているのなら、そこには別のフィクションが織りこまれている。（MS137 p.33b, 1948.3.10-14, RPP2 535, cf. PI2 xi205）

一子は、目の前のテーブルを、たとえば宇宙旅行という想像の世界で囲み、その世界の一部として、テーブルを扱う。二子にないのは、この能力、つまり、フィクションの世界を想像し、その世界のなかに、現実の対象をフィクションに登場する何かしらとして位置づける能力である。

87　ウィトゲンシュタインは、このゲームにおいて子どもが自発的に「として見る」という表現を用いる可能性に言及している。cf. MS137 p.33b, 1948.3.10-14, RPP2 536

ウサギ-アヒルの反転図形を動物のあたまとして見ることのできない、アスペクト盲のひとが失っているのも、これに類した能力だと考えられる[88]。ただし、この図形に関してのみならず、アスペクト盲については全般的に、具体的で詳細な記述が少ないため、手掛りとなる記載を拾い集めて、一つの解釈を描いてみたい。

三つの具体例に注目したい。まず、アスペクト盲のひとは「立体的なものの絵を、そのようなもの〔立体的なもの〕として見ることはできないであろう」(MS137 p.24b,1948.2.19, RPP2 479)という例が、一つ。また、このひとは「走っているひとの絵を運動の絵として見ることはできないであろう」(MS137 p.25a, 1948.2.20, RPP2 483)という例が、二つ目。最後に、ある三角形 a を倒れたものとして見ることを生徒に教えるための方法として、その三角形 a の横に倒れる前の三角形 b を書き加えるというやり方が提示されていること(cf. MS137 pp.25b-26a, 1948.2.20, RPP2 487)の三つである。このうち、もっとも要点がみてとりやすいのは、最後の例である。

「倒れている」とはまずもっていかなることかと言えば、あるものが地平に対して横向きになっているということ、場合によってはこれに加えて、それが以前は地平に対して縦向きであったということであろう。換言すれば、「転倒している」と言うことができるのは、問題の対象が特定の空間的、時間的な文脈にある場合に限られるということである。三角形の事例において提示されたのは、この文脈づくりを補助する方法の一つだと言えよう。すなわち、三角形 a と b を空間的、時間的に関係づけることを通じて、三角形 a が位置すべき空間の構成、時間的変化の文脈を、生徒が見てとることを期待しているのである。

この事例を確認すれば、残りの二つについても、解釈の方向性は自ずと決まってくる。すなわち、それらのアスペクトを見るためには、目の前の対象をいまとは異なる空間的、時間的な文脈のなかに位置づける必要のあるケースなのだと言える。立体的なものの絵を立体的なものとして見るという一つ目の事例は、絵が描かれている二次元空間から三次元への置きなおしが必要である。二つ目の事例である運動の絵も同様で、静止画である絵を、時間的な変化のなかに位置づけることができなければ、それを運動の絵として見ることはできない。つまり、ここで必要な能力とは、現実とは異なる文脈に見ているものを置きなおすための想像力なのだという結論になる。この解釈によって、アスペクト盲が念頭にあると思われる[89]事例の多くが、解釈可能になる[90]。

88　子どものごっこ遊びとアスペクト知覚は、同じではなく「類縁性がある(*verwandt*)」(MS137 p.34a, 1948.3.10-14, RPP2 537)ゲームだと、ウィトゲンシュタインは慎重に述べている。

89　以下で挙げるすべてのケースに「アスペクト盲」「形態盲」という文言があるわけではない。本文で挙げた諸事例に類するケースを含んでいる。

90　まず、空間的な関係の想像が必要なケースには、絵や文字といった紙の上に描かれたものを、特定の空間構成のなかに位置づけなおす必要のある事例が含まれる。

・「F という文字はどちら側を向いているか、その文字のどこにたとえば鼻を描けばよいのか」(MS137 p.20b, 1948.2.14, RPP2 464)

・「わたしはいまそれを頂点として見る――いまはこれを〔頂点として見る〕」(RPP2 483, cf. MS137 p.25b, 1948.3.3

・「立方体を、あるときは立てられた箱として、あるときは横になった箱として見ることができないひと」(MS137 p.26a, 1948.3.3, RPP2 490)

・側面と底面のアスペクト。これらのアスペクトに盲目であったとすれば、そのひとには何が欠けているのか。――想像力(Vorstellungskraft)と答えることは無意味ではない。(MS137 p.30a, 1948.3.8-9, RPP2 508)

つづいて、時間的な関係の想像が必要なケースは、静止画を運動の絵として見るという先述の例に

まとめとして、ウサギ-アヒルの反転図形のケースをみておきたい。先にも確認したが、このケースにおけるアスペクト盲とは、その図形を「動物のあたまの像として見ることがなく、したがってわれわれによく知られたアスペクトの転換を見ることもないひと」（MS137 pp.24b-25a, 1948.2.19, RPP2 482）である。このひとには何ができないのか。本項の結論にしたがえば、この図形を紙上とは別の空間に位置づけることである。この図形を「ウサギ」として見るためには、まず、それが右側を向いている、右が前に当たるという空間構成のなかに、この図形を置かねばならない。紙自体にはもともと前後という関係があるわけではないから、ここで新たな空間を想像する必要があるということだ。加えて、この線で描かれた図形と、目の前にはいない「ウサギ」との関係性を見いだす必要もある。このときおそらくは、左に伸びた二本の突起は「耳」に当たる、あるいは似ている等々といった仕方で、紙上の図形と「ウサギ」とを、目の前にある机や紙とは別の位相で、われわれは結びつける。これらを成し遂げるためには、想像力を必要とする[91]

アスペクト盲が「もし欠如であるとすれば、それは視感覚ではなく、空想力（Phantasie）の欠如ではないか」（MS137 p.26a, 1948.3.3, RPP2 490）というウィトゲンシュタインの見立てに、以上の解釈はうまく合致するものと思われる。

ただし、以上の解釈がうまくいかない事例がある。筆頭は、かれの顔にかれの父親を見るケースである[92]。というのも、この事例では、かれの顔を別の空間や時間的変化のなかに置きなおすということがどういうことになるのか、よくわからないからである。かれの顔と父親の顔が合成される過程を想像し、その変化過程の一つの極として、かれの顔を位置づけるという説明も不可能ではないだろうが[93]、これに説得力があるようには思えない。というのも、合成途中の顔といったものを、われわれは思い描くことができないからである。先の運動の絵の場合には、前後の文脈に位置するはずの身体のかたちを、不正確にではあっても提示することができようが、かれとかれの父親が五割ずつ合成された顔を思い浮かべることは、われわれには相当困難である。類似性を見ることをどう扱うのかという問題は、裏を返せば「見る２」の多様な事例をどう整理するのかという問題の一つであり、これも二次手稿で解決される課題となる。

２項２　二つの問題の解消

アスペクト盲とは想像力、空想力の欠如であるということが確認できれば、前項で残された二つの問題にも解決の道が開く。その問題とは、アスペクトとは「思考の残響である」というアイディア、および、見られたものの記述としての「模写」という考え方であった。これらの論点について、ウィトゲンシュタインはどのような修正をしているのか。

加え、「わたしはこの顔のなかに、恐怖を見る」（MS137 p.37a, 1948.3.24, RPP2 552）といったケースも、ここに含められるのではなかろうか。というのも、「表情とは、こう言うことができよう、表情の動きにおいてのみ存在する」（MS136 p.103b, 1948.1.13, RPP2 356）と言われている。つまり、時間的な変化を前提してはじめて、表情を見ることも可能になるということである。

91　またそれゆえ、意味盲のひとも、写実的な絵ならばわれわれと同様に見ることができる。というのは、「写実的なイヌの絵をそのようなものとして認識するためには、それ〔空想力〕は必要ない」（MS137 p.31a, 1948.3.8-9, RPP2 513）からである。

92　ウィトゲンシュタインは、アスペクト盲を定義したこの時点では、この種の事例について語っていない。しかし後でもみるように、アスペクトに気づかないひとが見てとらないものの典型として、二人の顔が似ていることを挙げている（cf. MS137 pp.37b-38a, 1948.3.25, RPP1 556）。

93　『ラスト・ライティングス１』では、このような想定への言及がある。cf. LW1 149

一.　模写

まず、後者の「模写」という考えから確認したい。「模写」がどうして取りあげられたのかということから思いだせば、「見る２」において「見る」という語が使われることを正当化するためであった。そして、「アスペクトに対する『見る』という語は、われわれが見ることのできる仕方で示される模写が存在する限りで、正当化される」（MS136 p.119a, 1948.1.16）というのが、かれの解答だった。しかしアスペクトの場合、正確な模写のなかには、わたしがそれをどのようなものとして見ているのかは表現されない。そこで至った結論とは、「同じ模写をわたしはつくるが、別様につくる――異なる順序で線を引く」（MS136 pp.112b-113a, 1948.1.15, RPP2 369）ことに、アスペクトの「考える」側面が現れるというものであった。

このアイディアは、われわれの実践にもある程度即しているように思えるが、ウィトゲンシュタインはこの考えにふたたび触れることはない。そのことが示唆するのは、このアイディアには、どこかしら誤りがあるか、少なくとも不十分な点があるとかれが考えているということであるように思われる。

では、「模写」の代わりになるアイディアとは何か。どのような人物について、あのひとはそれを「このように見ている」などと、われわれが言うのかという問いに答えることで、かれは自分の考えを修正しているようにみえる。そしてこの問いには、アスペクト盲の解釈を通じて、すでに片がついている。というのもこの問いは、「見る２」をわれわれのように使うことができないひと、要するにアスペクト盲とは、どのような人物なのかのかという問いと、表裏一体だからである。

つまり、この問いへの答えとは、スムーズな立ち居ふるまいができるひとということになる。テーブルが宇宙船でもありうるというゲームを思いだしてみれば、「ドア」の位置からいつも出入りするといった芝居がスムーズにできる一子については、この子はテーブルを宇宙船として見ていると、われわれは言うだろうが、この芝居がうまくできない二子については、われわれはそうは言わないだろう。そして、「として見る」「そのように見る」についても、同様のことが言える。

> さまざまなものでもって、いわば、芝居を演じることができるということは、「いまわたしはそれを……として見ている」という言葉でもって、われわれが意味しているのと同じことを、そのひとも意味しているということの、われわれにとっての条件なのである。（MS137 p.34a, 1948.3.10-14, RPP2 537）

> その図のさまざまな応用が自在にできるひとについてのみ、かれはそれをいまはそのように、いまはこのように見ていると、ひとは言うだろう。（MS137 p.25b, 1948.3.3, RPP2 485, PI2xi222）

ウサギ-アヒルの反転図形について、これが単なる線と点にしか見えていないひとに、二つの見え方を教えるとする。相手が、ウサギのまねをしたり、「ウサギの口」側にエサを書き加えたりすれば、このひとはこれをウサギとして見ていると、われわれは言う。それに対して、ウサギは耳が

長いのだからここが耳のはずで、耳の前方に眼があるはずだなどと推論する、いわば青写真に対してわれわれがとる態度と似たようなことをするひとがいれば、このひとはこれをウサギとしては見ていないのではないかと疑われる。

つまり、対象に対する態度のちがいに、それをどのように見ているのかは自ずと現れるということである。『探究』第 II 部では、「態度（Einstellung）」という表現を用いて、特定のふるまいをすることと「見る」との関係がよりはっきりと述べられている。

> 「それはわたしにとっては、矢で射抜かれた動物である。」わたしはそれをそのようなものとして扱う。それはその図に対するわたしの態度なのである。このことが、この場合を見ると呼ぶことの意味なのである。（PI2xi193, LW1 665）

あるシルエットの絵がある。それは、鳥のあたまを描いており、その首の前後からは細い棒が延びているとする。その絵は、鳥の背後に棒があると見ることもできるし、鳥が矢で射抜かれていると見ることもできる。このような絵に対して、「残酷だ」と言う、顔をしかめて目を背けるといった態度をとるひとがいれば、そのひとはこれを矢で射抜かれた鳥として見ているということが、自ずとわかる。

つまり、対象に対してある特定の態度をとるということは、そのような態度が適切であるようなものとして、対象を見ているということと不可分な関係にあるということである。それは、裏を返せば、意味盲のひとは「諸々の像〔絵〕に対して、われわれとは異なる態度をとる」（MS137 p.24b, 1948.2.19, RPP2 479）という特徴にも沿うものだと言えよう。

二.　思考の残響

残る問題は、「思考の残響」というアイディアである。この論点は、MIV-4 において、つぎのように捉えなおされている。

> さて、その絵をたとえば小鳥として、ずっと前からわたしは認識していた、それからいつもそのようなものとして見ている。ここで、こう問うことができよう。見ているというこのことは、先の突然の認識の際にはじまったことの帰結にすぎないのか。それとも、その急性の見ることとは、慢性的な見ていることとは別の体験なのか。――ふたたび、困惑する。――（MS137 pp.14a-b, 1948.2.8）

たとえば千鳥格子を、以前はチェック柄の一種として見ていたのだが、あるとき小鳥を模したパターンなのだと気づく。それからはずっと、それを小鳥として見ているといった状況であろう。そしてここで問われているのは、千鳥格子のなかの小鳥を突然認識すること、ここでは「急性の見ること」と呼ばれているが、つまりはアスペクトに気づくこと、ひらめきは、その認識以降その柄を見るときにはそれを小鳥として見ているという、「慢性的な見ていること」とはどのような関係にあるのかということである。

「ふたたび、困惑する」と述べられていることに鑑みても、これは、「思考の残響」（MS136

p.104b, 1948.1.13)、「行為の状態」(MS136 p.108b, 19481.14) と同種の問題が、再考されていると解釈できよう (本章１節１項３)。たとえばかれの顔がだれに似ているのかということに気づくまで、何人かの顔を考え、想像し、かれの顔の特定のパーツに注意を向ける[94]といった行為をする。そしてあるとき、かれの父親の顔を想像すると、二つの顔のあいだの類似性がひらめく、いわば鐘が鳴る。それからしばらくは、かれの顔にかれの父親の顔を見るという状態を保持することができるが、そのためには、かれの父親の顔をくり返し想像しつづけるといった努力、要するにその鐘をくり返しつくことが必要であるように思えるということである。

アスペクト盲の考察を経たことで、かれの考えはどう変わるのか。まず、「『さあ、その図形を五分間……として見よ』と、むろんひとは言うことができる」(MS137 p.34a, 1948.3.10-14, RPP2 539) と、アスペクトが持続可能な状態であるということは、はっきりと認める。ただし、「これが意味するのが、その図形をこのアスペクトのまま、平衡を保っていろということであるのなら」(MS137 p.34a, 1948.3.10-14, RPP2 539) と、但し書きをつけている。問題は、「平衡を保つ」とは、どういうことなのかということである。その手がかりは、つぎの記載にある。

> 類似性がわたしの「注意を引く (auffallän)」とき、その類似性を見はじめるようになる。そうすると、わたしがその類似した対象を見ている限りで、わたしは類似性を見ているのか。それとも、わたしがその類似性を意識しているあいだのみ、わたしは類似性を見ているのか。——類似性がわたしの注意を引くならば、わたしは何かしらを知覚している。しかし、その類似性に変化がないということを知覚するために、わたしがその類似性を意識したままでいる必要はない。(MS137 p.37b, 1948.3.24, RPP2 555)

注目すべきは、ハイフン以降である[95]。まず、顔のある特定のパーツに注意を向ける。そうすることで、目の前の顔とかれの父親の顔が似ているということに気づく。問題は、それからしばらく、かれの顔のなかにかれの父親を見るという状態がつづいている場合であるが、そのとき、その類似性に注目しつづけるよう努める必要はないというのが、ここでの答えである。行為の必要があるのは、たとえばかれの祖父を思いだしたことで、かれは父親より祖父に似ていると気づく、要するに新しい類似性を発見する場合である。そのときには、注目や想像といったことがふたたび必要であろう。しかしそうでない限り、類似性をくり返し意識するような必要はない。これが一つのアスペクトの「平衡が保たれている」ということだと考えられる。つまり、一旦そこに類

---

94 「注意」という論点が、IV-4 において新しく加えられた。「あるアスペクトは、だれかがそれにわたしの注意を喚起することによって、わたしにみえてくる (erscheinen) ようになることがありうる。このことによって、このように「見る」ことは、色やかたちを知覚することからなんとはっきり区別されることか！」(MS137 p.10b, 1948.2.7, RPP1 442) といった記載がみられる。

95 ハイフンの前の二つの問いかけには、ハイフン以降とは異なる立場が表現されている。まず、「わたしがその類似した対象を見ている限りで、わたしは類似性を見ている」ということは、かれの顔にかれの父親の顔を見ることは、かれの顔を見ている限りつづくということであろう。しかしたとえば、かれの顔を見ているうちに、かれの父親ではなく、祖父に似ていると気づく場合というのを考えることができるが、この立場では、こうした、アスペクトが変化する可能性を扱うことができない。そして、「わたしがその類似性を意識しているあいだのみ、わたしは類似性を見ている」というのは、類似性を意識するために父親の顔をくり返し想像するといった仕方で、努力しつづける限りで、アスペクトは保持されるという考えであろう。これは、以前のウィトゲンシュタインの立場である。

似性を発見したのなら、新たな気づきがない限り、そのアスペクトは変化せずにが保たれるということである。

ごっこ遊びができない子どもの例にひきつけて考えると、より理解が深まる。対象を一旦想像の世界で囲めば、われわれはそれに、一定の態度をとりつづける。テーブルを宇宙船として見ている一子は、この位置がドアだなどといちいち考えることはなく、自然にそのフィクションのなかで適切なふるまいをする。そして別の世界を見いださない限りは、彼女はその芝居をつづけることができるだろう。

アスペクトのケースもこれと類比的だと考えられる。すなわち、目の前にあるのとは別の可能性を考えることを通じて一旦アスペクトがひらめけば（急性の見ること）、それはある特定の文脈で囲まれる。そして、新しい可能性が見いだされるまでは、そのアスペクトはその文脈に置かれた状態が保持される（慢性的な見ること）ということである。

3項　二つの「見る」のちがいに関する成果と課題

以上、MIV-2, 4 の思考を追った。その最後に位置するのは、「見る」の二つの用法のちがいである。

> 「わたしは……を見ている」という報告の二つの用法。一つ目の言語ゲーム。「きみはそこに何を見ているのか」――「わたしが見ているのは……」、そして見られたものの、言葉による、また、スケッチ、モデル、しぐさ等を通じた記述がつづく。――もう一つの言語ゲーム。われわれは二つの顔を観察しており、わたしが別のひとに向かって、「これらの顔のなかに、わたしは類似性を見る」と言う。
> 前者の言語ゲームにおいて、その記述は、たとえば「父と息子のように、互いによく似た二つの顔をわたしは見ている」と言うことでもありえたであろう。――これを、スケッチによる記述よりもずっと不完全な記述と呼ぶことができる。しかし、より完全なこうした記述〔スケッチ〕をするのに、にもかかわらずあの類似性には気がつかないというひともいよう。最初のひとのスケッチを見て、そのなかに家族的類似性を発見するひともいるかもしれない。そして、同じような仕方で、表情の類似性も発見するかもしれない。（MS137 pp.37b-38a, 1948.3.25, RPP2 556, cf. PI2 xi111）

MIV-1~4 において、色やかたちに使われる「見る１」と「見る２」のちがいはどこにあるのか、すなわち新しい用法に関する問い丙が取りくまれてきた。これは、その総括と言ってよかろう。では、MIII-3 において示された二つの「見る」から、どのような進展があり、新しい用法に関する問い丙にどのような解答が与えられたのか。そして、残された課題とは何か。MIV1~4 の成果を織りこみながらこの記載（以下、『心理学の哲学２』の節番号「556 節」にて表記する）を読解することで、これらの問題を明らかにしたい。

まず、「見る１」の変遷は、556 節にも読みとることができる。ここでは「見る１」のゲームとして、「よく似た二つの顔をわたしは見ている」という言葉と、スケッチによる記述が挙げられている。この言葉による記述がどのような類似性について語っているのかは明示されてはないが、

これがスケッチによる記述よりも不完全であるとされていることに鑑みれば、精密な写真によってもっともよく再現されるであろう顔の目鼻立ちのことだと、考えてよかろう。

MIII-3 の時点では、「よく似た解剖学的構造」（MS135 p.87, 1947.7.25, RPP1 1068）は、「一枚のスケッチによる記述」（MS135 p.19,1947.7.15）によって答えが与えられるとされていた。しかし、その後「見る１」の記述として、スケッチのほかにもモデルや言葉、さらにはしぐさも加えられ、見られたものの記述に、より多様な可能性を認めるようになる（cf. MS136 pp.102b-103a, 1948.1.13）。この変化は、556 節にも引きつがれており、「見る１」について、スケッチだけでなく言葉による記述が挙げられている。しかしそうなると、二つの「見る」のちがいがどのように示されるのかというのは、より深刻な問題になる。

556 節では、「見る２」として、実際の二つの顔、あるいは「見る１」のより完全な記述であるスケッチ「のなかに、類似性を見る」という表現が提示されている。ここまで、「見る２」には以下のようないくつかの「見る」の用法が挙げられてきた。まず、「よく似た表情」を見てとること（MS135 p.87, 1947.7.25, RPP1 1068）、また、二つの仕方で見ることのできる図をどのように見ているのか（MS136 pp.102b-103a, 1948.1.13）、いわば「そのように見る」「として見る」の用法、そして 556 節でも挙げられている「これらの顔のなかに、わたしは類似性を見る」こと。アスペクト盲の考察を通じて、「見る２」に分類されるのは、目の前の対象をいまとは異なる空間的、時間的な文脈のなかに位置づける必要のあるケースだという方向性は示されているものの、いまだ十分な整理は成されていない状況だと言える。この問題は、二次手稿に先送りされる。

では、556 節の後半は何を述べているのか。それは、どのようにアスペクトがひらめくのかということである。ここでは、詳細な記述はされていないが、MIV1~4 の成果を踏まえながら、その過程を具体的に考えてみたい。

二人の顔を眺めていると、たとえば眼に注意をひかれ、二人の眼を交互に凝視し、比較する。そして少し引いて、二つの顔全体を眺めてみると、その二つの顔が、親子のように、似ているのだと気づく。この過程において、眼に注目するということは、二人の眼のあいだにどのような関係があるのかを「考える」ことであろう。またときには、顔と目の大きさのバランスが二人でちがうのは、一方のひとが太っているからだろうと「解釈」したり、では痩せていたらどうなのかと「想像」したりすることで、やはり似ていると気づくこともあるだろう。表情の場合には、さらに複雑で、まずもってある顔が「笑顔」でありうるためには、その特徴が、解剖学的構造に依るのではないということを「知って」いる必要がある。またときには、その表情に適切なストーリーを「想像」し、そこに二人の顔を位置づけることもあろう。そして、驚いて「お二人はよく似てますね」と言ったり、これ以降二人に対して親子として接したりといった態度をとるとすれば、それは、二つの顔に類似性を「見ている」ということを示している。

したがって、「二つの顔の類似性に気づいた」と言うことは、「多くの点で視知覚と似た伝達をしているのだが、また、把握、解釈、比較、あるいは知と似た伝達もしている」（MS136 p.114b, 1948.1.15, RPP2 378）ということである。それは換言すれば、この概念を心理学的概念の系譜のなかに位置づけるためには、「それは……の限りで、見るということである」（MS136 p.119b, 1948.1.16, RPP2 390）の空欄を埋めねばならないということである。そしてそれによって、この概念の新しい配列が見いだされるのである。

４項　まとめ——MIV-1~4 の準備稿における位置づけと『探究』第 II 部への影響

以上、MIV-1~4（MS135 p.146-MS137 p.38a, 1947 冬~1948.3.25）の考察を追った。この時期のウィトゲンシュタインは、二つの「見る」の概念的なちがいがどこにあるのか、新しい用法に関する問い丙に関する考察を展開したと解釈することができる。そして、この問い丙への解答を試みる過程は概念的探究、すなわち、心理学的諸概念の系譜づくりからはじまり、関連する各概念との比較を通じて、アスペクトに使われる「見る」を心理学的諸概念の系譜のどこに位置づけるべきなのか、その新しい配列を探究する試みであったとまとめることができよう。

その思考は、556 節に総括された。この節は、『探究』第 II 部では、アスペクトを扱う xi 章の冒頭（111 節）に置かれることになる。このことから推察されるのは、アスペクトを見るという主題については、準備稿の段階で思考が完成したというより、出発地点に到達したと言う方が適切であろうということだ。

またここで残された課題は、三つある。まず、本文でも触れたように、「見る２」にはいくつかの異なる事例が混在しており、それらのあいだの関係が十分には整理されていないこと。

そして、二つの「見る」に関する概念的考察、つまり新しい用法に関する問い丙が、どのような哲学的問題を解くために必要とされたのかを、明示することである。というのも、思いだしてみれば、新しい用法に関する問い丙は、「体験する」が当初の考察対象であった。意味に対して使われる「体験する」は、われわれがこれまで学んできた用法、色や音に対して使われるのとは異なる新しい用法であり、二つの「概念的なちがいをわれわれは述べねばならない」（MS136 p.149, 1947.12.8）というのが、最初の課題であった。そしてこの課題を引き継ぐかたちで、二つの「見る」のちがいに関する考察は開始された。MIII-3 で確認したように、ケーラーらに帰された立場とかれの立場とのちがいをはっきりさせるといった目的はあったものの、「見る」という表現に内在した哲学的な問題が何かということは、必ずしも明確ではなかったと言える。

最後に、「体験する」の新しい用法について、明らかにすることである。いま述べたように、この問いは MIV 冒頭で立てられてはいたが、ここまで回収されないまま残されている。

３節　MIV-5：他人のこころに関する不確実さ

MIV-1~4 の考察が二つの「見る」にまとめられた直後（1948 年 3 月 25 日）から、およそ二ヶ月間、ノートへの記載はない。その後、考察が再開される 5 月 28 日から夏ごろまで（MS137 pp.38a-76a）、ウィトゲンシュタインは、新たな問いに取りかかっている。

> 「かれのなかで何が生じているのか、わたしはけっして知ることがない。」——しかし、かれのなかで何かしら生じていると、きみが言わねばならないのはなぜなのか。（MS137 p.38a, 1948.5.28）

痛みや怒りから見るや考える、さらには理解するや信じるまで、こころに関連する概念について、われわれはもっぱら、他人の場合にはそのこころのなかに何が生じているのかはわからず、自分

自身の場合にはそれを知っていると、言いたくなる。ウィトゲンシュタインは、この考えは哲学的な混乱の一種であるとして、心理学の哲学テキスト群以前にも考察してきた。ただしここで主題化されているのは、この考えがいかに混乱しているのかではなく、こうした考えに至る一歩手前の段階についてだと言えよう。すなわち、そもそも他人のこころについて考えるとき、相手のなかに何かしらが生じていると、われわれが言いたくなるのはどうしてなのか、ということである。

これまで本稿でみてきた考察のなかにこの問いを位置づけるとすれば、多義語を理解する際に、こころのなかに何が生じるのかという問い甲をどうしてわれわれは立てるのか（６章２節）と言い換えてもよかろう。また、先には十分に展開されていなかった、他人のこころと身体の関係（μ）という主題の再考とも言える（６章３節３項）。

１項　他人のこころに関する不確実さはどこから来るのか

> 「かれのなかで何が生じているのか、わたしはけっして知ることがない。」――しかしそれならば、何かがかれのなかで生じなければならないのか。――そして、わたしがそれを当然気にかけるはずだというのはなぜなのか。――それでも、この像がわれわれに示唆するのは、夢想された不確実さ（Unsicherheit）ではなく、現実の不確実さなのである。（MS137 p.39a, 1948.5.28-29, RPP2 561）

他人のこころは外からは隠されていて、けっして知ることができないというのは、混乱した像の一種である。他人のこころとはその表情やふるまいという身体的な表現によって描かれることの可能なものであり、またそういった表現に、推論など経ずに、われわれは他人のこころの状態を「見る」（cf. MS137 p.44a, 1948.6.1, RPP2 570）ことができる。これは、すでに６章でも確認したことである。しかしそれが意味するのは、他人のこころに対する疑いが、哲学者の夢想にすぎないということではない。こうした不確実さは「現実の」ものだというのが、ここからの考察にとってはポイントになる。

「かれのなかで何が生じているのか、わたしはけっして知ることがない」と、哲学するときではなく、日常的な場面で言うとき、われわれはそもそも何を表現したいのかということをまず考えてみたい。それは、かれは信頼できない（cf. MS137 p.60a, 1948.6.14, RPP2 602）ということであろう。かれはふりをしているかもしれない、真実を告白していないかもしれないという疑いが生じることは、実際にある。このような不確実さは「実践的かつプリミティブなもの」（MS137 p.38b, 1948.5.28-29, RPP2 558[96]）であり、内的な過程に疑いを向けることは「本能的なふるまい」（MS137 p.58a, 1948.6.30, RPP2 644）なのだとさえ、ウィトゲンシュタインは言う。

当然ながら、「内的なものがわたしには隠されているように思えるというのは、極めて特殊なケースであって」（MS137 p.38b, 1948.5.28-29, RPP2 558）、「恒常的な不確実さ」（MS137 p.39b,

[96] タイプ原稿では 558 節の二文目に入れられているが、手稿では 560 節の後に書かれている。それゆえ、この考察を書いた当初、かれが「実践的かつプリミティブ」な不確実さが表現されていると評したのは、「ひとがわたしにとってときに透明であったり、ときに不透明であったりする」（MS137 p.38b, 1948.5.28-29, RPP2 560）ことだと考えられる。

1948.5.28-29）ではない。このような懐疑がつねに可能であると考えるところに、哲学の混乱は生じたのではあるが、同時に、他人のこころに関する確信のできなさは、たしかにわれわれの現実、いわば自然の事実に根ざしている。では、「この概念的な不確実さは、どんな自然の事実に関連しているのか」（MS137 p.39b, 1948.5.28-29）。

> 感覚の表現として明白な人間のふるまいというものがありえようし、また、ふりの表現として明白な、それとはまた別のふるまいというものがありえよう。そしてそのあいだには、確実でない領域がある。わたしが思っているのは以下のようなことだ――一方の表現に対してひとはこのようにふるまうし、もう一方の表現に対しては別様にふるまうということが起こる、そして、中間的な領域では不確実になる。（MS137 p.52a, 1948.6.21）

たとえば、おいしいという感覚がはっきりと表現されているふるまいというものがあり、また、おいしい「ふり」だということがはっきりとわかるふるまいがある。そしてそのあいだには、あいまいな領域がある。また、そうした相手のふるまいに応答するふるまいもある。たとえば、おいしそうなふりのふるまいを相手がすれば、われわれは別の料理を勧めるといったふるまいを返す。そして相手が、はっきりしないふるまいをすれば、われわれは「かれが内心でどう感じたのか、わたしにはわからない」などと疑いを表明したり、「かれは『おいしい』と言っていたけど、あれはふりをしていただけかもしれない」と言ったりするだろう。このように、あいまいなふるまいというものを、われわれが実際にするという事実のなかに、他人のこころに対する確信のできなさが位置づく領域がある。

他人のこころにまつわるわれわれのふるまいとして、このような理解は常識的なものにみえる。ただし、ウィトゲンシュタインの考察にとって重要なのは、このような事実が、われわれの概念の形成にどのように寄与しているのかということである（γ）。

> 十分なしるし（Evidenz）は、境界線なしに、不十分なしるしへと移行する。この〔「ふりをする」という〕概念形成の自然の基盤は、人間の状況の複雑なあり方と多様性にある。
> それゆえ、多様性が極めて乏しい場合には、明確な境界をもった概念形成が自然に思えよう。（RPP2 614, cf. MS137 pp.52b-53a, 1948.6.21[97]）

たとえば、何かを食べたあとの表現として、反応 A と反応 B の二つしかない人びとがいたとする。レストランで客が A をすればそのひとは代金を支払うが、B のときにはその客は料理のつくりなおしを要求している。ここでは、あらゆるケースが明確に二つに分類でき、第三のケースも中間的なケースも存在しない。そうであれば、味覚を表す言葉としても、たとえば「A」の一語と否定辞があれば、すべての状況が明確に記述できることになる。

また、こうした状況では「A のふりをする」という概念も存立しないだろう。というのも、「ふりをしている」と評されるのは、たとえば一見おいしいと感じているように見えても、その表情

97 「概念形成」という語は、手稿において、前者は「特別な概念」、後者は「概念意味（Begriffbedeutung）」であったが、タイプの際に変更された。主題との関連が明確になるよう、タイプ原稿を引用した。

に不自然なところがあるとか、箸がすすんでいないといったように、「おいしい」の典型からはずれているからである。要するに、明確に分類できないあいまいなふるまいが、可能でなければならない。ところが、先の人びとのあいだには、この種のふるまい自体がない。つまり、明確な境界線を引くことのできるようなところでは、「ふりをする」という概念も成立しえないのである。

それに対して、われわれの言語においては、「おいしい」という一言をとっても、その表情や抑揚は無数にあり、どこからどこまでが本当の表現なのかに境界線を引くことなどできない。しかも、顔の表情や食べ方等々、「おいしい」にまつわるふるまいもまた、数えあげることができないほどにある。それらの無数のふるまいが多層的に関連しあった「人間の状況の複雑なあり方と多様性」のなかに、「おいしい」や「味覚」、さらには「おいしいふりをする」といった、他人のこころの「不確実さ」も成立する。

要するに、「『不確実さ』というのは、個別のケースに関連するのではなく、方法に、しるしの規則に関係する」（MS137 p.65b, 1948.7.3, RPP2 682, Z555）ということである。

> 「でも、痛みを外見に基づいて確実に認識することはできない。」——ひとはそれを外見にのみ基づいて認識することができる。かつ、その不確実さは法的なものなのである。その不確実さというのは、欠陥ではない。（MS137 p.60b, 1948.6.30, RPP2 657）

他人が痛みを感じているのかどうかに不確実さが残るのは、それが外見から完全には知ることのできない内側に隠れているからだと、一文目の発言をしている人物は言いたい。それに対してウィトゲンシュタインは、「ひとはそれを外見にのみ基づいて認識することができる」と言う。たしかに、血を流しながらのた打ち回っているひとがいれば、そのひとが本当に痛みを感じているかなど、少しも疑問はもたない。ふるまいが明確なケースでは、通常そこには少しも疑義は生じないのである。もし他人の痛みについて確信がもてないとすれば、痛みが原理的に隠されているからではなく、そのひとのふるまいがあいまいだからである。そして、その不確実さというのは、他人の痛みを見てとるための「十分なしるしは、境界線なしに、不十分なしるしへと移行する」（MS137 p.52b, 1948.6.21, RPP2 614）こと、そうした「しるしの規則」（MS137 p.65b, 1948.7.3, RPP2 682, Z555）に依る、その意味で「法的なもの」なのである。

2項　不確実さを記述するための新しい概念世界

ここから、ウィトゲンシュタインの課題はつぎの段階へと進む。

> 心理に関する不確実さを記述するための新しい概念を、わたしはつくりださねばならない。（MS137 p.64a, 1948.7.2）

こころに関する不確実さを記述するために必要なのは、「人間の状況の複雑なあり方と多様性」（MS137 pp.52b-53a, 1948.6.21, cf. RPP2 614）を表現することのできる「新しい概念世界」である。そのためにかれが用いるのは、織物とそれを構成する「図柄、パターン（Muster）」という比喩である。

その最初のアイディアは、「言葉と行為は結びつけられ、しばしば布地の縦糸と横糸のように織りあわされている」（MS137 p.41b, 1948.5.28-29）というものだった。その後「図柄」（ただし当初は、布地のパターンではなく金属細工の図柄）という比喩を、ウィトゲンシュタインは頻繁に用いるようになる。

> 一つの行為をわれわれが判断するのは、人間の生活におけるその行為の背景に基づいてである。そしてこの背景は単色ではなく、ある非常に複雑な金銀線細工の図柄として想像することができる。（MS137 p.54a, 1948.6.22, RPP2 624）

あるひとのふるまいについて、たとえば「おいしい」と感じているのか、そのふりなのかを判断するという個別的な一つのケースをとっても、自分が生まれるずっと以前から無数にくり返され、また自分もその一部として参加している、食べることにまつわる諸活動のすべてを背景にして、それは成立している。その背景とは、満足しているときの表情とはどのようなものかといったことから、いま食べているのは一般に「おいしい」とされるものなのかどうか等々、「言葉と行為」が織りあわされた、恐ろしくさまざまなことが、「複雑な金銀線細工の図柄」のように、関係しあっている[98]。

こうした複雑な無数の「図柄」が重なりあってできあがっている、金銀線細工や織物として、われわれの概念世界を理解しようというのが、ウィトゲンシュタインのアイディアである。では、そうした複雑な織物という世界のなかに、不確実性はどのように位置づくのか。

> ある概念が生活の図柄（Lebensmuster）に依っているのだとすれば、その概念には不確実さがあるはずだ。というのも、ある図柄が通常から逸脱している場合には、われわれがここで何を言うべきなのかも、疑わしいものになるからである。（MS137 pp.59b-60a, 1948.6.30, RPP2 652）

「おいしい」と感じていることが明らかなふるまいというのは、たしかにいくつかある。われわれは、生活のなかでそうしたふるまいをたびたびするし、多くの場合でわれわれがするのは、そうした明らかなふるまいである。それはいわば、「おいしい」の典型的な図柄である。しかし、われわれは、先の二つしか表現をもたない人びととは異なり、非常に多様で複雑なふるまいをする。それゆえ、ときに図柄は典型から外れ、それを「おいしい」の図柄の一種と判断すべきかどうかは疑わしくなる。これが、こころに関する不確実さとして、織物のなかに位置づくわけである。

この「生活の図柄」というアイディアは、この後さらなる精錬を経て、『探究』第 II 部 i 章に組みこまれることになる。

98　われわれの言葉と行為が無数に重なりあう、このような状況を言い表すために、「雑踏」という表現もかれは用いている。「その背景とは、生活の雑踏であり」（MS137 p.54a, 1948.6.22, RPP2 625）、「『雑踏』という概念にはすでに、不確実さを生みだす」（MS137 p.54a, 1948.6.22, RPP2 626）と言う。しかしながら、この「雑踏」という表現は以降使われなくなる。

3 項　まとめ――準備稿における MIV-5 の位置づけと『探究』第 II 部への影響

以上、MIV-5 の考察を確認した。テーマは、他人のこころに関する不確実さである。まず考察されたのは、その源泉についてであり、それはわれわれの生活の多様性と複雑さであった。もしわれわれのふるまいが明確に分類でき、あいまいな領域がなければ、不確実さが登場する基盤もないのである。そしてウィトゲンシュタインは、この不確実さを描くために、「生活の図柄」というアイディアを導入している。典型的な図柄から大きく外れた場合には、われわれは確信をもって判断することができない。ここに、不確実さが位置づけられるというわけである。

以上の考察は、準備稿においては、他人のこころと身体の関係（μ）の再考として位置づけることができる。アスペクトに関する議論に目処が立ってからおよそ二ヶ月の空白期間が置かれた後に、この考察が再開されていることに鑑みても、準備稿における自身の考察を振りかえり、展開が不十分であった主題を補足したものと推察される。しかしながら、この考察の過程で導入された「生活の図柄」というアイディアは、われわれの生活と概念とが織りあわされている様子をわかりやすく描いており、ウィトゲンシュタインの言語観を表現する新しい概念となったと言えよう。このことは、『探究』第 II 部において、「生活の図柄」に関する節が冒頭の i 章に置かれることからも推察できる。

９章　総括――準備稿において何が達成されたのか

準備稿以降の展開を先取りすれば、補足的な考察にひと月ほど取りくんだ後、ウィトゲンシュタインは『探究』第 II 部の構成に取りかかることになる（MS137 p.106b, LW1 272~)。その直前、かれは自分の仕事をつぎのように振りかえっている。

> さて、以上の考察すべてで、わたしはいったい何を達成したのか。
> 概念の説明において、その像の代わりにその使用法を置いたということである。（MS137 p.106a, 1948.11.23, LW1 271）

「以上の考察すべて」がどこまでを指すのか、はっきり示されているわけではないが、この記載の直後から第 II 部へ向けた執筆が開始されることに鑑みれば、その予備的考察である準備稿（MSS130 中盤～137 前半）が念頭にある、少なくとも、言及される範囲に含まれることは、まちがいなかろう。換言すれば、本稿の成果に基づいてこの一文を十全に理解することができるかどうかが、本稿の解釈の妥当性を判断する試金石になるということである。以下で、その検証を行いたい。

１節　「概念」の射程

「概念の説明において、その〔概念の〕像の代わりにその〔概念の〕使用法を置いた」とは、何を意味するのか。それを理解するために最初に考えるべきは、「概念」ということで具体的には何が考えられているのかということであろう。それはまず、ここまで考察の主たる対象であった、意味体験（多義語の意味（β2）と意味感覚（δ））として語られた「意味を体験する」「しかじかの意味で聞く」「意味する」、とりわけその過去形、そして、アスペクト（ε）として語られた「として見る」「そのように聞く」などだと考えてよかろう。さらには、これらが位置づくためのより広い枠組みとして提示された心理学的諸概念（ι）も、射程には収められていると考えられる。

そして、たとえば「として見る」という概念の説明とは、何が「として見る」という語で呼ばれ、何が呼ばれないのかを明らかにすることだと考えればよかろう。

２節　像による概念の説明

１項　何が問題であったのか

まず、像による概念の説明とは何かということから確認したい。しかしそのためには、どんな問題を解決するためにそのような説明法がとられたのかを、はっきりさせねばならないであろう。

その問題とは、ある語をしかじかの意味で聞いた、あるいは意味したというのは、本物の経験なのかであった。なぜなら、「わたしはあのときその語をしかじかの意味で聞いた」「その語はわたしにとってはしかじかの意味だった」等と言う場面で、われわれはつぎのジレンマに直面するからである。すなわち、一方では過去の時点に言及することによって、経験の表出はしているよ

うに思える。さらにその後展開された心理学的概念の系譜を踏まえれば、「聞く」という語は印象、感覚に分類される（８章１節１項）。しかしながら他方で、自分に思いだせるのは、ある音を聞いたということにすぎず、「意味」に当たる体験の内容を示すことはできないように思える。そうすると、この「意味する」や「しかじかの意味で聞く」と呼ばれているものが「本物の経験」なのか、疑問が生じるということである。

この問題を、そのときこころのなかに何が生じたのかという精神的な過程に関する問い甲に解答を与えることで解決しようとわれわれは考えたくなるが、この問いによって、われわれは絶望的な状況に立たされることになる。その過程はつぎのようなものであった。この問いに、そのときまさにこれ（表象像、稲妻のような速さの思考、独特の精神的過程）が生じる（解答 b）と答えようとしても、そのどれも、「意味する」が体験であるということを十分に説明することはできなかった。では、何も生じない（解答 a）という選択肢をとるべきなのかと言えば、そうではない。この考えには、われわれの言語活動を矮小化しているといった問題もあったが、より深刻なのは、解答 b の立場からの再反論を止めることができないということである。すなわち、「そのとき、表象像やわたしが言った言葉以外には何も、わたしは体験しない」と答えたところで、「やはりそれ以上の体験をする、意味は何らかの仕方で実際に目の前にある」等と返すことはつねに可能だからだ。そうなると、一方が主張をすれば他方が反論し、また再反論がくり返されるということにしかならない。つまり、この問いはいつまでも決着せず、「絶望的にくり返される」（MS130 pp.154-155, 1946.5.26-7.22）ことになる。この状況をウィトゲンシュタインは、つぎのように表現していた。

> 難問を深く捉えることは、難しい。
> なぜなら、浅く捉えれば、それは難問のままだから。難問は根ごと抜きとらねばならない。
> つまり、それらの事柄について新しい仕方で考えはじめなければならないということだ。
> （MS131 pp.48-49, 1946.8.15, CVp.55）

難問とは、体験の表出はあるにもかかわらず、体験の内容が見いだせないというジレンマであり、またそれゆえに容易には答えることのできない、それは本物の経験なのかという問いと解することができるだろう。そして、その浅い捉え方とは、そのとき自分のなかに何が生じるのか（精神的な過程に関する問い甲）に解答すれば、それが本物の経験なのかも明らかにできるはずだと思っていたことである。こうした問いの立て方では、結局、その問いは絶望的にくり返され、難問は難問のままにとどまるということが示された。

しかし、なぜこの問いはくり返されてしまうのか。それは、精神的な過程に関する問い甲が混乱した像に依っているからだというのが、ウィトゲンシュタインの見立てである。

２項　像による概念の説明とは何か

像による概念の説明について理解するために、まず、こころにまつわる像的な表現から振りかえりたい。その典型として、本稿では、「ハートで理解する」「あたまのなかで考える」といった身体に関する語彙を用いた表現から考察した。なぜこれらが「像的」と呼ばれるのかと言えば、

こころの状態を、こころとは異なる存在である身体の絵（像）によって描いているからである。たとえば考えるということは、あたまに手を当てる等の身体の絵によって描かれるが、そもそもそれがなぜ可能なのかと言えば、こうした身体のふるまいは、子どもの頃から習慣的につづけてきたふるまいであると同時に、「考える」という概念の基盤だからである。その意味において、こうしたこころの像は、「プリミティブ」と評することができる。そして、このプリミティブな像を誤解することによって、われわれは混乱に陥ることになる。

というのは、ここで使われている「ハート」や「あたまのなか」という言葉は、その文字通りの意味で、すなわち身体の一部を指す「心臓」や「脳」という意味で使われてはいない。しかしながら、われわれはこれが比喩的に描かれたにすぎないということには無自覚である。そのために、この「ハート」という言葉をその文字通りの意味にとって、共感的な理解は胸のうちに生じると解釈するならば、像的な表現を誤解して、混乱した像を描いているのである。このときわれわれは、「理解」という概念を像（比喩、イメージ）によって説明しているにすぎないと言えよう。

また、「わたしはあのとき、『ロッカー』という語でロック歌手の意味で聞いた」ということを説明するのに、たとえば「意味の萌芽を体験した」と表現するならば、われわれはここでも似たような仕方で混乱へと陥る。まず、この表現もまた、言葉を聞いたときの体験を「意味の萌芽」という像によって描く、比喩的な用法だと言える。しかし、もし自分が像を使っているにすぎないということに無自覚であれば、この表現を真に受けて、言葉を聞いたときには「意味の萌芽」と呼ばれる体験が自分にはあったのだと、誤解する。そして、そうした「体験」によって「しかじかの意味で聞く」という概念を説明するとすれば、それはやはり像による説明にほかならない。

３節　概念の使用法

１項　その表現はどのように使われているのか

では、どうすればこの絶望的な状況に至らずに済んだのか。それは、すでに示されていると言えよう。すなわち、「ハートで理解する」「意味の萌芽を体験する」といった表現は、像的な表現であって、その文字通りの意味ではない、新しい仕方で使われているということを、まずもって自覚する必要があるということだ。そのためには、そうした表現がどのような場面で、何のために使われているのか、要するに、それらの表現がどのように使われているのか（表現に関する問い乙）を検討することである。そうすれば自ずと、胸のうちに生じる理解や意味の萌芽体験を求める気持ちも起こらなくなるであろうし、そのとき何がこころのなかに生じたのかという、精神的な過程に関する問いに答えねばならないなどと思うこともなくなる。

つまり、「概念の説明において、その像の代わりにその使用法を置く」とは、本稿の成果を踏まえれば、そのときわたしのなかに何が生じたのか（精神的な過程に関する問い甲）から、それはどのように表現されるのか、また、その表現はどのように使われるのか（表現に関する問い乙）への転換ということになる。

しかし、ここにはまだはっきりさせるべき問題が残っている。それは、これまでわれわれが学んできた言葉の使われ方と新しい用法のちがいはどこにあるのか（新しい用法に関する問い丙）である。この問題を、ウィトゲンシュタインは二つの「見る」という概念で、展開した。

２項　新しい用法に関する概念的探究

主に色やかたちに対して使われる「見る１」と、表情や多義図形、二つの顔の類似性に対して使われる「見る２」のちがいはどこにあるのか。この新しい用法に関する問い丙に解答するために、ウィトゲンシュタインは「概念的探究」（６章２節）という手法をとった。それはつぎのような段階を踏んだ。まず、心理学的概念の系譜を作成すること、そして、その系図に依拠しながら、とりわけ「見る２」とその他の概念との類似性を見てとることである。こうした概念的探究の目的とは、「見る２」の適切な配列を見いだすことである。

心理学的概念の系図作成に当たって、「体験」の人称間にある非対称性や「経験」や「印象」「感覚」の持続など、重要な特徴も明確にされたが、「見る」の分析にとって注目すべきは、意識状態（を見る、を聞く）、傾性（知る、把握する）、行為（考える、解釈する、想像する）のちがいであった。

これらの心理学的概念の特徴を踏まえ、それらの諸概念と「見る２」とを比較し、それらのあいだにある類似性をウィトゲンシュタインは見てとるよう努めたと言える。その結果だけをまとめるとすれば、「見る２」は、対象に対する特定の態度に表れる限りにおいて「見る１」と似ている。また、目の前の対象と別のものとの関係を「考える」「想像する」という点においては、行為の側面がある。そして、別のものとの関係を考えることができるためには、それについて「知っている」必要もある。つまり、「『わたしはその図をいまは……として見ている』とわたしがかれに伝えるとき、多くの点で視知覚と似た伝達をしているのだが、また、把握、解釈、比較、あるいは知と似た伝達もしている」（MS136 p.114b, 1948.1.15, RPP2 378）ということである。それゆえ、「見る２」の適切な配列をみいだすということは、かれの言葉を引けば、「それは……の限りでのみ、見るということである」（MS136 p.119b, 1948.1.16, RPP2 390）の空欄を埋める作業だということになる。

この新しい表現に関する問い丙に関する考察が、これまでの議論とどのように結びつくのか、準備稿の時点では述べられていない。しかしながら『ラスト・ライティングス１』を先取りすれば、それはやはり「それ〔アスペクトの変化〕は本物の視覚体験なのか」という難問に対応するために、精神的な過程に関する問い甲に置き換えられるべき問いということになる。(cf. LW1 663, PI2 xi190)。つまり、詳細は次章で述べるが、問い甲から丙への転換が、「概念の説明において、その像の代わりにその使用法を置く」ことになるということである。

４節　まとめ――準備稿において何が達成され、どのような課題が残ったのか

以上、「概念の説明において、その像の代わりにその使用法を置いた」というウィトゲンシュタイン自身の総括を補助線に、「心理学の哲学」準備稿の大きな流れを振りかえった。具体的に言えば、「意味する」という概念を説明するのに、意味の体験が言葉に伴われているはずだという像にしたがって体験の内容を探すのではなく、「意味する」という語、とりわけ「あのとき……意味した」や「意味の萌芽を体験する」といった表現が実際にどのように使われているのか、その実際の事例をわれわれは思いだす必要があるということである。

本稿の定式化を用いれば、それはまず、精神的な過程に関する問い甲（そのときわたしのなかで何が生じるのか）によって、われわれは絶望的な状況に追いこまれるということを指摘し（MII-2, ５章２節）、この問いが混乱した像を前提に立てられていることを理解すること（MII-3, ５章３節）。以上が、概念の像による説明に関する考察と言えるであろう。そして、われわれが難問に直面するときにはしばしば、概念の像による説明が行われているのだということを理解するためには、そこでどのような表現が使われ、その表現が何のために使われるのか（表現に関する問い乙）を考察する必要がある（MII-3, ５章３節）。この考察から明らかになるのは、その表現が新しい仕方で使われているにもかかわらず、われわれはそれをこれまで通りの用法と取りちがえているということである。そこでウィトゲンシュタインは、この二つの用法がどのように異なっているのか（新しい用法に関する問い丙）を検討している（MIV-1~4, ７章１、２節）。以上は、概念の使用法に関する考察と言えるであろう。

つまり、準備稿に関するかれの総括、「概念の説明において、その像の代わりにその使用法を置いた」という一文は、精神的な過程に関する問い甲から、表現に関する問い乙、および新しい用法に関する問い丙への転換として理解できるのである。

そして、この転換を下支えしているのは、心理学的概念は、言葉と行為が織りあわされたわれわれの複雑な生活（cf. MS137 p.41b, 1948.5.28-29）に依っているという、ウィトゲンシュタインの基本的な考えである。それゆえ、たとえば「として見る」という概念を理解しようと思えば、われわれの生活において、「として見る」という語がどのように使われているのかを考察するのがもっとも適切なやり方ということになるのだと言えよう。

しかし、『探究』第 II 部へ向けたかれの考察は、準備稿で完成したわけではなく、課題も残された。先にも確認したが、それは三つある。すなわち、まず「見る２」として分析した諸事例（表情を見ること、「として見る」「そのように見る」、類似性を見ること）の特徴をはっきりさせ、それらのあいだの関係を整理すること。そして、二つの「見る」に関する概念的考察、つまり新しい用法に関する問い丙が、どのような哲学的問題を解くために必要であったのかを述べること。最後に、「意味を体験する」という新しい用法をどう理解すればよいのか、である。

３部　準備稿以降の展開

１０章　二次手稿の展開

TS232（『心理学の哲学２』）をタイプした後、1948 年 10 月 22 日から考察が再開される。翌 49 年の 3 月中旬まで考察は途切れることなくつづき、二ヶ月ほどのブランクの後、いくつかの考察を書きこんだところでノートは終わっている。これらのノート（MSS137 後半、138）は、『ラスト・ライティングス１』として死後出版された。また、これと同時期に書かれたと推察される小型ノート（MS169、『ラスト・ライティングス２』所収）[99]がある。以上の三冊のノートを本稿では、二次手稿としている。ただし、MS169 には日付が記入されておらず、まとまった考察というよりもメモ書きに近い印象で、箇条書きも散見される。またその後半は、編者も指摘するように[100]、むしろ『探究』第 II 部以降に展開される考察との関連が深い。以上を考慮すると、心理学の哲学テキスト群において展開された一連の思考の流れとしては、『ラスト・ライティングス１』が実質的な最後のテキストと言ってよかろう。

『ラスト・ライティングス１』で注目されるのは、272 節以降の考察の並べられ方である[101]。『探究』第 II 部の ii 章から xi 章、そして xiii 章に当たる考察が、おおむねその章立ての順番の通りに組みたてられていく[102]。つまり、ウィトゲンシュタインはここから、最終稿となる第 II 部の実質的な執筆の段階へと、作業を進めたと推察される。実際、『探究』第 II 部の下書きがこの後作成されることになるが（最終手稿 MS144）、その大半は『ラスト・ライディングス１』から載録されている[103]。そして、この下書きにさらに若干の編集[104]を加えてタイプされた原稿（TS234）が、現在の『探究』第 II 部ということになる。『探究』第 I 部完成からおよそ三年にわたる「心理学の哲学」が、ここに結実したと言ってよかろう。

『ラスト・ライティングス』の二次手稿という性格に鑑み、本章では、その思考の展開を逐一

99　これには日付が書きこまれておらず、作成時期について、いくつかの推測が立てられている。『ラスト・ライティングス２』の編者は、1948 年晩秋か 49 年の春には書かれはじめているとし（LW2, Editional Preface）、『探究』第 4 版では、MSl37 後半と同時期とされている（PI, Editional Preface to the Fourth Edition, p. x)。また、フォン・ライトは、 49 年 4 月から 5 月にかけてのウィーン滞在中に作成されたと推測している（vonWright(1982) p.134）。

100　cf. LW2 Editional Preface.

101　1~270 節は準備稿の補足に当てられている。言及されるのは、内観（ζ）、信じる（η）、アスペクトを見ること（ε）、意味体験（β2、δ）、および他人のこころ（μ）である。アスペクト、意味体験については、以降の展開と併せて本文でみる。また、残りの三つのテーマのうち、信じると他人のこころについては、準備稿の論点をさらに精錬したもので、ここで新たな論点が示されているわけではない。残る「内観」については、われわれが「内観」と思っていることの実質はどのようなものなのかという、新しい問題が考察されている。結論のみ述べれば、「とても記述とは呼べず、どんな記述よりもプリミティブな叫びが、にもかかわらず、こころの状態の記述という役割を果たす」（LW1 45, PI2 ix 82）ということになる。この考えを下支えしているのは、やはり、人間の身体は人間のこころの最良の像であるという洞察である。

102　i 章、xiv 章は途中に挿入される。また xii 章はすべて『心理学の哲学１、２』から載録された。

103　MS144 は、およそ計 377 節のうち 230 節が、『探究』第 II 部は、372 節のうち同じく 230 節が、『ラスト・ライティングス１』から採られた。

104　五節ほどが削除され、節の順番が変更された。

追うことはせず、準備稿で残された課題に関する考察を指摘するにとどめたい[105]。その課題とは、一.「見る２」に混在する諸事例を整理すること、そして、二. アスペクトを見るという主題の哲学的問題とそれがどのように解消されるのかを明らかにすること、三. 最後に意味体験の表現を理解することである。一は、二に答える過程で答えることができるため、まずこの二つの課題を併せて検討し（１節)、節を改めて三に解答する（２節)。

１節　アスペクトを見ることの哲学的問題とその解消

MIV-1~4 において、色やかたちによって再現可能なものを「見る１」と、それに対置される「見る２」(表情を見ること、「として見る」「そのように見る」、類似性を見ること）の概念的なちがいがどこにあるのか、新しい用法に関する問い丙が検討された。しかし、この問いの対象は当初、「意味を体験する」という表現であった。なぜこの表現が問われたのか、その思考の流れは以下のようになものであった。まず、意味に対して使われる「体験する」は、われわれがこれまで学んできた用法、色や音に対して使われるのとは異なる新しい用法だということである。そして二つの使われ方を混同すると、ときにわれわれは混乱した像をつくることになるということが、すでに MII において確認されていた。そして、この混乱に陥らないようにするためには、二つの「体験する」の「概念的なちがいをわれわれは述べねばならない」(MS136 p.149, 1947.12.8）からである。では、「見る」について概念的なちがいを述べる必要はどこにあるのか。

１項　アスペクトを見ることの哲学的問題とは何か

アスペクトを見ることにおいて「奇妙」(LW1 174）なのはどこなのかという、もっとも基本的なことが、まず再確認される。それは、「同じだ――そしてそれでも、同じではない」(LW1 174）という「パラドクス」(LW1 175）である。たとえば、それまでウサギとして見ていた図形が、あるとき突然、アヒルに見えるようになる。見ている図形、その色やかたちが変化していないことを、自分は十分にわかっている。しかしながらそれでも、いまわたしはそれをウサギではなくアヒルとして見ている。換言すれば、「図の視覚像に何かしら変化があるようにおもわれる、そしてそれでも、何も変化していない」(MS130 pp.115-116, RPP1 33)。このことは、すでに MI でも確認されていた（５章２節４項)。

ではまず、図の視覚像が「同じ」であるとは、どういうことなのか。MIV の考察を踏まえれば、色やかたちによって模写されうるものが、同一であることと考えればよかろう（８章２節)。それはまた、「幾何学的」「無時間的」(LW1 146, 152）な文によって、同じ記述がされうることである。たとえば「その絵はこの図を含んでいる」といった文は、特定の時点に言及しない（cf. LW1 478, PI2 xi128)。それに対して、アスペクトの変化を体験したときには、「いまこれはウサギだ」「わたしはいまそれをアヒルとして見ている」といった表現が使われる（cf. LW1 171)。それは、視覚体験の変化を示唆する。にもかかわらず、その変化の体験、すなわち、それがウサギ

[105]　本章の考察の趣旨に鑑み、『ラスト・ライティングス１』は節番号のみ指示する。『ラスト・ライティングス１』は、メタ哲学的コメントなどが一部載録されていないものの、手稿における考察の順序はそのまま再現されている。そのため、節番号のみでも、思考の前後関係を理解することは可能であると判断した。なお、『ラスト・ライティングス１』と手稿との関係は、菅崎(2014)にまとめた。

だったときの視覚体験といまのアヒルの視覚体験を分ける体験の内容を見いだすことはできない（cf. LW1 173）。それゆえここでも、われわれは「それは本物の視覚体験なのか」（LW1 663, PI2xi190）と問いたくなる。つまり、アスペクトを見るという主題においても、意味体験と同型の難問が生じるのであり[106]、この困難をどう乗り越えればよいのかを考察することが、課題となっていると言える。

この難問への対処法として、意味体験と同種の議論も展開されているが[107]、その主要な方法は、「われわれに興味があるのは、その〔「として見る」という〕概念と経験概念におけるその位置づけである」（LW1 435, PI2 xi115）と宣言されるとおり、「として見る」「そのように見る」といった表現に関する概念的探究である。

２項　二つの「見る」、再考

「見る」に関する概念的探究には、MIV の成果がかなり引きつがれているが、以下の節には、「見る」の新しい区別をみることができる。

> ウサギ-アヒルのあたまをウサギとしてわたしが見ているなら、わたしが見たのはこのかたちと色である。（わたしはそれを正確に再現する。）――それに加えてなお、つぎのようなことを。その際わたしは、たくさんの異なるウサギ像を示す。――これは概念のちがいを示している。（LW1 467, PI2 xi137）

ここで述べられているのは、二つの異なる場面で使われる「見る」のちがいではなく、「として見る」に備わっている「見る」の側面と、「見る」だけでは捉えることのできない側面のちがいである。そして、後者を示すために「ウサギ像（H(asen) Bild, Bild-H(asen)）」（LW1 467, 532）という語が使われている[108]。第 II 部では、より一般化した言い回しで「対象像（Bild- Gegenstand）」（PI2xi119）という表現も使われる。そしてこのアイディアによって、「として見る」の特徴が明確にされ、それに伴って、懸案だった「見る２」を整理することもできるようになる。

まず、色やかたちによって再現されるものと対比されていることに鑑みれば、この「……像」というアイディアは、「見る２」が担っていた特徴が反映されているものと推測できる。具体的に

106　たとえば、「あのとき、『したがって』という語を命令の意味で聞いた」という表現は、特定の時点に言及しており、その点において、経験の報告であることが示唆される。しかし他方で、命令の意味と接続詞の意味とを分ける体験内容は見いだすことができない。それゆえ、「ある語をしかじかの意味で聞く、あるいは考えるということは本物の経験だろうか」（MS130 pp.164-165, 1946.5.26-7.21, RPP1 105）と問われたのであった（５章１節）。

107　多義語の意味を理解するとは本物の経験なのかという問いについて、まさにこれが生じる（精神的な問い甲に対する解答 b）という答えが検討されたが、同様に、アスペクトについても、「内面の像（innern Bild）」（LW1 442, PI2 xi133）や、「わたしの視覚印象とは、やはりスケッチではない！それは、これなんだ。わたしが他のだれにも示すことのできないものだ」（LW1 440, PI2xi132）といった答えが、批判的に検討されている。また、アスペクトの転換が叫びによって表現されるといった指摘（cf. LW1 474, 468, 491, 549-553）は、それがどのように表現されるのかという表現に関する問い乙の考察と言える。

108　Bildgesicht, Bildmenschen といった言い回しは、MS137 pp.16a-18a ,1948.2.9-11 でも使われている。

言えば、「……像」とは、「もの」や「背景」を表現するための「その図自体の記述には属さない概念」（MS135 p.45, 1947.7.19）や、対象をどのように見ているのかを示すための「別のかたち」（MS136 pp.102b-103a, 1948.1.13）の後継概念ということになろう。

実際、「ウサギ像」とは何なのかと聞かれたら、「説明のために、わたしはさまざまなウサギの絵（Hasenbild）や、実物のウサギを示さねばならなかっただろうし、この動物の生活について語ったり、この動物のまねをしたりすることもできただろう」（LW1 532）と、ウィトゲンシュタインは言う。ウサギの絵とは、ウサギ-アヒル図形とは「別のかたち」であるし、ここに挙げられている説明は、要するに、ウサギとは何かということであり、「ウサギ」という概念の説明ではなかろうか。

そうなると考えるべきは、ここであえて「……像」という表現が使われた、そのポイントはどこにあるのかということである。まず、「像」ということでウィトゲンシュタインが何を言おうとしているのかを明確にしたい。

> つぎのような説明はどうか。「わたしがあるものをこれとして見ることができるのは、それ〔あるもの〕が〔「これ」として見られているその〕これの像でありうる場合である」。――でも、それは説明になっているのか、冗語なのか。――（LW1 601, ハイフンの前まで PI2 xi166）

「わたしがあるものをこれとして見ることができるのは、それがこれの像でありうる場合である」とは、「A（ウサギ-アヒルの反転図形）を B（ウサギ）として見る」ことができるのは、A（ウサギ-アヒルの反転図形）が B（ウサギ）の像でありうるからだということである。たしかに冗語のようにも聞こえるが、ポイントはまず、A を B として見るためには、目の前の対象（A）がそれとは異なる対象（B）と、関係づけられねばならないことではなかろうか。換言すれば、アスペクトを見るときには、われわれは「別の対象との内的な関係」（LW1 516, PI2xi247）を見ているということである。これまでも、「見る２」が別のものとの関係において成立していることは、何度か触れられていたが（８章２節）、ここで「像」という概念によって、明確な説明がなされたと言える。

そして、もう一つのポイントは、上の節につづけて言われている「でもそれが意味するのは、アスペクト転換におけるアスペクトとは、その図が状況次第では一つの像において、平衡状態で（*statisch*）〔そのようなもので〕ありうるアスペクトだということである」（LW1 602, PI2 xi166）という指摘に、手がかりがあるように思われる。ここで思いだされるのは、アスペクト盲について考察する際に言及された「それはまたこのようなものでもありうる」というゲーム（cf. MS137 pp.33a-b, 1948.3.10-14, RPP2 535, PI2 xi205, 206）である。同種のゲームに、ウィトゲンシュタインは『ラスト・ライティングス１』でふたたび言及している（cf. LW1 687-692）。ここで新たに強調されるのは、たとえばテーブルを宇宙船「として見ている」子どもにとって、いまそのテーブルは、それがテーブルであるということは「すでに忘れられ」、実際に宇宙船「である」「になっている」ということである。「思考の残響」に関する議論を踏まえれば（８章２節２項）、一旦「宇宙船」というアスペクトがひらめいたら、新たなストーリーにそのテーブルを置きなおす

までは、それは「宇宙船」のまま「平衡が保たれる（balancieren）」（MS137 p.34a, 1948.3.10-14, RPP2 539）ということである。

つまり、A（ウサギ-アヒルの反転図形）と B（ウサギ）は別の対象でありながら、それでも、アスペクト転換の後その平衡状態が保たれているかぎりは、A は、すなわち B なのである。「……像」というアイディアで、ウィトゲンシュタインが言おうとしているのは、こうした A と B との関係ではないだろうか。

準備稿を振りかえれば、この関係性がもっともストレートに現れていたのは、「人間の身体は、人間のこころのもっともよい像である」（PI2iv25, cf. MS131 p.80, 1946.8.20, RPP1 281, ６章３節１項１）という指摘である。たとえば、イヌを触ろうとしてびくびくと手を伸ばす子どものふるまい「のなかに」恐怖を「見てとる」ことができるのは、そのふるまいが恐怖というこころの像でありうるからだと言えるだろう。このとき、当然ながら、びくびくしたふるまい（A）と恐怖（B）は別のものである。しかし同時に、びくびくしたふるまいを見るということは、特定の身体運動を見ているということではなく、その子どもの恐怖を見ることなのである。

以上を踏まえれば、ここで直接的に言及されている「として見る」、またこれと同種である「そのように見る」と、表情を見ることは、あるものが別のものの像でありうるという性格を共有していると言えるだろう。やや異なるのは、類似性を見るというケースである。というのも、類似性とは、典型的には、「これら〔二つの対象〕のあいだに、わたしは類似性を見る」（LW1 180, cf. PI2xi111）という表現にみてとられるように、複数の対象間で成り立つ関係性である。それはむしろ、アスペクトをひらめかせるために必要な[109]「思考の対象」（MS136 pp.107b-108a, 1948.1.14）と理解する方が、適切であろう。たとえば、ウサギ-アヒルの反転図形の二つの長い突起とウサギの耳とのあいだで、類似性という関係が成立することを考えることで、「それをウサギとして見る」ことができるようになるといったことが考えられる。

３項　まとめ――アスペクトに関する難問をどう乗り越えればよいのか

アスペクトを見ることと「像」との関係が理解できれば、それは本物の視覚体験なのかという難問への解決も、自ずと示唆される。

A を B として見るということが A を B という別のものと関係づけることであるとすれば、そのために必要なのは、まずもって B について「知って」いるということ、またそれとの関係を「考えている」ことであろう。そして、B に適切な文脈を「想像する」必要がある場合もあろうし、とりわけ A があいまいな場合には、そこにある特徴を「解釈する」ことによって、それを B として見ることができるようになることもあろう。しかしながら他方で、A がもはや B「である」ということは、わたしはそれを B として扱い、B であるかのような態度をとることでもある。ここに、「この場合を見ると呼ぶことの意味」（LW1 665, PI2xi193）があると言えよう。

つまり、「ここで、たくさんのわれわれの概念が、交差する」（LW1 710, PI2 xi245）。このことを踏まえれば、アスペクトのパラドクシカルな性格に困惑したとき、われわれが立てるべきだったのは、もちろん、そのときわたしのなかに何が生じているのか（精神的な過程に関する問い甲）ではなく、この新しい「見る」という用法について、「それはどの程度、見ることなのか」（PI2

109　類似性を見ることがアスペクトをひらめかせるという論点は、山田(2015)に学んだ。

xi182, cf. LW1 638, 642, 646)、また「それはどの程度、考えることなのか」(MS136 p.119b, 1948.1.16) と問うことであろう。

「それは本物の視覚体験なのか。」
問題は、どの程度そうなのかということである。(LW1 663, PI2 xi190)

２節　意味体験の表現をどう理解すればよいのか

残る課題、意味体験の表現をどう理解すればよいか、という問題に移りたい。たとえば「その『はる』という言葉の意味は、動詞の『張る』である」という文は、その言葉の使用法について述べている。これは、われわれが学んできた「意味」の用法と言えるだろう。それに対して、「その『はる』という言葉を読んだとき、わたしはそれを季節の『春』という意味で体験した」と言えば、これは新しい用法である。

まず、この用法の「新しさ」はどこにあるのか。６章３節においてもすでに検討したが、『ラスト・ライティングス１』の記載に依って、このことをさらに明確にしたい。

いまわたしはその語を何かしら別のものに対して使っているのではやはりなく、別の状況で使っているのである。(LW1 57)

その新しい使用とはまさに、その古い表現が新たな状況で用いられること[110]において、成り立つのである。何かしら新しいものを指示するためではない。(LW1 61)

まず、その新しい用法を使うのはどのようなときかと言えば、たとえばある詩のなかの「はる」という言葉を読んだとき、さまざまな表象イメージをありありと思い浮かべたといったときであろう。つまり、この「『春』という意味で体験した」という表現は、一種の意味感覚の表明と言える。この表現によって「春」という言葉の意味に当たる体験が指されているわけではないのは当然だが、「春」という言葉が引き起こす独特の意味感覚という対象を名指すために使われているのでもない。そうではなく、この表現の新しさとは、「体験」や「感覚」について語る場面、それまで「意味」とは結びつけられることのなかった状況で、「意味」という言葉が使われているという点にある。このことは、準備稿でも指摘されていたことではある。それが、ここでなぜふたたび言及されるのかと言えば、意味盲とアスペクト盲との類縁性にある。

意味盲とは、「言葉を聞いたり、発したりする際の体験を語の意味という観点で見ることがない」(MS131 p.25, 1946.8.11) ひととされていた（６章２節２項３）。このひとにとっては、「春」という語を聞いたときに思い浮かべられた桜のイメージは、桜のイメージ以外の何ものでもなく、その体験が「春」という言葉の意味に結びつけられることはない。それゆえ当然ながら、「意味」

110　古い表現の意味が保持されたまま、新たな状況で使われるという特徴には、「二次的使用」という名称が与えられる。「二次的な使用法とは、その言葉が、それをとりまく新しい環境において、その一次的な意味で使われるということにおいて成立するのだ」(LW1 797)。

という語を使って、この体験について語ることもない。そして、アスペクト盲とは、目の前の対象を「想像の世界で囲む」（MS137 p.30b, 1948.3.8-9, RPP2 511）ことのできないひとであった（８章２節２項１）。このひとにとって、三角形は三角形でしかなく、それを「倒れているもの」として見ることはない。なぜかと言えば、そのように見るためには、図が描かれてある紙とは別の空間を想像し、そのなかにその図を位置づけねばならないからである。両者はともに、問題の対象を、いまとは別の、新しい文脈に置きなおすということができないひとだと言える。準備稿におけるこの二つの考察を踏まえれば、「『アスペクト盲』という概念の重要性は、アスペクトを見ることと言葉の意味を体験することの類縁性にある」（LW1 784, PI2 xi261）とウィトゲンシュタインが言うのも、納得がいく。

この二つの主題がどのような関係にあるのかを、『ラスト・ライティングス１』の考察を参照しながら、明らかにしていきたい。手がかりはふたたび、「夏目漱石」という名前は、かれの顔がいかにもかれらしいのと同様に、いかにも漱石っぽい気がするという事例である（cf. MS131 pp.150-151, 1946.8.30, RPP1 336, ６章３節２項３）。こうした「漱石っぽさ」を、われわれは「かれの名前はかれの作品にぴったりだ」といった仕方で表現する。アスペクトに関する考察を踏まえれば、これは「人名を肖像（Bildnis）として見る」（LW1 70）、よりわかりやすく言えば、かれの名前とかれの作品とを、ぴったり合うものとして見ることだと言える。どういうことかと言えば、そこでわれわれは、肖像に対して使われる「ぴったり合う（passen, そっくり）」という表現を、「夏目漱石」という名前とかれの作品という新たな文脈のなかで使っているということである。ここで新たに指摘されたのは、このときわれわれは、「ぴったり合うという概念の下、像の下に何か〔いまの例では「夏目漱石」という名前〕を見ている」（LW1 70）ということである。

そしてここに、混乱の引き金もある。まず、肖像に使われる「そっくり」が何を意味するのかと言えば、描かれた人物と絵とが、顔のパーツやその位置関係においてよく似ているということである。それに対して、「夏目漱石」という名前とかれの作品との結びつきは、われわれの習慣によってつくられたものであって、肖像が本人に似ているといった関係とは、根本的に異なる。にもかかわらず、肖像に対して使われる「ぴったり、そっくり」という表現を、まったく異なる状況、かれの名前と作品との関係について語るという新しい状況に、いわば越境して、われわれは使っているのである。このときの「ぴったり」という表現は、あくまで像（比喩、イメージ）にすぎず、事実を記述しているのではない。しかしこのちがいを自覚していなければ、名前とかれの作品とのあいだにあるはずの「ぴったり合う」という関係を、現実に存立している新しい関係性なのだと考えてしまう。しかしそれは、「いわば錯覚（*Tauschung*）、鏡像（Spiegel）」（LW1 69, cf. PI2 xi270, MS131 pp.150-151, 1946.8.30, RPP1 336）なのである。

同様のことは、「意味の萌芽を体験する」という表現についても、言うことができる。ここでわれわれは、言葉を聞いたときの体験（たとえば、表象像を思い浮かべること）を、「意味の萌芽」として見ている。つまり、「萌芽という像」（LW1 94）の下で、その体験を見ているということだ。それによって、萌芽とそれが将来育つはずの樹との関係が、言葉を聞いたときの体験と意味との関係に当てはめられてしまう。それによって、将来育つはずの意味を内包した体験、要するに意味の萌芽体験という新しい対象があるのだと考えたくなる。しかし実際のところは、植物に対して使われる「萌芽」という語が、言葉を聞いたときの体験について述べるという新しい文脈で用

いられているにすぎないのである。

３節　まとめ――二次手稿と準備稿の関係

二次手稿、とりわけ『ラスト・ライティングス１』において、ウィトゲンシュタインは『探究』第 II 部の執筆を開始し、またその過程において、準備稿で残された三つの課題に取りくんだ。すなわち、一.「見る２」に混在する諸事例を整理すること、そして、二. アスペクトを見るという主題の哲学的問題とそれがどのように解消されるのかを明らかにすること、最後に、三. 意味体験の表現を理解することである。

まず課題一については、「……像」という概念を検討することを通じて、解答した。その結果わかったのは、「A を B として見る」ことが可能であるためには、A は B と別の対象でなければならないということ、そしてにもかかわらず、アスペクトが平衡状態にあるときには、A は、すなわち B であるという関係にあるということであった。この特徴は、表情を見ること、「として見る」「そのように見る」に当てはまる。それに対して、類似性を見ることは、二つの対象を結びつけることであり、むしろアスペクトをひらめかせるために必要な思考であることがわかった。

そして、アスペクトを見るという主題の哲学的問題とは何か（課題二）と言えば、「それは本物の視覚体験なのか」という難問を解消することだと言えよう。これは、意味体験と同型の難問である。そして課題一において明らかになった特徴から、表情を見ることや、「として見る」ことは、一方では「見る」であり、また他方では「知る」「考える」「想像する」「解釈する」ことでもあることが、再度確認された。このことを踏まえれば、この難問に対して立てるべきは、「それは、どの程度見るなのか」という問いであったということがわかった。

以上の考察を、準備稿との関係において、位置づけるとすれば、MIV-1~4 で展開された二つの「見る」に関する概念的考察が収められるべき枠組みを定めたと言える。しかも、その枠組みは、意味体験に倣うかたちで整えられたことは、注目に値する。というのも、概念の像による説明からその使用法への転換という考察の流れが、アスペクトを見るという主題にも当てはまることが明確になったからである。

課題三、意味体験の用法を理解するためにまず確認されたのは、この用法の新しさとは、「意味」という言葉が、体験について述べるという新たな状況において使われていることにあるということである。そしてここに、意味体験とアスペクトを見ることの類似性がある。「意味の萌芽を体験する」を言うということがいかなることなのかと言えば、それはたとえばある表象像が思い浮かぶという体験を「意味の萌芽」として見ている、あるいは「意味の萌芽」という像の下で見ているということだからである。では、何を言うために、ウィトゲンシュタインは意味体験とアスペクトを見ることの類縁性についてここで述べたのか。明言されているわけではないが、それは、意味にまつわる像的表現から引き起こされる混乱が、たとえば「意味の萌芽体験」という不可思議な事実が存立していることに起因するのではなく、われわれが「意味」や「体験」をどのように見ているのかに起因するということではなかろうか。

以上の課題は、結局のところ、MII（６章）において考察された意味体験と、MIV（８章）のアスペクトに関する議論の関連を明らかにすることだったと言える。それはまた、「像」の解明で

もあったと捉えることができるだろう。そうは言っても、「像」で指されているものは、アスペクトと意味体験では、異なると言わざるをえない。アスペクトを見ることにおいて使われる「像」とは、「……像」という概念にはウィトゲンシュタイン独自の含意が込められているとは言え、基本的には見る対象である「絵」である。それに対して、意味体験において使われる「像」は、「イメージ」や「比喩」という意味に近いであろう。しかしながら、共通するのは、あるものが、それとはまったく別のものと、像によって結びつけられるという構図である。

以上で、準備稿で残されていた課題を確認することができた。つまり、『探究』第 II 部のコンテンツはそろったということである。次章では、それらがどのように組みたてられているのかを確認し、本稿のまとめとしたい。

１１章　『探究』第 II 部の構成と目的

準備稿から二次手稿までの展開を振りかえってみれば、『探究』第 II 部 ii～xi 章は、おおむねスレッドの登場順に並べられていることがわかる。その完成度に応じて、『ラスト・ライティングス１』の記載に置き換えられる節がほとんどであるような章もあるとは言え、準備稿での思考の順番が、『探究』第 II 部でも再現されたと考えてよかろう。

これらの章の内容をみるまえに、残りの i, xii～xiv 章がどのように構成されたのかを、先に述べておきたい。i 章の要点は、「『悲しみ』は、生活という織物においてさまざまなバリエーションでくり返される一つの図柄（Muster）をわれわれに記述している」（PI2i2, cf. LW1 406）という一文にある。「悲しみ」といった心理学的概念は、ある特定の生活、概念によっては、言語を使う生活（cf. PI2i1, LW1 358, 360, 365）のなかに現れる特定の身体的、言語的表現の型を記述するものだということである。そして、そうした型を指すために「生活の図柄（Lebensmuster）」という概念が導入されている[111]。ここで示されたのは、われわれの言語世界をウィトゲンシュタインがどのように捉えているのかということであり、それは要するに、心理学の哲学テキスト群のあらゆる言説が依って立つ基盤である。つまり、『探求』第 II 部の冒頭にこれを置くことで、まずは、以降展開される考察が収められる大きな枠組みを提示したということである。

ii~xi 章は後に回し、xii 章（生活形式と概念形成の関係（γ））から先に述べれば、これが後ろに置かれた理由も、i 章と似ている。xii 章の元になった考察は、MI（５章）ですでに完成していたが、その内容とは、われわれのいまの生活とは異なる生活を想像することによって、われわれの言語に関する新しい見方を提示するというかれの方法論を下支えする言語観とも言うべきものである。そのため、一通りの考察が終わったその後ろに置かれたものと推測できる。

そして、xiii 章（思いだす（λ））については、この主題がなぜここに置かれているのか、その内容上の理由は判然としない。しかしながら、準備稿における思考の流れにその考察は属しておらず、後から付け加えられた記載であること[112]を踏まえれば、この位置がそうした思考の生成の過程をそのまま反映しているとは言えるだろう。

残る xiv 章（心理学（θ））は、「心理学の混乱と不毛」（PI2xiv371, MS135 pp.53-54, 1947.7.20, RPP1 1039）に関するコメントであり、i 章同様、総論的な位置づけだと言える。というのは、心理学的概念に関する哲学的な問題を引き起こす一番の要因が、精神的な過程は内側に生じるという像であることはまちがいない。そして、「心理学とはこうした内なるもの〔われわれだけに見えて他人には見えないもの、したがってわれわれには身近でいつでも手が届くが他人にとっては隠されているもの、それゆえわれわれ自身の内側にあって自分自身の内側を覗きこむことでわれわれが気づくような何がしか〕に関する教説である」（MS133 pp.57r-v, 1947.1.11-2.12, RPP1 692）というのが、ウィトゲンシュタインの心理学に対する評価である[113]。

111　準備稿においては、「心理に関する不確実さを記述するための新しい概念」「新しい概念世界」（MS137 p.64a, 1948.7.2）として導入されたが（８章３節）、第 II 部において心理学的概念により広く適用された。

112　xiii 章は三つの節からなるが、そのうちの二節（368, 369）は、第 II 部の下書き原稿である MS144 において書きおろされた。残る一節（370）は、『ラスト・ライティングス１』（836-840）に起源があるものの、そこにおいても、考察は豊富とは言いがたく、突然挿入されたような印象である。

113　ウィトゲンシュタインが挙げる例に即して言えば、アスペクトを内的対象として扱うひと、「視覚

では、ii〜xi 章はどのように構成されたのか。先にも述べたように、『探究』第 II 部の章立てが、準備稿、二次手稿で扱われた主題の順番を再現していることに鑑みれば、同じ流れで理解することができるはずである。すなわち、ウィトゲンシュタインの言葉を借りて言えば、概念の像による説明から概念の使用法への転換、また本稿の定式化にしたがえば、精神的な過程に関する問い甲から、表現に関する問い乙、新しい用法に関する問い丙への移行である。

多義語の意味が体験であるという考えの提示（ii 章）から、議論ははじまる。これは要するに、精神的な過程に関する問い甲と、まさにこれ（表象像）が生じるという解答 b の提示である。つづけて、表象像によっては志向性が説明できないことが指摘される（iii 章）。以上は、問い甲の問題点の検証である。そしてここから、考察は新しい思考法の確立へと向かっていく。身体とこころの関係（iv, v 章）、そして言葉のこころというアイディアに起源をもつ、意味感覚の考察（vi 章）がつづく。これらの考察の眼目は、精神的な過程に関する問い甲を立てたくなる場面で、われわれがしばしば像的な表現を使っているということの指摘にある。たとえば「ハートで理解する」と言って心臓を指差すしぐさをするというのは、身体の像によってこころの状態を語る表現であり、「言葉の雰囲気」とは、意味感覚を事物とその雰囲気という像に託して語った表現である。そして、自分の用いている表現が像的な表現にすぎないということを自覚するためには、それらの表現をどんな目的でもって、どのように使っているのか、表現に関する問い乙を熟考する必要があるということだ。そして、ii~vi 章までの結論として、混乱した問いが像に依っていることを指摘する考察が置かれている（vii 章）。

以上で、像による概念の説明の問題点の指摘とそこからどのように脱却すればよいのか、すなわち概念の使用法への転換、換言すれば、精神的な過程に関する問い甲から表現に関する問い乙への移行が果たされた。ここから、議論は派生的な主題へと移る。運動と運動感覚（viii 章）、内観（ix 章）、事実と信念（x 章）、さらに対象と見ること、アスペクトを見ること（xi-1 章）に関する考察も、この流れのなかに位置している。これらは、身体とこころの複雑な関係から派生する主題である。

このうち、アスペクトを見るという主題が、つぎに焦点化される（xi-1 章）。この主題についても、像による説明から概念の使用法へという転換を、みてとることができる。しかしながらその主要な論点は、たとえば色やかたちを「見る」ことと、アスペクトを「見る」ことのちがいはどこにあるのか、新しい用法に関する問い丙である。つづけて、この同じ問い丙を、意味感覚に関する表現について考察する（xi-2 章）。いずれに場合にも、新しい用法とは、問題の対象や言葉を新しい状況において、それ自体とは別の対象と結びつけることによって成立しているということが指摘される。以上は、概念の使用法に関する考察の範疇と言ってよかろう。

そして、xi 章の最後に論じられるのが、他人のこころに関する不確実性という主題である（xi-3 章）[114]。そこでは、他人のこころの不確実性とは、個別事例に係わるのではなく、われわれの

印象の『体制』を色やかたちをと一緒にするひと」（PI2xi134, LW1 443）とは、ケーラーのことであるし（cf. RPP1 1023）、「その言葉がのどまででかかっている」こと、本稿にひきつけて言えば「萌芽」として存在するはずの「意味」を、意識のなかに生じることと考えているのは、ジェームズである（cf. PI2xi298, 299, LW1 828, 841）。

114　準備稿において、この主題はアスペクトに関する考察の後ろにあったが、アスペクトと意味盲という二次手稿の考察を前に出したことによって、この主題を後に置くことになったのであろう。

自然誌に由来することが示されている。この考察は、i 章（生活の図柄）に関連し、やや総論的な側面をもつと言えよう。

以上の考察を踏まえ、第 II 部の構成を一覧で示す。

図 11-1　『探究』第 II 部の構成とムーヴメントの関係

位置づけ	章（節）番号	スレッド	登場ムーヴメント（本稿章番号）
総論	i (1-6)	生活形式、生活の図柄（γ）	MIV（８章３節）
像による概念の説明から概念の使用法への転換（問い甲から乙へ）	ii (7-16)	多義語の意味（β2）	MII（６章２節）
	iii (17, 18)	表象像と志向性の関係	MII（６章２節）
	iv (19-26)	こころの像	MII（６章３節）
	v (27-34)	心理学（θ）	MII（６章３節）
	vi (35-51)	意味感覚（δ）	MII（６章３節）
結論	vii (52-55)	像（κ）（例：夢（λ））	MII（６章２、３節）
派生的考察	viii (56-66)	運動感覚（π）	MIII（７章１節）
	ix (67-85)	内観（ζ）	MIII, LW1（７章１節）
	x (86-110)	信じる、思う（η）	MIII, LW1（７章１節）
概念の使用法（問い丙）	xi (111-364)	アスペクト等	
	|xi-1 (111-261)	アスペクトを見ること（ε）	MIII~IV、LW1（７章～１０章）
	|xi-2 (261-300)	意味感覚の表現（δ）	LW1（１０章２節）
i 章と関連する考察	|xi-3 (301-364)	他人のこころ（μ）	MIV, LW1（８章３節）
総論	xii (365-367)	概念形成（γ）	MI（５章２節）
追加的考察	xiii (368-370)	思いだす（λ）	LW1, MS144
総論	xiv (371, 372)	心理学（θ）	LW1

雑駁に言えば、つぎのような構造をみてとることができるだろう。すなわち、ii~xi-2 章において、心理学的諸概念の像による説明からその使用法への転換という本論、およびいくつかの派生的な考察が展開されている。そしてその前後に、かれ自身の言語観（i, xi-3, xii 章）や批判的に検討されている心理学への評価（xiv 章）といった総論的な思考が置かれることで、ii~xi-2 章が位置づく枠組みを与えているということである。

では、以上のような内容と構成をもつ『探究』第 II 部を、ウィトゲンシュタインが作成した目的とは何であったのか。それはやはり、概念、とりわけ心理学的諸概念の像による説明からその使用法への転換を示すためということになろう。

準備稿から二次手稿までの思考を振りかえれば、かれが取りくんだ課題とは、哲学的な難問はどうしたら解消できるのか、その方法を考察することであったと言える。そして、そのための方法を模索した結果、かれが見いだしたのがつぎのような思考のステップであった。すなわち、難問（たとえば、「あのとき……と意味した」とは本物の体験なのか）をまちがった仕方で扱うと、われわれは絶望的な状況に陥ることをまず理解することである。それゆえ、意味体験とアスペクトを見るという主題が、集中的に考察されたと言える。というのも、過去形で意味を語ることに

内包されたジレンマや、「として見る」に備わったパラドクシカルな特徴に、われわれは難問を見てとるからである。そしてつぎに必要なのは、そうした混乱に巻きこまれるときにわれわれはしばしば像的な表現を用いているということを自覚することである。そのうえで、像に基づいて立てていた問い（精神的な過程に関する問い甲）を、別の問い（表現に関する問い乙、新しい用法に関する問い丙）で置き換えることである。それはすなわち、われわれの言語実践を適切に理解することであったと言えよう。

準備稿における以上の成果を、かれは「概念の説明において、概念の像の代わりに概念の使用法を置いた」（LW1 271）と表現した。そして、『探究』第 II 部において、その思考過程をほぼそのままの順序で再現したということは、こうした思考のステップをそのまま提示することが、意図されたのではないかと推察される。それゆえ、第 II 部におけるかれの目的とは、心理学的諸概念の像による説明からその使用法への転換を提示することであったと考えられる。

結論　準備稿の系譜的分析は『探究』第 II 部の解明に資するか

以上、心理学の哲学テキスト群における準備稿（MSS130 中盤～137 前半）の系譜的な分析という方法を用い、『探究』第 II 部の主題と構造を解明した。序論で提示した本稿の課題がどこまで実現できたのか、各問いにどのように解答したのかを、まとめておきたい。

まず、心理学の哲学テキスト群における個別的主題の系譜的分析（課題２）には、主に本稿２部において取りくんだ。それぞれの主題がどのように形成、展開されたのか（問２－１）についてごく簡単に振りかえりたい。多くのスレッドが登場したが、主軸となったのは、意味体験（多義語の意味（β2）、意味感覚（δ））と像（κ）、そして、アスペクトを見ること（ε）、概念形成と生活形式（γ）である。これらはすべて、準備稿の初期段階（MI）から登場し、前半（MII）では、意味体験と像が、後半（MIV）ではアスペクトを見ることが主題化された。意味体験（β2、δ）とアスペクトを見る（ε）という主題は、ともに哲学的な難問（それは本物の経験なのか）を引き起こす事例として取りあげられており、この難問に対処する方法として、概念の像による説明からその使用法への転換が図られたと言うことができる。それは、スレッドに即して言えば、混乱した像（κ）からわれわれの生活形式における言語使用（γ）への転換と言い換えてよいだろう。以上が、各主題はどのように連関しているのか（問２－２）への解答である。

以上の成果に基づいて、『探究』第 II 部の全体像の解明（課題１）は、どこまで達成されたのか。まず、第 II 部がどのように構成されているのか（問１－２）と言えば、準備稿の思考の流れがほぼそのまま再現されたということになる。そしてそれゆえ、第 II 部の目的とは（問１－１）、準備稿の思考、すなわち概念の像による説明からその使用法へという転換を示すことだと、本稿は結論づけた[115]。

以上を踏まえ、本研究の特長を、先行研究との比較を通じて、明らかにしたい。

心理学の哲学に関する先行研究は、以下の三つに大別することができた（２章）。すなわち、その目的を心理学的諸概念の分析と考える Hacker, Schulte らに代表される解釈（一）、ウィトゲンシュタインの全哲学の目的を治療と考える *New Wittgenstein* から帰結する解釈（二）、そして、哲学的な混乱の解消に加え、われわれの言語実践を扱う新しいやり方の提示があると考える Hutto, Kuusela に帰した解釈（三）である。先にも述べたように、哲学的な混乱の解消にとどまらない哲学的な思考が展開されているという点において、本稿は解釈（三）に与する。

解釈（一）、（二）の問題点から振りかえりたい。まず、解釈（一）をとれば、『探究』第 II 部を含む心理学の哲学テキスト群は、感覚や情動、知覚といった心理学的諸概念を個別的に分析する、文法的な素材集になるはずである。しかしながら、このテキスト群において、意味体験とアスペクトを見るという、心理学的概念全体からみれば、特殊な事例に紙幅が割かれていること、また、『探究』第 II 部が数段階の編集を経て作成されていることは、この解釈と齟齬をきたしている。そして、ウィトゲンシュタインの目的を治療だという解釈（二）をとれば、治療すべき対話者が想定されていない考察、とりわけ心理学的諸概念の分析をどう扱うかが、問題となる。

まず、心理学的諸概念の分析にどのような役割があったのかという点から明らかにしたい。そ

115　ただし、『探究』第 II 部の完全な解明には、そこに載録された各節の内在的な読解が必要不可欠である。この点は、今後の課題としたい。

れはあくまで、「として見る」がどのような概念なのかを明らかにするための準備として必要とされたということである（７章２節、８章１、２節）。つまり、心理学的概念の分析は、ウィトゲンシュタインにとって最終的な課題ではない。したがって、心理学的概念の分析を考察の目的と考える解釈（一）は、誤りと言わざるをえない。また、『探究』第 II 部の目的に哲学的難問の解消があることを踏まえれば、解釈（一）にあった問題点にも解答することができる。すなわち、アスペクトを見ることと意味体験が考察の対象になるのは、これらが哲学的難問を引き起こしがちだからである。そして、第 II 部が編集作業を経てタイプされたのは、これが素材集ではなく、概念の像による説明からその使用法への転換を示すという目的の下に作成されたからである。この課題がもっとも適切に表現される節の選定や章立てを追及するために、かれは骨を折ったのだと考えられる[116]。

しかし、心理学的概念の分析が「として見る」を解明するための準備作業であったということは、解釈（二）を支持するのではないか。というのは、「として見る」に関する概念的探究、すなわち新たな用法に関する問い丙が、精神的な過程に関する問い甲に置き換えられるべき問いとして提示されたということは、その準備作業である心理学的概念の分析も、像によって引き起こされた混乱の解消という目的の下に包摂される議論だと解釈することができるであろう。また、これが準備作業であることを踏まえれば、必ずしも治療すべき対話者がいる必要もないとも言える。

たしかに、『探究』第 II 部で明示的に語られているのは、概念の像による説明からその使用法への転換であり、その第一の目的は、哲学的な混乱の解消と言える[117]。換言すれば、『探究』に載録された考察を検討するだけでは、この指摘に反論することはできないということである。心理学の哲学テキスト群が何かしら治療以上のものを示していると主張するためには、準備稿においてほのめかされていながら、『探究』第 II 部までの道程において十分に回収できないまま残していたいくつかの点について、紐解く必要がある。まず注目したいのは、ウィトゲンシュタインがくり返す「新しい」という言い回しである。

かれは、自分の課題を表現するのに、たびたび「新しい」という形容を冠している。そもそも、難問を解くために「新しい思考法」を確立せねばならないというのが、最初の大きな課題であったし、またそのために必要なのは「新しい表現」だとされた（cf. MS131 pp.48-49, 1946.8.15, CV p.55）。そして、概念的探究によって見いだされるのは「新しい配列」であった（cf. MS134 pp.153-154, 1947.4.27, RPP1 950）。

三年にもわたる考察なのだから、これまでとは異なる何かしら「新しい」側面を希求するのは当然であろうと思われるかもしれないが、ウィトゲンシュタインの哲学において、とりわけかれの運命に対する態度を踏まえれば、「新しさ」を求めるのはそれほど容易ではない。というのも、かれが哲学において求めるのは、「与えられたものを甘受する」ことだからだ（cf. MS130 pp.154-155, 1946.5.26-7.22）。換言すれば、新しい対象を創造したり、われわれの言語実践に変革を促したりすることで、新しさを産みだすというのは、かれの本意ではないということになる。

116　ただし、われわれに残された『探究』第 II 部が、ウィトゲンシュタインの意図した最終形態なのかという問題は残されている。さらなる編集の計画があった可能性は、排除できない。

117　「哲学的混乱の解消」の範囲を、自分が像による説明をしていることを自覚するところまでとするか、そうした説明に代えられるべき概念の使用法の探究まで含めると考えるのかという論点で、争うことはできよう。

では、与えられた現実をそのままに保持しながら、新しさを産みだすというパラドクシカルな課題をどう実現すればよいのか。ウィトゲンシュタインは、自身が依って立つ方法論を直接的に述べることはほとんどない。それゆえ、われわれに示されているのは間接的な証拠ばかりではあるが、それらをひろって、一つの解釈を描いてみたい。

与えられたものは変更せずに、新しいものを産みだすということで、思いだされるのは、「同じだ――そしてそれでも、同じではない」（LW1 174）と表現されるアスペクトの転換である。アスペクトを見るという現象においては、対象は同一のままに「新しい知覚」（PI2xi130, LW1 494）が成立している。結論から言えば、ウィトゲンシュタインの求めた新しさとは、アスペクトがひらめくことによって得られる「新しい知覚」、新しい「ものの見方」（WLPP pp.168, 285, cf. Malcolm(1958) p.50）[118]であったのだと、本稿は考える。

「意味を体験する」という表現を例に、どのような思考の道筋をたどってアスペクトがひらめくのかを、具体的にみていきたい。「わたしはあのとき、その『あおい』という言葉を、植物の意味で体験した」などと、われわれは言うことがあるかもしれない。そして、その意味の体験とは何だったのかと問われれば、「意味の体験とは、葵の葉のイメージが思い浮かんだということだ」などと答えるだろう。このことから、「葵」という言葉の意味とはその言葉を聞いたときに浮かぶ表象像だと説明するとすれば、これは「意味」という概念の像による説明にほかならない。しかしいま問題なのは、われわれはどうしたらそのことに気づくことができるのか、そして、これとは別のものの見方はどうやって獲得されるのかということである。

ウィトゲンシュタインの思考を振りかえってみれば、意味を体験しないひと、意味盲という想定が、最初に重要な役割を果たしていた[119]。というのも、この想定を通じて、特定の体験の有無は、多義語の意味にとっても、意味感覚にとっても重要ではないこと、意味盲のひとにできないのは、むしろ、言葉を聞いた際の体験を「意味」と結びつけて語ることだと、われわれは理解することができたからである（MS131 pp.29-30, 1946.8.12, RPP1 243, ６章２節）。いわば、「意味を体験する」などと語っていたときの体験を、「言葉が意味で満たされる」という「像〔比喩、イメージ〕」（MS135 pp.82-83, RPP1 1060, 1061, PI2xi265）の下で（１０章３節）、要するに、空っぽの容器（＝言葉の線や音といった物理的な側面）に満たされる内容（＝言葉に随伴するはずの精神的なもの、意味）として、自分は見ていたのだと、気づいたのである。

ここでウィトゲンシュタインは、「わたしはあのとき、その『あおい』という言葉を、植物の意味で体験した」というこの文が、実際にはどう使われるのかを考えさせる。すると、それはたとえば、「あおい」という言葉を聞いたとき葵の葉がありありと思い浮かんだとか、そのようなイメージを呼び起こす「あおい」という言葉を印象深く聞いたといった、体験の表明であったことに、われわれは思い至る。つまりは、かつて自分が結びつけていた「意味」とは別のものとの新しい関係、その文が位置づく新しい文脈が提示されるのである。そして、この関係性のなかに、

---

118 『講義 1946-47』には、ウィトゲンシュタインが自身の哲学的な方法論について語った記録が残されている。Malcolm も同じ日と推測される講義へ言及しているが、講義録を作成した Shah, Jackson は「ものの見方（point of view）」、Malcolm は「〔概念を〕見る別のやり方（other ways of looking at it〔a concept〕）」と記録しており、その文言にちがいはある。詳細は、菅崎(2017a)にて論じた。

119 「意味盲」という想定がまずされていることは、ある概念について考察するときに、われわれとは異なる言語や生活を想像するようかれがたびたび促すこと（５章２節５項）とも整合する。

先の一文を置いてみると、その文と、感嘆のため息や印象深い出来事を思いだすといったこととの類縁性を、われわれは見いだす[120]。そしてこのことが理解できれば、われわれは、「意味を体験する」「意味で満たされる」といった言葉を、意味に関する説明だなどとはもはや考えなくなるであろう。

さて、この過程で成されたこととは何か。それは、「意味を体験する」という表現のアスペクトを転換したと言えるだろう。すなわち、それを意味の説明として見ることから、感嘆のふるまいとして見ることへの転換である。「意味を体験する」という表現は、ときにわれわれを哲学的な混乱へと陥れるが、また他方で、こうした表現をわれわれが実際に使うということ自体は、否定しようのない「甘受される事実」（LW1 78）である。それゆえ、この事実は変更しないまま、われわれのものの見方を転換するというのが、ウィトゲンシュタインの目指したことではなかろうか。換言すれば、概念の像による説明からその使用法への転換とは、アスペクトの転換にほかならないのである。

翻って言えば、アスペクトのパラドクシカルな構造は、かれの方法論にとっては、与えられたものを甘受しながら、新しいものを獲得するという困難な課題を乗り越えるための有益な特徴であったのだと言える。したがって、アスペクトを見るという主題は、二つのまったく異なる目的の下に展開されていたことになる。すなわち、哲学的な混乱の解消と自身の方法論の理解である。前者の目的にとって、アスペクトを見るという主題は、意味体験等と同列に並ぶ哲学的な難問の一例にすぎないが、後者の目的にとっては、むしろそれらの事例を考察するための方法論において基幹をなす概念である。それに応じて、そのパラドクシカルな構造の評価も、「として見る」に関する概念的探究に与えられた役割も、二つの仕方で理解されねばならない。

表 12-1　アスペクトを見るに関する二種類の探究

目的	パラドクスの評価	概念的探究の役割
哲学的な混乱の解消	難問の源泉	混乱した問いに代替されるべき考察
方法論の理解	方法論に必要な性格	自分の方法論が依ってたつ基幹概念の解明

アスペクトに備わったパラドクシカルな構造は、一方では、哲学的な難問（それは本物の視覚体験なのか）の源泉となる。そしてこの難問に解答しようと、そのときこころのなかで何が生じるのかという精神的な過程に関する問い甲を立てれば、われわれは哲学的な混乱に陥る。そこで、この問いに代わって考察すべきは、二つの「見る」のちがいがどこにあるのかという、新しい表現に関する問い丙、すなわち概念的探究である。それに対して、目の前の現実を変更せずに、われわれのものの見方を変更するというかれの方法論にとっては、アスペクトのパラドクシカルな構造は、その実現のために求められる性格となる。そして、そうした方法論を確立するという目的の下では、「として見る」に関する概念的探究とは、自身の方法論が依ってたつ基幹概念の解明ということになる。

以上を踏まえれば、心理学の哲学の目的を治療のみに限定する解釈（二）と、本稿の立場のち

120　アスペクトを見ることと概念的探究の類縁性は、講義と同時期の手稿においてすでに指摘されていた（cf. MS134 pp.153-154, 1947.4.27, RPP1 950, 7 章 2 節 2 項）。

がいも明確になる。解釈（二）は、アスペクトを見るという主題に、一方の目的、すなわち哲学的な混乱の解消という目的しか読みとらない。それゆえ、「として見る」に関する概念的探究、また心理学的諸概念の分析にも、混乱した問いに代替されるべき考察という役割が与えられるにとどまるのである。それに対して本稿では、アスペクトを見るという主題に、哲学的な混乱の解消と自身の方法論の理解という二つの目的があると考える[121]。

また、哲学的な混乱の解消に加え、われわれの言語実践を扱う新しいやり方の提示があると考える解釈（三）に対しては、新しいやり方の内実について一つの理解を本稿は与えることができる。すなわち、そのやり方とは、われわれの使っている表現を新しい文脈に置きなおすことで、それに対する新しい見方を獲得するという方法である。

以上示したように、哲学的な混乱の解消に加え、われわれの用いている表現に関する新しい見方の獲得という二つの目的を、心理学の哲学テキスト群（準備稿、および、その総括である『探究』第 II 部）に、みてとることができるという本稿の解釈は、準備稿の系譜的分析によって、可能になった。というのも、まず、前章で確認したとおり、準備稿の思考の流れと、『探究』第 II 部の章立てが軌を一にしていることは、準備稿の時系列を追わねば理解できない。つまり、第 II 部の目的が、概念の像による説明からその使用法への転換を示すことにあるということは、準備稿の系譜的分析によってはじめて明らかにできることであったと言える。そしてまた、『探究』第 II 部を読んでいるだけでは、その目的が、哲学的な混乱の解消にあるというところまでしか理解することはできず、新しいものの見方の獲得というかれの方法論が、そこに示されていることをみてとることはできない。かれが提示する新しいやり方を理解するためにはむしろ、第 II 部に載録されない考察が重要であった。それは、『心理学の哲学１、２』および『探究』第 II 部と付きあわせながら、準備稿を追うことによってはじめて得られた成果だと言える。

121　アスペクトとウィトゲンシュタインの方法論との関係は、Baker(2004)で先駆的に述べられている。また、鬼界(2018)は、『探究』第 II 部において「アスペクト」が考察された理由を解明しており、参考にした。

参考文献

・本文で言及したもののみを以下に挙げる。

・ウィトゲンシュタインの著作、および講義録と、その他の著作を分けて示す。

・その他の文献については、著者名のアルファベット順に並べている。

・同一の著者の著作関しては発刊順に掲載している。

ウィトゲンシュタインの著作

未刊行の遺稿については、*Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition*", Oxford University Press, 2000. を参照した。

Tractatus Logico-Philosophicus, Routledge and Kegan Paul, 1922.（奥雅博 訳『論理哲学論考』,ウィトゲンシュタイン全集 第１巻, 大修館書店, 1975., 野矢茂樹 訳『論理哲学論考』, 岩波文庫, 2003.）

The Blue and Brown Books – Preliminary Studies for the 'Philosophical Investigations', Harper and Row, Publishers, 1958.（大森荘蔵 訳『青色本・茶色本』, ウィトゲンシュタイン全集 第６巻, 大修館書店, 1975.）

On Certainty, Blackwell, 1969.（黒田亘 訳『確実性について』, ウィトゲンシュタイン全集 第９巻, 1975.）

Remarks on Coulor, ed. by G.E.M. Anscombe, Basil Blackwell, 1977.（中村昇、瀬嶋貞徳 訳『色彩について』, 新書館, 1997）

Remarks on the Philosophy of Psychology, vol.1, ed. by G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, Basil Blackwell, 1980.（佐藤徹郎 訳『心理学の哲学』１, ウィトゲンシュタイン全集 補巻１, 大修館書店, 1985.）

Remarks on the Philosophy of Psychology, vol. 2, ed. by G.H. von Wright and Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1980.（野家啓一 訳『心理学の哲学』２, ウィトゲンシュタイン全集 補巻２, 大修館書店, 1988.）

Last Writing on the Philosophy of Psychology: Preliminary Studies for PartII of Philosophical Investigations, vol.1, ed. by G.E.M. Anscombe, G.H. von Wright and Heikki Nyman, Basil Blackwell, 1982.（古田徹也 訳『ラスト・ライティングス』, 講談社, 2016, pp.12-263）

Last Writing on the Philosophy of Psychology: The Inner and the Outer, vol.2, ed. by G.H. von Wright and Heikki Nyman, translated by C.G. Luckhardt and Maximilian A. E. Aue, Basil Blackwell, 1992.（古田徹也 訳『ラスト・ライティングス』, 講談社, 2016, pp.12-263）pp.266-410）

Culture and Value, Revised Edition, ed. by G.H. von Wright, Basil Blackwell, 1998.（丘沢静也 訳『反哲学的断章—文化と価値』, 青土社, 1999.）

Philosophical Investigations, Revised 4th ed., ed. by P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell, 2009.（藤本隆志 訳『哲学探究』, ウィトゲンシュタイン全集 第８巻, 大修館書店, 1976., 黒崎宏 訳・解説『『哲学探究』読解』産業図書, 1997., 丘沢静也 訳『哲学探究』岩波書店, 2013.）

講義録

Wittgenstein's Lectures on Philosophical Psychology 1946-47, noted by P.T. Geach, K.J.Shah, A.C. Jackson, ed. by P.T.Geach, University Chicago Press, 1989.

その他

Anscombe, G.E.M and Rhees, R(2001): 'Editor's Note', in Wittgenstein: Philosophical Investigation, The 3rd. ed., (ed. by Anscombe, G.E.M and Rhees, R), Blackwell Publishers.

Baker, G.P.(2004): *Wittgenstein's Method: Neglected Aspect*, Blackwell Publishing.

Bouveresse, Jaques(2007): 'Wittgenstein on 'Experiencing Meaning ', in *Perspicuous Presentations*, (ed. by Moyal-Sharrock, Daniele), Palgrave Macmillan, pp.75-94.

Budd, Malcolm(1989): *Wittgenstein's Philosophy of Psychology*, Routlage.

Chauvier, Stephane(2007): 'Wittgenstein Grammer and Philosophy of Mind', in *Perspicuous Presentations*, (ed. by Moyal-Sharrock, Daniele), Palgrave Macmillan, pp.29-49.

Cray, Alice(2000): 'Introduction', in *the New Wittgenstein*, (ed. by Cray, Alice and Read, Rupert) , Routledge.

Day, William and Krebs, Victor J. (ed.) (2010): *Seeing Wittgensiten Anew*, Cambridge University Press.

Diamond, Cora(1995): 'Secondary Sense', in *The Realistic Spirit: Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*, The MIT Press, pp. 225-242.

Egan, David(2011): 'Pictures in Wittgenstein's Later Philosophy', *Philosophical Investigations*, 34:1, Wiley-Blackwell, pp.55-76.

Finkelstein, D.H. (2001) : 'Wittgenstein's "Plan for the Treatment of Psychological Concepts"', in *Wittgenstein in America,* (ed. by McCarthy, G. Timothy and Stidd, Seam C.), Oxford University Press, pp.215-236.

Fischer, Eugen(2011): *Philosophical Delusion and its Therapy: Outline of a Philosophical Revolution*, Routlage.

Fogelin, Robert J.(1987): *Wittgenstein, Second Edition*, Routledge.

古田徹也(2018):『言葉の魂の哲学』, 講談社選書メチエ.

Goldstein, Laurence(2004): 'What does 'Experiencing Meaning' Mean?', in *The Third Wittgenstein*, (ed. by Moyal-Sharrock, Daniele), Ashgate Publishing Limited, pp. 107-124.

Hacker, P.M.S(2010): 'The Development of Wittgenstein's Philosophy of Psychology', in P. M. S. Hacker and J. Cottingham eds. *Mind, Method and Morality Essays in Honour of Anthony Kenny,* Clarendon Press, pp. 275-305.

Hanson, N.R.(1958) : *Patterns of Discovery*, Cambridge University Press.（村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』, 講談社学術文庫, 1986.）

———— (1969): *Perception and Discovery,* Freeman, Cooper and Co.（野家啓一, 渡辺博訳『知覚と発見――科学的探究の論理』（上）,紀伊国屋書店, 1982.）

Hutto, Daniel D.(2003): *Wittgenstein and the End of Philosophy: Neither Theorey Nor Therapy*, Palgrave Macmillan.

———— (2009): 'Lesson from Wittgenstein: Elucidating Folk Psychology', *New Ideas in Psychology*, 27, pp.197-212.

James, William(1950): *The Principles of Psychology, Authorized Edition*, 2vols., Dover Publications.

Kerr, Fergus(2008): *Work on Oneself : Wittgenstein's Philosophical Psychology*, The Institute for the Psychological Sciences Press.

鬼界彰夫(1998a):「『確実性について』の主題と構造」(上), 『言語文化論集』, 46, pp.149-179.

———— (1998b) :「『確実性について』の主題と構造」(中), 『言語文化論集』, 47, pp.53-96.

――――― (1998c)：「『確実性について』の主題と構造」(下), 『言語文化論集』, 48, pp.23-54.

――――― (1999):「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考」(1), 『言語文化論集』, 49, pp.39-127.

――――― (2000):「『確実性について』におけるウィトゲンシュタインの思考」(2), 『言語文化論集』, 52, pp.101-149.

――――― (2001):「ウィトゲンシュタイン最後の思考――『確実性について』第四部 : §§300-676 を巡って」, 『言語文化論集』, 55, pp.57-172.

――――― (2003):『ウィトゲンシュタインはこう考えた−哲学的思考の全軌跡 1912-1951』, 講談社現代新書.

――――― (2013):「感覚のパラドックスと私的言語を巡るウィトゲンシュタインの思想」, 『哲学・思想論集』, 38, pp.132-162.

――――― (2018):『理想と哲学――『哲学探究』とはいかなる書物か？』, 勁草書房.

――――― (近刊予定):『ウィトゲンシュタインの思考の生成過程――その理解のための根本概念と分析方法の確立の試み :『確実性について』の体系的読解を通じて―』, 皓星社.

Köhler, Wolfgang(1975): *Gestalt Psychology: The Definitive Statement of the Gestalt Theory*, Liveright Publishing Corporation.

Kuusela, Oskari(2008): *The Struggle against Dogmatism, Wittgenstein and the Concept of Philosophy,* Harvard University Press.

――――― (2013): 'Wittgenstein's Method of Conceptual Investigation and Concept Formation in Psychology' in *A Wittgensteinian Perspective on the Use of Conceptual Analysis in Psychology,* (ed. by Racine, Timothy P and Slaney, Kathleen L.), Palgrave Macmillan, pp.51-71.

Laugier, Sandra(2007): 'The Myth of the *Outer*: Wittgenstein's Redefinition of Subjectivity', in *Perspicuous Presentations*, (ed. by Moyal-Sharrock, Daniele), Palgrave Macmillan, pp.151-172.

Lurie, Yuval(2017): 'Psychological Concepts', in Understanding Wittgenstein, Understanding Modernism (ed. by Matar, Anat), Bloomsbury Academic Animprint of Bloomsbury Publishing Inc, pp.239-249

Malcolm, Norman(1958): *Ludwig Wittgenstein, A Memoir by Norman Malcolm, with a Biographical Sketch by G. H. von Wright*, Oxford University Press.（板坂元 訳『ウィトゲンシュタイン――天才哲学者の思い出』, 平凡社, 1998.）

Monk, Ray(1991): *Ludwig Wittgenstein :The Duty of Genius*, Vintage Books.（岡田雅勝 訳『ウィトゲンシュタイン−天才の責務』１, ２巻, みすず書房, 1994.）

Moyal-Sharrock, Daniele(2004): 'Introduction', in *The Third Wittgenstein*, (ed. by Moyal-Sharrock, Daniele), Ashgate Publishing Limited, pp.1-12.

野矢茂樹(1986):「〈…として見る〉の文法――ウィトゲンシュタインのアスペクト知覚について」,『理想』, 632, pp.150-161.

――――― (1988):「規則とアスペクト――『哲学探究』第 II 部からの展開――」, 『北海道大学文学部紀要』, 36(2), pp.95-135.

大谷弘(2014):「言語は規則に支配されているのか」,『哲学』, 65 号, pp.135-150.

Racine, Timothy p. and Slaney, Kathleen(2013): 'Introduction: Conceptual Analysis and Psychology: An Overview', *A Wittgensteinian Perspective on the Use of Conceptual Analysis in Psychology,* (ed. by

Racine, Timothy P and Slaney, Kathleen L.), Palgrave Macmillan, pp.1-9.

Schulte, Joachim(2000): *Experience and Expression, Wittgenstein's Philosophy of Psychology,* Oxford University Press.

———— (2013): 'Picture of the Soul', in *A Wittgensteinian Perspective on the Use of Conceptual Analysis in Psychology,* (ed. by Racine, Timothy P and Slaney, Kathleen L.), Palgrave Macmillan, pp.72-86.

菅崎香乃(2014):「ウィトゲンシュタイン『心理学の哲学に関する最終草稿 1』と手稿(MS137 後半、MS138)の比較 ——載録されなかった内容を中心に」,『筑波哲学』, 22 号, pp.114-128.

———— (2017a):「ウィトゲンシュタイン『心理学の哲学に関する講義 1946-47』について——講義記録間の対応関係、および遺稿との時間的連関」,『筑波哲学』, 25 号, pp.30-38.

———— (2017b):「「心理学の哲学」最初期の思考——ウィトゲンシュタインの関心はどこにあったのか」,『これからのウィトゲンシュタイン——刷新と応用のための１４編』（荒畑靖弘, 山田圭一, 古田徹也 編著）, リベルタス出版.

———— (近刊予定):「スレッド—シークェンス法の概要とその有効性」, 鬼界彰夫(近刊予定) 所収, ページ数未定.

ter Hark, Micheal(1990): *Beyond the Inner and the Outer, Wittgenstein's Philosophy of Psychology*, Kluwer Academic Publischer.

———— (2011): 'Wittgenstein on the Experience of Meaning and Secondary Use', *The Oxford Handbook of Wittgenstein*, (ed. by Kuusela, Oskari), Oxford University Press, pp.499-520.

Venturinha, Nuno(2010): A Re-Evaluation of the *Philosophical Investigations* ', in *Wittgenstein After His Nachlass* (ed. by Venturinha, Nuno), Palgrave Macmillan, pp.143-155.

Verdi, John(2010): *Fat Wednesday: Wittgenstein on Aspects*, First Dry Books Edition.

von Wright, G.(1982): ' The Origin and Composition of the *Philosophical Investigations*', in *Wittgenstein*, Basil-Blackwell, Oxford, pp. 111-136.

———— (1993): 'The Wittgenstein Papers', in Wittgenstein: *Philosophical Occasions 1912-1951,* ed.by Klagge, James and Nordmann, Alfred, Hackett Publishing Company, 1993., pp. 480-515.（飯田隆 訳「ウィトゲンシュタインの遺稿」、『ウィトゲンシュタイン読本』, 法政大学出版局, 1995, 所収, pp.335-374）

山田圭一(2015): 「アスペクトの転換において変化するもの——ウィトゲンシュタインの二つのアスペクトの分析を通じて」,『画像と知覚の哲学——現象学が分析哲学からの接近』（小熊正久, 清塚邦彦 編著）, 東信堂.

米澤克夫(2008):「ウィトゲンシュタイン哲学の発展にゲシュタルト心理学はどのような意味を持ったのか——物体認識と表情認識・他人の心の認識の問題を巡って（再考）（１）」,『聖心女子大学論叢』, 第 110 集, pp.163-212.

———— (2009): 「ウィトゲンシュタイン哲学の発展にゲシュタルト心理学はどのような意味を持ったのか——物体認識と表情認識・他人の心の認識の問題を巡って（再考）（２）」,『聖心女子大学論叢』, 第 112 集, pp.134-192.